Li-tweet 二月号

特集

二・一四 恋愛事変

恋愛を殺さないためにッ！

うさぎ／常磐誠／る／小野寺那仁／日居月諸

自由創作

巻頭詩　崎本 智（６）

小説　しろくま／芦尾カヅヤ／とーい／安部孝作

今月のレビュー

とーい／芦尾カヅヤ／安部孝作／小野寺那仁／崎本 智（６）

Li-tweet 二月号

目次

巻頭詩

繭たちのさざめき　崎本 智（6）　3

特集　二・一四恋愛事変

ストレインヂデイズ　うさぎ　6

行くな！　ガーゴン　常磐誠　22

雷の内部　る　32

其のX。真央。初恋地獄篇　小野寺那仁　35

横を向いたまま　日居月諸　46

自由創作

浜辺の童　しろくま　58

魚人岬　芦尾カヅヤ　61

帰省　とーい　63

ランナーたち　安部孝作　69

黒牛の絵画　安部孝作　76

今月のレビュー

立ち食いそばのラーメン　とーい　80

必読！　ネット文藝　芦尾カヅヤ　81

ガン・ガン・ガン　安部孝作　82

『タイマ』嶽本野ばら　小野寺那仁　85

朝靄の食感　崎本 智（6）　87

編集後記　88

記録　89

巻頭詩

繭たちのさざめき

崎本 智（6）

失われた翡翠色の時間が　クラースナヤ・プローシシャチ　に点在
する
帽子をかぶった少女たちが水たまりのようにできた穴を避けながら
「秘密　秘密」ということばを繰り返す　熱がさまされて　ひたす
らに熱がさまされて
ポシェットからいまではもう存在しない街の名前が　広場におと
されても
クラースナヤ・プローシシャチの婦人たちは　だれも振りかえるこ
ともなく
毛皮をきて　襟巻をつけて歩いている
高等学校がいっしょだったのかもしれない　ねつ造された記憶か
もしれないが
僕は航空課に進学して　彼女はもう存在していない街にとらわれ
つづけていて
少数民族のことばを専門課程に選択して　故郷のことを考えつづ
けていた
しょうが入りの紅茶に蜂蜜をたらして暖炉をみつめるのが好きだ
ったあなた
街はずれの鉄橋の下では蝙蝠たちの死骸が積み上げられている
「灰いろの雲へお供え」鍵盤をたたきながら音楽学校に通う生徒た
ちはそういった
調子外れのレの音が曇り空の広場におきざりにされていた

うまれるまえの記憶　名前をつけるならそんな場所
たったゆいいつあなたと共有できた冬の花火　花火師たちは河畔
林のなかに隠れてしまった　空の祭典　ゆれる水面がまぼろしを
つれてきて　祭りの音楽がきえたとき静寂と共に星座たちがあと
に残された　あなたは星座をみつけるのが得意だった

冬の花火をかつて水面に映した湖で別れをつげるための最後の時
間
太陽と星のすれ違う宵闇の一瞬に枯れ枝と落ち葉のなかで火の粉
が燻りつづけている
火はうまれてもことばたちが矢継ぎ早にうまれることはなくて火
は沈黙とあいしょうがよかった　繭のように僕たちはふわふわの
毛布にくるまって　午睡にあらわれた翡翠色の時間のなかへおち
ていく　砂時計の砂はもう元にはもどせない
白い枝が雪の上に音もなくふってきた　雪の重さに耐えられなく
なったのかもしれない　ぐるぐるとまわりの景色がうずをまくよ
うに廻りはじめていて　認識の糸が彼女の記憶によってほぐされ
てしまいそうだった　名前をおもいだすこともできない　顔をお
もいだすこともできない　彼女という代名詞だけがあの広場にお
きざりにされたレの音みたいに　火のなかで爆ぜている

連想することばから飛び火して唇をなぞりながら感触をおもい起
こしていた
メモリのなかは曖昧なことばでいっぱいで写真を保存することが
できない
月が地球から見て蝕を孕むとき　地球に残した彼女のことをおも
う
忘却旋律をきいたときすべてを無にすることができた　だから僕
には感触すら残っていないのできっと唇の感触は記憶違いの産物
に過ぎない

バッハ／ゴルトベルク変奏曲がだれもきこえないくらいのちいさ
な音で
「静かの海」の第18地区にある無人駅でながれている　ゆらゆらと
幽霊のように漂う調べ　残り火が弔いの日を予感させた　調べは
きゅうに色調をかえてだれもいない空間を彷徨っている　演奏は
20世紀のオーケストラによるものだ　埃が光を浴びて目の前をと
んでいく　それを目の錯覚といいきることはできないだろう　僕
は帰球許可が下りたのにまだこのような場所にいる　胸がくるし
くなるほどあなたに逢いたい　凡庸なことばが涙をひきつれてや
ってくる　感触としての記憶　無人駅には僕以外にだれもいない
真空の沈黙が永遠によこたわっていた

38の実験プログラムはすべて終了　同期生たちは祖国に帰っていった
クラースナヤ・プローシャチで帽子をかぶった少女たちが　輪になっておどりながら「秘密　秘密」といっていたのが　かろうじて渇かないで僕の瞼に残っている
あの曇り空の日　僕は微かに何かをとらえていた　誰の眼にも一瞬にしかうつらない　時間の裂け目を　人工知能でも解析することができない幕間を
「静かの海」の暗闇で　目を瞑ることは何を意味する？　僕は誰に問いかける
問いをたてることが　月面に国旗を競ってたてたこととどう違うのだろう　そこにどれだけの血がながれたのだろう……
しょうが入りの紅茶に蜂蜜をたらして暖炉をみつめるのが好きだった彼女
あの部屋に洗濯物はずいぶんと溜まっているだろう　太陽はそれを見過ごしているのかもしれない　星たちは気がついているのに

繭玉の雨が風に色をあずけながら
春の嵐に溶けていく
手からこぼれるように
冬は失われた翡翠色の時間を抱いて去っていく……

特集

二・一四 恋愛事変

ストレンヂデイズ

うさぎ

小春日和の日曜日、午後の公園は散歩にちょうどいいのかもしれない。子供と仲良く歩く同じ年や少し上くらいの夫婦や手をつないで楽しそうに会話をしている若いカップルなどいろんな人々をネット越しに眺める。何組かは僕たちがやっていることに興味を示して止まる。

僕もそうなりたいと思って、自分と彼女をその二人に重ね合わせる。幸せってこういうのでいいのかもしれないなと感じる。ビックになりたいとか金持ちになりたいとかそういう大きい夢みたいなものより、安心して眠れる彼女の側に居たいと願う。彼女であるミズホと不自由しない程度のお金でゆっくりと生活できたらと思う。

突然の金属音で僕の意識が野球に戻される。球は僕の守っているライトとセンターの中間辺りに飛んできている。センターから走ってくる仲間の足が遅いので、僕が「オーライ、オーライ」と声をかけながら走り込む。飛んでくる玉が、勢いを無くし重力に引っ張ら

れて落っこちてくる。僕のスピードと玉の落下速度を計算すると、捕球するにはギリギリだった。「間に合わない」なんて思ったら、絶対に間に合わないから後ろ向きなことは一ミクロンも頭では考えない。全力に走って間に合わなかったら、僕の日頃の努力が欠けているっていうことだ。僕はスピードを上げて加速する。その時、若干強めの風が僕の背中を押した。しかし、ボールには向かい風になるので、僕が再計算して落下ポイントを修正する。このままでは取れないと判断して、スライディングをした。グローブを掲げてボールを取ったことを審判にアピールする。審判が三つ目のアウトを宣告して、攻守交代となった。

「ナイスプレー」

チームメイトとそれぞれハイタッチをする。でも、褒められるのは恥ずかしかった。この草野球チームの監督兼選手である僕の高校の同級生が笑顔を浮かべて僕に近寄ってくる。

「シュン、ナイスだよ。お前、今日は調子良さそうだな」

「そんなことないよ。三打席全部三振だよ」

「またまたぁ、そういう前フリをして打つんだろ？　彼女も来てるんだし」

「そんな思春期みたいな頑張りはしないよ」

そう言いながら、ベンチから出てネクストバッターズサークルで軽く素振りをする。

ミズホは、今日の試合を観戦に来ている。バックネットで僕たちのベンチの近いところで見ている。その姿はまるでプロ野球選手の練習を釘付けで見ている子供のようだった。

僕は監督がかけた呪いの言葉が頭をよぎる。ミズホを見ると、僕と目が合うと「頑張って」と口パクで言っていた。

ミズホのことを遮るために、ヘルメットを目深にかぶって滑り止めスプレーをバットに吹きかけた。

前の打者も、その前の打者もフォアボールで、九回の裏ノーアウトランナー一、二塁の状況で僕に打席が回ってきた。野球の神様は僕を試しているようだった。僕が、ホームランを打てば逆転でヒーローになるし、最悪のゲッツーが出ればＡ級戦犯者になる。

僕は一息大きく息を吐いてバッターボックスに立つ。

外野手の前で落ちるようなヒットを打つイメージをして、僕はバットを一度振る。そして、僕が構えるとピッチャーもセットする。相手がサインを確認し投球フォームに入る。僕は息を止めた。早いボールが僕の立っている位置より外のところに来る。僕は一瞬だけ迷うが見送った。

「ボール」と審判の曇った低い声がする。そこで初めて僕は呼吸をする。両チームのまばらな声援が聞こえる。

僕は、もう一回最初と同じことをする。さっきより早いリズムでピッチャーが投げてきた。さっきより、内に入ってちょうどいい高さでボールがやってきた。僕の腕が自然に出て行く。打った瞬間に感触があった。打たれた白球は高く遠くへと飛んでいく。その場にいた全員が同じ方向を見つめる。外野手は全員上を見上げながら追いかけるのを止めた。ボールは、フェンスの上を通り越して草が生

い茂ったライトスタンドに入った。
チームの全員が僕を出迎えるためにベンチを出てきた。僕はみんなにガッツポーズをした。三塁ベースを踏む時にミズホがネット越しに見える。彼女は自分のことのように飛び跳ねながら喜んでいた。
僕がその日のヒーローになった。

「乾杯」
僕とミズホはグラスを軽くぶつけた。
「大丈夫なの？　みんなと一緒じゃなくて」
「みんなと一緒だと、ミズホに悪いよ」
「だって、今日の主役だよ」
彼女の瞳が少し大きくなった。何かを訴えてきている。たまにこのようなことを彼女はするが、僕には彼女のメッセージが一度も読み取れないでいた。
「僕はミズホと居たいんだ」
「わかった」
トーンが一個高くなった返事が聴こえた。僕の応えは間違いではなかったようだ。少し安心する。
「だけど、今日のシュンくんすごかったねぇ。ホームランだよ。普通は打てないよぉ」
子供にインタビューをされているみたいでくすぐったかった。
「まぁね」
「かっこよかったなぁ」

彼女は本当に幼い反応をする。一口しかグラスに口をつけていないのに、彼女は酔っぱらっているようだった。
彼女の行動を肯定するなんて、自分がバカなのかもしれない。だけど、付き合ってから初めて僕が草野球をやっているところに彼女は来たのだ。そして、たまたま今日は僕が活躍したのだ。だから、もしかしたら他の人でもこんなにも喜ぶのかもしれない。彼女と長い間一緒にいると僕たち自身が客観視できなくなる。
僕とミズホは付き合って今年で二年になる。付き合ったきっかけはお互いの友人が主催した合コンだった。その時の彼女のことを今でも覚えている。だれに対しても同じ反応して、もしかしたらぶりっ子とかそういうイタイ子なのかもしれないと思った。一次会が終わった時の男性陣のミーティングでも「気をつけろ」みたいな話で要注意人物になった。
でも、二次会のカラオケの時に僕の彼女に対する印象が変わった。
みんな最初は同じ部屋に居て、歌う人と喋る人に別れていた。彼女はどこに居たかと言うと、歌ってる部屋の外のソファにいて電話で話しながら困った表情をしていた。僕は彼女の電話が終わるのを待って話しかけようとしていたが、電話が終わると彼女は携帯を放り投げて泣き出してしまった。彼女がそうなっていることを知っているのは、僕以外にいなくて、みんな自分のことだけしか考えていないようだった。
僕はそっと部屋を出て彼女に近づいて声をかけた。
「どうしたの？」

僕の声に反応してミズホが顔を上げる。そして、目に涙を浮かべながらも、泣くまいと頑張って話を始めた。
「あのね、お兄ちゃんからだったんだけどね。もう家に帰ってこいって言われちゃったの。私は帰りたくないって歯向かったの。せっかく好きな人を見つけたのに、帰れないって」
彼女の家はきっと門限が厳しいのだろうと僕は思った。彼女が、どこかお嬢様っぽい感じがするのはそのせいだと納得した。僕は、軽い気持ちで彼女の相談に乗った。
「好きな人がいたんだ？　だれ？　僕が協力するよ。教えて」
「言えないよぉ」
彼女が大きい声を出して拒否をした。僕の好奇心がくすぐられて、彼女の好きな相手の名前が知りたくなった。酔っている勢いも借りて僕はしつこいくらいに彼女に訊いた。そんな幼いやり取りをしている途中に彼女は腕時計を見て時間を確認した。
僕は帰っちゃうのかと思って残念がった。
彼女は自分の名刺に携帯電話の番号とメールアドレスを書いて、僕に渡してきた。
「だれに渡せばいいの？」
「また今度、二人っきりでご飯を食べようね」
そう言う彼女の顔を見て、ずっと眺めていたいという欲求にかられた。
「じゃあね」
遠ざかっていく彼女が、一度振り向いて手を振った。僕も彼女に手を振り見送った。急に僕も帰りたくなって時計を見ると十一時を過ぎた頃だった。
それから二人で会ってもいつもミズホは時間に細かかった。特に夜になるとうるさい。僕と会っていても、明日が休みでも、彼女は終電で帰る。僕と付き合っていて、一度も僕と一緒に夜を明かしたことがないのだ。そして、それが故に僕とミズホはプラトニックな関係を保っている。
ただ、それを僕は一度たりとも望んでいない。最近では、彼女が帰るのが当然だと僕も思っている。付き合った当初は、何かと理由をつけて一緒に居ようとした。ミズホは兄のことを話に出して僕の欲望を拒んだ。
今日は久しぶりに言ってみようと下心に僕は正直に従った。
「ねぇ、今日は一緒にいたいな」
僕はそれとなく言ってみた。彼女は考え込んだ。僕はダメ元で言ったんだし、どうせ帰るに決まっている。僕はカクテルを飲みながら、残っていたシーザーサラダを自分の皿に盛って食べていた。
「いいよ」
呆気ない返事で、僕は全身がフリーズした。
「えっ？」
ミズホが恥ずかしそうに応える。
「いいよ。今日は」
「やったぁ！！」
僕の心の叫びが落ち着いた雰囲気を台無しにする。それから、僕

は一人で盛り上がって強めのカクテルを何杯も飲んだ。彼女は嫌な顔を一切せず僕を受け入れてくれた。気がついたら彼女の腕時計もなくなっていた。

僕と彼女はその夜に初めて結ばれた。嬉しかったがお酒のせいで、記憶が曖昧である。

朝になって気がついたが、今日が月曜日で普通に仕事だったことを起きた時に思い出す。こんなことは今までに無かったし、僕が会社を休むなんて一年であるかないかだから仮病を使って、今日は休みにした。彼女はうまく起きたらしく、もういなかった。まるで、今まで一人でいたかの様に彼女の痕跡はなかった。

心配だったので、僕はミズホにメールを入れる。

せっかく、ずる休みをするなら平日の街を楽しもうとぶらぶら散歩する。いつも食べる牛丼屋も私服で行くと気持ちがちょっと変わる。ちょうど食べ終わった時に電話がかかってくる。ミズホかと思って楽しい気分で電話を取り出す。そこには登録されていない電話番号が表示されていた。逡巡をした後に恐る恐る通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「もしもし？」と女性の声がした。

「なんで、出ちゃったの？　あー、もう面倒くさい。でも、せっかくだから説明をしてあげる。あなたは真の愛についてどう思う？　付き合っている彼女があなたの知らないところで淫らな行為をしていても、彼女があなたのことを愛していたら、あなたは受け入れられる？　自分の前で清らかだったら許せる？　包括的に人のことを愛せますか？　私は、あなたが出す答えを知っている。それで私はあなたを待っているの。あなたの純粋さがあなた自身を動かして、私を助けに来るの。待ってるよ。私は、継母や義理の姉たちがいじめる家庭やいばらの生えた城や高い塔のようなファンタジーなところにはいないの。わかった？　これが私の言いたいこと。じゃ、よろしくね」

僕は一言も喋らずに電話が切れた。

そして、それから一週間以上もミズホからは連絡がなかった。

僕は彼女がいなくなってから、朝起きた時と昼休みに入った時にいつもメールをして、仕事が終わると電話を毎日かけた。メールの返信は返ってこないが、電話をかけるとコール音がする。

こんなことは付き合い始めてから一度もなかったことで、僕は心配をしたし、頭の中はミズホのことで普段以上にいっぱいになった。こんなことを言っても信じてもらえないかもしれないが本当のことだった。

仕事が予定より早く終わって、先輩から「せっかくの金曜日なんだから、みんなで飲みに行こう」と誘われたが、僕はそのグループに混じるテンションじゃなかった。いつもならミズホとこの後会ってご飯を食べる予定だった。帰り道に毎日やってるおまじないみたいに、彼女に電話をかける。しかし何回かコールした後に留守番電話になる。

今日もミズホと連絡が取れなくて寂しい気持ちを抱えて僕は、電

車に乗って自分の家のある駅に向かう。その途中でものすごい空腹感に襲われる。

僕の体は正直でお腹が空いたら心配を横にどけてご飯を食べてしまう。

空腹を我慢して、駅に着くと最近行くようになった商店街の片隅にある中華料理屋に入った。

ドアを開けると、椅子や机やカウンターの油で汚れてくすんだ赤色と所々シミになっている壁紙のクリーム色が目にはいる。厨房では、やることがないみたいで壁にもたれかかっているおっちゃんが、向かいに設置してあるテレビを眺めていた。

「いらっしゃい」

覇気のない声で僕を出迎える。もし僕が美食家でそういう倶楽部を主宰している人間だったらこのおっちゃんはどういう対応をするのかと考えた。テーブルに置いてあるビニールが油でベトベトなメニューを開く。定食セットのページ、右の列の二番目を確認する。僕はこの二列三段の定食の欄を順番で食べると決めている。

「レバニラ定食ください」

「あいよ」

かったるそうな返事がして、おっちゃんは動き出す。お水はセルフだから、自分で取りに行く。一口飲んで口の中をニュートラルにする。おっちゃんは、さっきまでテレビに釘付けだった。何をそんなに集中してみていたのだろうと思い画面のほうを見てみると、国民的アイドルグループが歌って踊っていた。僕より年上の人でも好きになっちゃうんだと思いながら時間をつぶすために彼女たちを見る。

曲が間奏になって、グループの女の子たちが何人も短い時間で映る。

僕はある一人の女の子を見て息を飲んだ。

なぜなら、その子がミズホにそっくりだったからだ。僕は彼女がもう一度映らないかと注意深く画面を覗く。すると、その他の女の子たちもどこかしらミズホの面影があるように見えてきた。アイドルなんかまじまじと見たことはなかったが、いつの間にかみんながミズホに似ているような気がしてきた。

結局、僕が探していた彼女は二度と現れなかった。画面が切り替わると、サングラスをかけた司会者が次のアーティストの紹介を始めた。頼んでいたレバニラ定食も僕の元に、ちょうどよいタイミングでやって来た。

僕が定食を食べ始めるとおっちゃんがチャンネルを変えた。本当にあのアイドルが好きだったみたいだ。「だれ推し」なのかが心に引っかかってしまう。テレビでは、東京の下町を探索している番組がやっていた。それでしばらくご飯に集中できた。

ちょっと焦げたニラとレバーが、オイスターソースが混じった湯気の向うに存在感を示している。もやしの白が色使い的にも食感的にもアクセントになって、僕の胃袋は満たされていく。

僕が熱々の鉄分とミネラルを補給しているとお客さんが入ってくる音がした。グループで来たみたいで足音がたくさんした。僕は、

そんなことより目の前のご飯を食べて本来の自分の問題に向き合わなければならないと思っていた。すると足音が僕の方に向かってくる。
嫌な予感と言うのは、そう考えた瞬間から実現してしまう。
「すいません、シュンさんですか？」
若い男性の声が聞こえた。僕は「はい」と言って振り向いた。そこには、白衣を着て眼鏡を掛けた学者らしき男性がいて、後ろには筋骨隆々のスキンヘッドとテクノカットの男がいた。
「突然すいません。妹のミズホいつもがお世話になっています」
話しかけてきた研究者風の男が、ミズホの兄と名乗って僕に一礼をした。
「実は、シュンさんがきっとお困りだろうと思いまして、ミズホの代わりに挨拶に来ました」
「挨拶？」
「はい。別れの」
「別れ？　どういうことですか？」
「大変、申し訳ないんですけど、もうミズホに付きまとうのを止めてほしいんです。あなたのおかげで彼女は失われてしまったんです」
「ミズホが失われる」という日本語が僕にはしっくりこなかった。
「さっきから何を言っているのかさっぱりわからないんですけど」
「あなたが一〇〇パーセント理解する必要なんてないんです。あなたがミズホをあきらめてくれればいいんです。それにもうあなたの前に同じミズホはあらわれることはありません」
奇妙な世界に間違えて入り込んだにせよ、リアルが歪んでパラレルワールドになってしまったにせよ、僕は全く今の彼の発言が受け入れられない。
「あなた、頭がおかしいじゃないんですか？　ミズホに会わせてくださいよ。ミズホから話を聞かせてください。もう一週間以上会ってないんです」
「それは無理です。あなたのせいでミズホは失われたんですから」
「話を曖昧にしないでください！　ちゃんと話してください」
彼は「はぁ」と短いため息をして後ろの二人に入り口に立っておくように指示した。僕は真実を知りたいのに、物騒な展開になってきた。この店に居るのは僕と彼らだけになった。お店のおっさんはさっきから見当たらない。トイレにでも行ったのだろうか。
「テレビを見て何か気づきませんか？」
僕は、彼にさっきの音楽番組を見ていたことをどこかで監視されてたみたいな気分になった。
「あんまり見ないんで、よくわからないです」
「そうですか」と呟いて、彼は厨房にあったリモコンでテレビの画面を変えた。
「この女性を見てどう思います」
テレビでは世界の各国の変わった行事の映像を見て、画面の片隅でリアクションしているグラビアアイドルの女性がいた。
「かわいいと思います」
「それだけですか？」

「そうですね」
じゃあ」と言って彼はまたチャンネルを変えた。
「彼女はどうですか？」
大きいセットのキッチンで二人の料理人が料理をしている。そこでリポーターをしている女性アナウンサーが映った。
「美人だと思います」
「本当にそれだけですか？　いいですよ、ぶっちゃけても。ミズホはここにはいないんですから」
彼は少しにやけた声で言った。
「いや、そうだとしても僕からのコメントはさっきの二つだけです」
「あなたは嘘をついている。大きな嘘だ。今、映った二人には共通して思ったことがあるはずだ。どこかしらミズホと似ていると。そうでしょ？」
僕の背筋が凍る思いだった。僕は沈黙することで肯定する。
僕は二人の女性が出てきてびっくりした。彼女たちは、ミズホに完全に似ているわけじゃなくてどこか何となく似ているのだ。そっくりなことを正直に伝える気にはならなかったし、似ていると見えるのは個人の見え方によるものだから言う必要ないと思った。
「ミズホという女性は特別な人間だったんです。具体的な話は避けますが、簡単に言えば全世界の女性のオリジナルで特別な人間と言えばわかってもらえますかね。その彼女をあなたが解放してしまったんです。そのせいでミズホは失われたんです。わかってもらえましたか？」
「そうだとしても、僕と彼女の関係にそれまで関係なかったじゃないですか」
「それはこちらでうまくコントロールしていたからです。ミズホは今まで一度も日をまたがずに家に帰ってきていた。それでバランスは保てていたんです。それが一週間前に壊れたんです。管理する側としては迂闊だったとしか言えません。でも、最近どうにか建て直しができた。それで、もうこれ以上あなたに邪魔をされたくないと思いまして、今日ここに来たんです」
「そんなのいいがかりだ！！　それにミズホはちゃんといるんだろ？　おかしいだろ？　俺とミズホの関係に入ってくるのは！！」
「あなたは、世界の理に逆らっているんです。もうこれ以上は控えてください。ミズホという女はいなかったと忘れてください」
彼は僕にお願いするように頭を下げた。
そんなこと言われても僕は忘れることなんてできない。僕にとってミズホという存在は大きかった。そんな彼女を忘れることなんてできない。
僕の気持ちは怒りへと変わっていった。コイツをぶん殴ってやると思って、近づいていき腕を大きく振り上げる。しかし、振り下ろすことはできなかった。僕の腕はつかまれていたからだ。坊主頭の男が僕の腕をつかんでいた。男の力は強くて僕をそのまま押さえ込んだ。
「暴力という理性を欠いた行動は、慎んでいただきたいです」
「ふざけんな。お前に、僕の気持ちなんて解るわけないだろ」

「わかりますよ。愛おしい存在だったことは了解してます」
「軽々しく俺の気持ちを語るな」
僕はどうにかできないかと悪あがきをする。今度は、テクノカットの男も混ざってきて完全に動きが封じられる。
「しかたないですね。では、こちらで忘れさせてあげます。山田さん、佐藤さんよろしく願いします」
「はい」と短く返事をして僕を抑えていた二人が僕の体から離れた。僕の正面に二人が立つと、テクノカットは右腕を坊主頭は左腕を弓のように引いた。まるで、サッカー漫画のツインシュートみたいな格好のパンチバージョンだった。二人のこぶしは見えないスピードで僕のボディに入った。僕は勢いで店の扉を突き破って道路に出た。全身が痛くて、思考することができなかった。意識が途切れる寸前に白衣の男が耳元でささやいた。
「これで懲りてください。もし、次やったらこれ以上にあなたを痛めつけます。今回であなたが諦めてくれると思って救急車を呼んでおいたので、しっかり治療してくださいね。それじゃあ、失礼します」
その言葉を聞きながらなんとかコイツに歯向かう努力をしたが、指一本も動けなくて、白衣を汚すこともできなかった。
その日の怪我は全身打撲で全治一週間。会社に本当に怪我をして休むのにいらない背徳感で電話した。最初はクビになるかもしれないと思ったけど、診断書を提出するように言われて事なきを得た。入院は実質三日で、残りは自宅療養だった。その間にテレビはたくさん見たし、ミズホらしきそっくりさんもたくさん見た。
でも、あの時のアイドルグループの彼女は一度も見ていない。そういう番組を見たが出ていなかった。これから、会社に復帰してもしかしたら見逃してしまうかもしれないと思って、ハードディスクレコーダーと二テラの外付けハードディスクを買った。
平日のゴールデンタイムはだいたいテレビを見ることができないので、週末の一日を使って一週間貯めた番組を全部見る。はじめのうちは、頭から最後までチェックしていたが、段々と早送りをするようになった。彼女たちだけでやっている番組は終わりまで油断できないが、音楽番組のゲストだと十分くらいしか出演しないので、そこだけ確認して、見つからなかったら作業時間の短縮のためにその出番が終わったらすぐに消去をする。
そんな生活が一ヶ月続いた。僕はミズホを探しているのか、ミズホに似た人間を探しているのかわからなくなっていた。でも、目的として中華料理屋の一件であの博士みたいな男の手からミズホを取り戻したい衝動に駆られていた。
ある日の仕事帰り。新入社員が研修で入ってきて、そんな季節なのかと思っていた。年々、時間というものが加速しているような気がすると同僚と喋って、仕事のおかげで自分が少しは保ててるなと思いながら家に着いた。着くやいなや電話が鳴った。仕事で何かあったのかなと思って、取り出すと「知らない番号」と表示されていた。ミズホがいなくなった日に電話番号を登録していた。僕は一回

深呼吸をして通話ボタンを押した。
「もしもし？　この前より潔く出たわね。それは褒めてあげる。でもね、あなたが自分自身の行動に疑問を持たなくていいのよ。あなたの行動は概ねその方向に動いてるから大丈夫。あなたはこれから大変な目に遭うの。こういうことは先に言っておくの。この話はエンドレスで、どこまで続くかわからない。そんな話なの。あなたは、これからあるテレビ局に行くの。そうね、汐留のテレビ局。そこで、彼女があなたを待っているの。せっかく、今やっているテレビの情報を横流ししているんだから、ありがたく思いなさい。今すぐ確認して、行きなさい。録画で週末に観るなんてもったいないから。じゃあね」
　テレビにスイッチを入れてテレビ番組を確認する。眼鏡を掛けたコンビの芸人がマイクを持って話をしている。
「テレビをご覧のファンのみなさん、今回選抜されたこのメンバーはあなたの力を必要としています。今から、番組終了十五分前までにここ汐留テレビ局に来てください。そして、彼女たちに降り掛かるパイから守ってください。それだけです。あなたが真のファンであることを証明する絶好のチャンスです。あなたのパワーをあの子たちは待っています」
　そう言い終わると、メンバー一人一人がカメラで抜かれる。懇願する女の子たちの中に彼女はいた。彼女も他の周りの子と同じような感じでカメラをじっと見つめていた。でも、僕にとって彼女は違うように思えた。オーラとか雰囲気とかそんなじゃなくて、もともと僕の横にいるはずの女性だったという自分勝手な思いだ。
　僕は草野球で使っているバットを持ち出して、着替えずに急いで駅に行きテレビ局に向かった。電車がこんなに遅いとは思わなかった。自分の足を使えば、電車より早く行くことができるんじゃないかと考えられた。
　やっと駅に着いて僕は駆け足で改札に向かった。改札の向こうからサラリーマンの大群がやってくる。スーツの群れを掻い潜りテレビ局に向かう。僕の足は自然と速くなる。
　テレビ局は曇りのせいでか、悪の巣窟、悪魔の塔のように見えた。その中に入って行くと奇妙な光景が広がっていた。
　マッチを売る少女がいたり、赤い頭巾をかぶった女の子が彷徨っていたり、木の人形が歩いていた。僕はこことは別のところにあるアミューズメントパークに来てしまったようだった。さっき見た番組のスタジオの場所が看板で出ている。それを頼りに局内の奥に進んでいく。さらに進むと変な人間がどんどん増えていく。パソコンを片手に持ちながらもう片方の手で入力をしながら歩く人、周りの人間にむかって鞭打つ女王様、二足歩行の忍者亀。僕はテレビの世界は知らないが、これが普通なんだと思った。
　もし、僕に危害を加えるならバットで一撃加えてやろうと心配していたが、そんな危機的状況はなかった。
　スタジオに着くと、やる気のないスタッフが長机にだらけた格好で椅子に座っていた。スタッフが僕の存在に気づくと立ち上がって迎えた。

「番組に参加される方ですか？」
「そうです」
　それから出演の際の説明を細かくされる。途中で彼は僕が持っていたバットケースをちらちら見ていた。
「あの、私物の持込は禁止されるんでこちらで預かりますね」
　僕はしぶしぶ了承をした。僕のたった一つの武器を取り上げられたみたいで、寂しい気持ちになった。
　僕は出番になるまでスタジオの片隅で待たされた。鉢巻きを頭に捲いたり、法被を着たりする人が暴れ牛のごとく息巻いている。それに対して僕はスーツ姿で会社の帰りの普通のサラリーマンにしか見えないだろう。自分が来る場所を間違えたかのような錯覚に陥る。「だれを守り来たんですか？」とさっきの祭りの格好の男たちに訊かれるが、僕が名前を言うと「敵ですね。よろしくお願いします」と握手を求められた。僕はルールがわからずに握手をする。人によっては、握手がない場合もあった。
　さっきの受付のスタッフよりも、幾分威厳のあるスタッフが集まっている僕らの前にやってくる。
「えー、これからの流れを説明します。まず、出演者にそれぞれ何人集まったかをアナウンスします。その後に、司会者が一番少なかったアイドルの名前を言って、笛を吹きます。そしたら、みなさんは守る側と攻撃側に別れます。攻撃する側はあらかじめセットに用意されているパイでターゲットのアイドルを狙ってください。そして、守る側はこちらもセットに用意されているプラスチックの盾で守ってあげてください。以上、簡単になりますが説明を終わります。なお、あまりも行き過ぎた行為に対しては、退場や場合によっては法的処置をとります。テレビのショーなので、みなさんくれぐれもはめを外さないようにしてください。それでは、係の者の指示に従って移動してください」
　僕は彼女を守ることしか考えてなかった。移動している時にどこに盾があるのかをチェックしていた。セットに入ってすぐ左。つまり、入場者からすれば右にあることがわかった。
　僕たちは城門イメージして作られたセットの裏にいる。格子状に組まれた板があって、まるで簡単な檻に入れられているようだった。
　正真正銘のファンの人達に囲まれたら、催眠効果なのか僕も一ファンだと思い込んでしまう。人数のアナウンスが始まるとみんなで一喜一憂した。ある種の団体芸みたいだった。そして、ミズホにそっくりな子と少しぶりっ子入っている子の一騎打ちになった。みんな、ぶりっ子のアンチなのかヤジが飛んでいる。しかし、ぶりっ子もその言葉をうまく面白いコメントで返す。それで出演者が笑っている。でも、きっと一番気が気じゃないのは僕なのかもしれないと思った。
　そして、名前が告げられた。その瞬間、僕は完全に自分の全部を投げ打って彼女のことを死守しなければと思った。
　一斉に人間が動きだす。みんなパイを持って攻撃に回った。僕は盾を持って彼女の元へと急がなければいけなかった。彼女はもうスタジオの隅にいて、何発かパイを食らっていたが致命傷になるほど

顔や衣装にダメージを負っていなかった。
「これ持って、スタジオを出て先に逃げて。僕は後ろを守るから」
「えっ」と彼女は一瞬戸惑った。僕はその顔がミズホと似ていて嬉しくなった。
「早く」
と僕が急かすと彼女は盾を持って走りだした。パイを投げる人間も少し戸惑ったようで、何秒間手が止まった。その間に彼女はスタジオの出入り口の方に行っていた。僕も後ろに続く。僕は彼女に防具を渡してしまったので、無防備である。でも、彼女にとって僕自身が盾になればと思った。後ろを振り返ると若干名の僕の仲間が守ってくれていた。彼らにものすごく感謝した。
遅れて僕がスタジオの出口に着くと受付にいたスタッフに尋ねた。
「さっき預かって貰った荷物どこにありますか？」
クリームまみれの僕は鬼気迫る勢いだったので、彼が気圧されていた。荷物を探し出して僕に手渡した。僕は彼に礼を言って、彼女を追った。彼女は廊下を駆けていた。
「どこか隠れるところあったら入って」
僕の話にうなずき、彼女は女子トイレに入った。僕は一瞬戸惑ったが、一か八かで彼女に付いていった。
入ると彼女以外にいなくて僕は安心した。
僕と彼女はこの場所に来るまでに体力を奪われたらしく、膝に手をついて呼吸を整えた。自分が年を取ったのか、それとも最近の運動不足のせいなのかかなり息が上がってしまっている。
「あの、なんで私のことを心配してくれるんですか？　これはテレビですよ。私はあそこでパイまみれになることで、番組的にはオッケーなんですよ」
「僕は君のことが心配なんだ。君にそっくりな人が失われてしまったんだ。君が彼女の代わりと言ったら恥ずかしい話だけど、僕は君のことが気になってしかたないんだ」
「おかしな人ですね」と彼女は笑みを浮かべて続けて言った。
「そんなこと今までにファンの方に言われたことないですよ。それに『失われる』ってなんか変な話です」
「僕も変な話だと思う。夢だと今でも思ってるよ。ずっと僕は悪夢のような日々を送っていたんだ」
「でも、あなたの顔って、私の記憶の片隅になんとなくあって、見覚えあるかもって思ってるんです」
「気のせいだよ。そんなの嘘だ」僕は謙遜めいたこと言う。現実として受け入れられたくない気持ちが僕にはあるからだ。「これは何かの間違えだ」と頭の中で繰り返す。その一方で「これが夢ならなんでもできる」と思って、ダメもとで僕は彼女に頼みごとをする。
「もし、よかったら君を抱きしめたいんだ。そうすれば、僕は失われた彼女を僕の心の中だけに仕舞えるかもしれない」
彼女は恥ずかしそうにしてうつむいた。そして、小声で「いいよ」と許可してくれた。
僕はその言葉で胸が高鳴った。まるで女性を知らない男性みたい

に僕は緊張をしている。彼女がアイドルだから自分が構えてしまっているとも考えられる。
許しを貰った後、僕は彼女に体を近づける。彼女も僕から顔をそらして、わずかに体をこちらに寄せてきた。もうすぐで彼女を抱きしめられると思った。体に電気が走ったような快感で震えがした。このまま彼女を僕のモノにしてしまいたいと思った。
そんな甘い一時はトイレのドアが開く音で破壊される。
「楽しい時間を過ごせましたか？　でも、もうこれ以上はいけません」
白衣を着た男、ミズホの兄とこの前のテクノカットと坊主頭の男二人が立っていた。
「いやぁ、探しましたよ。意外と近いところに隠れてたんですね。灯台下暗しってヤツですか」
彼は楽しんで言っているようだった。それが鼻について腹が立つ。僕は抵抗するために背中に背負っていたバットケースから、バットを取り出して、剣士のように構える。
「あなたは初めて会った夜に酷い目に合っているんですよ、懲りないんですね。では、もう一度教えるしかありませんね。山田さん、佐藤さん、よろしくお願いします」
二人の男が前に出てくる。以前、コテンパンにやられた記憶がよぎる。僕にはホームランを打ったバットがあると自分に言い聞かせる。
相手は、僕を牽制しているのかジャブを多用しながら攻撃を仕掛けてくる。僕はバットで相手のパンチを当てにいく。バントの要領で、バットを両手で持ち、自分に来るパンチを当てていく。
女子トイレは男子トイレよりスペースが狭いから、相手も僕を挟み撃ちに出来ないでいる。坊主頭が焦ってきて力が強くなる。僕も押されて、少しよろける。さらに強いパンチが来てもろに食らう。そのスキを見て、二人が並ぶ。左右の別々の利き腕を引いてこの前のツインパンチを繰り出した。僕はそれももろにくらいダウンする。
しかし、僕はバットを杖代わりにして、なんとかふらつきながら立ち上がる。
弱っていると見た僕を痛めつけようと、二人がさらに追い打ちで攻撃をしてくる。
二人が同時に大きく振りかぶる。さっきより引きが大きい分、僕はタイミングを取りやすかった。僕も小さいながらバッティングの構えをする。二人がパンチを繰り出すタイミングで僕はバットを勢い良く振る。
金属バットの快音が鳴り響く。バットに骨が折れる感触が伝わる。その感覚は決してホームランを打った時とは違う、気持ちいいとは言えないものだった。
二人の男がうずくまる。そこを見計らって、僕は二人の頭を思い切り叩く。頭蓋骨が陥没するのがわかった。二人は気絶して動かなかった。
僕が二人を倒したと思って、軽く息をついた時に僕の頬に何かかすった様な気がした。手を当てて、水っぽい感触がしたので見てみ

ると、軽く一文字に切れた痕があった。
「きゃ」と後方で彼女の声がした。振り返ると彼女の近くに銀色に光るものがあった。メスだった。
「まさか、二人を倒すとは思いませんでした」
メスを片手に喋るミズホの兄がいた。僕はバットを構えるが、さっきの戦いでバットがベコベコに凹んでいる。僕がどうしようかと逡巡している間に敵はどんどん近づいてきて、僕は後退を余儀なくさせられる。背後にいた彼女の近くまで来てしまった。
「もう、逃げる場はなんですから黙って彼女を返してください」
男はメスを見えない速さで投げる。僕のスーツの右肩付近に刺さり、勢いで壁に貼りつられる。それに気を取られて二波三波に気づかなかった。僕の左肩と右足に掠めて着ているものを貫通して、壁に密着する形になる。
「これでいいでしょう。さっ、お嬢さん行きましょう」
白衣の男が馴れ馴れしく、彼女に手を差し伸べる。
「いやっ！　私はこの人と一緒にいる。それより。あなただれなの偉そうにさ。聞いててむかつくんですけど。ヒーローとか気取ってんの？　この人のほうがよっぽどヒーローなんですけどっ！」
「わがままですね。あなたが来ないと、この人がどうなっても知らないですよ」
メスが飛んできて、左足を壁につなぎとめた。
「ひどい」と彼女は言い放った。
「私はこの人と一緒にいる。あなたに屈したりしないわ」
「ジャンヌダルクみたいですね。いいでしょうあなたが来てもらうように仕向けるしかありませんね」
彼は白衣からメスを一本取り出し、僕の体の真ん中にある臓を狙う素振りをした。何もできない自分が恥ずかしかった。このまま、僕は死ぬんだと目をつぶって覚悟を決めた。その時だった。
彼女の声が聞こえた。
恐る恐る目を開けると彼女が僕の身代わりになっていた。彼女は崩れ去る。
「なんてことだ」
彼は自分のやったことを悔やんだようだった。
僕は何も言えなかった。僕が目を見開いて倒れているのを見ていたら、どんどん憎しみの気持ちがこみ上げてくる。今までに感じたことのない感情が僕を奮い立たせていく。
「うぉぉぉぉ□×◎#▲$☆※ッ！」
僕は張り付けられていた壁から自分を引きはがした。そして、男の元に駆け寄る。男の首根っこを持ち上げ、地面にたたきつける。そのまま男に馬乗りになって顔だけを集中的に殴りつけた。どれくらい殴ったかは、覚えていない。僕の気が済むまで殴り続けた。感情の解放が終わると、僕はいつの間にか泣いていた。
彼女に近づいて、もう一度抱きしめる。今までの彼女とミズホの思い出を思い返し、僕はそれらをあきらめることを決意する。
そして、彼女が少しでも長く生きられるようにトイレの個室に隠した。

僕が完全にミズホを忘れるための儀式として、次の休みにミズホのマンションを訪れた。ミズホが失われたにも関わらず、部屋がまだあるかどうかは賭けだった。ミズホの部屋には何回か行ったことがある。女の子らしいた、カラフルな彩りの部屋だった。外国の映画のポスターが貼ってあったり、テレビの上には僕との写真があったり、この部屋は主をまだ待っているようだった。僕はその一つ一つを見つめ、手に取って彼女との思い出に浸っていた。

だけど、僕は前に進まないといけないと思った。ミズホに似た彼女の死で僕は一歩前に出る決断が出来た。最後に彼女たちに別れを告げるために、そして、彼女の生きていた証を、何か形見的なものを貰いにやってきた。

言い方は悪いが僕は彼女の部屋を軽く物色していた。

「泥棒ですか？　本当にあなたとは、何かと縁がありますね」

振り返ると、顔に包帯を捲いた白衣の男が立っていた。声から察してミズホの兄だと思った。

「なんで、いるんですか？」

僕と彼の声がシンクロする。しばらくの間が流れる。

彼の方から話しだす。

「いえ、監視カメラにあなたが映ったからここに来たんです。別にもうあなたに危害を加えることはしませんよ」

「大丈夫です、もうあなたとは関わらないと思います。ミズホがいないことを僕は現実として受け止めます。だから、今日は忘れ形見を貰いにきました」

「そうですか」と言って軽く彼は笑っていた。

「あなたがそうしてくれるととても助かるんです。もう、ミズホという人間はいないのだから、これ以上問題を大きくしてくれないで欲しい」

「わかりました。約束します」

「じゃあ、忘れ形見とやらを持っていって好きな時に出て行ってください。この部屋は引き払うつもりです。ここはもうなくなります好きなものを持っていってください」

「はい」

「もう二度と会わないことを祈ってますよ」

白衣の彼は出て行った。それからどれくらいその部屋にいたか見当もつかなかった。部屋を出た時には日が暮れていた。

僕は彼女とデートで行った遊園地の非売品である小さいオルゴールの宝箱を貰って帰ってきた。

その日を境に僕は普通の日常に戻った。

仕事に行き、同僚と飲んだり、たまには合コンに行ったりした。でも、毎日寝る前にオルゴールを聞いて寝ていた。時々、僕の核心に迫る夢を見てうなされて起きた夜もあった。

ある金曜日の朝、僕はその日は目覚めが良くて、気分も良かったから滅多に作らない朝ご飯なんかを作ってみる。近くの百円均一のコンビニで卵とハムと千切りになっているキャベツなんかを買ってハムエッグを作って満足する。ご飯を食べていたら携帯電話が鳴

った。出勤前から電話をかけてくる友人や同僚を僕は知らない。
着信番号は「知らない番号」だった。通話ボタンを押す。
「もしもし？　よくもまぁぬけぬけと電話に出たわね。信じられない。忘れるために努力しようとしてもダメ。あなたは縛り付けられているの。それを感じないだけで、自由になったと思ってるようじゃ、あんたもまだ中途半端なのよ。口だけの男なのよ。自分に嘘付いている日々は楽しい？　そんなものを見させられても全然面白くない。もっと面白くしてあげる。いい？　今からテレビをつけなさい。チャンネルはどこでもいいわ。わかった？」
僕は無言でテレビをつける。朝のニュースで芸能情報をやっている。アナウンサーが軽快な喋りをしている。
「次のニュースはこちらです。今日、一面の新聞もありますが、有名女優に熱愛スクープです。しかも、お止まりデートの現場を週刊誌が直撃しています」
画面が切り替わる。
フードを被った女性と白衣を着た男性が映っている。よくよく見ると、男の方はミズホの兄だった。そして、フードを被った女性をちゃんと見ると、ほとんどミズホにそっくりな女性だった。こちらの方が、大人の色気があってミズホより美人である。ミズホは年より幼い感じが良かったが、こっちの方が好みかもしれないと思った。
電話から声が聞こえる。
「うふふ。ビッチな感じがする？　それともこのニュースに禁断の愛見つけちゃってる？　あなたがこれを知って、頭も下半身も興奮したのがわかったわ。そして、あなたに衝撃を与えられて満足しちゃった。あはは。さぁ、迎えに来る口述が出来たわね。待ってるから今度こそ本当の恋をしちゃいましょう。じゃあね」
電話が不通になる。しばらくは思考が停止して動けずにいた。そして、僕は動き出す。
玄関にある、バットケースから新調したバットを取り出す。そして、ミズホの忘れ形見のオルゴールを何度も叩く。みじん切りをするみたいにモノの原型がなくなるまでバラバラにする。
テレビを見るとまださっきのニュースにコメンテーターがなんか言っている。僕は、さっきの女優をパソコンで調べて、所属事務所を調べる。事務所がわかったらその所在地を調べて、周辺の地図をプリントアウトする。それを持って、僕はバットを再び持って玄関に向かう。
玄関を開けるとさっき買い物に出て行った時より日差しが強くなっている。そんな清々しい朝の中、僕のミズホを巡る戦いは第二章に突入した。

（了）

行くな！　ガーゴン

常磐　誠

百合神悠は激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。悠は政治が少しはわかる。

学業優秀、スポーツも人並み外れた実力を見せ、特に幼少期から剣の師匠の下に内弟子に入り、振るい続けた剣道の腕は全国でも有名になるほどである。その正義感たるや察して余りあるというものだ。

「……」

ピン、と伸びた背筋の緊張。悠の利き腕である右腕の小刻みな震え。顔を見ずとも俺にはわかる。顔はいつも通り柔和な笑みを湛えているに違いない。だが、その双眸が開かれたが最後。絶対にその目は笑っていない。薄開きの目をしていることだろう。

「えっと、そこで何をしている訳？　ぼーっと突っ立ってるのには何か意味があるの？　剱人」

悠は特に何の気持ちも込めること無く後ろに立つ俺に声をかけた。

「いや？　お前こそどうしたよ？　ちょっと通りがかっただけだぜ？　俺は」

話しかけられた俺はそう言って誤魔化した。人の背中を見て勝手に激怒させてみたり邪知暴虐の王に殺意を抱かせたりしているのがバレる訳はないが、妙に勘は鋭い悠のことだ。警戒はしておいて損はない。と思っての行為だった訳だが、

「嘘だ」

速攻でバレる。まぁ俺嘘下手だし。しょうがねぇか。でもすぐバレるのが癪で、ちょっとだけ言い逃れをしてみる。

「いやいや。俺が嘘ついてどうなるってんだよ？」

「そうやって言葉尻が上がるのはお前が嘘ついてる時の癖。わざとやってるのかってくらい露骨に上がってる」

「これが高等テクってや……」

「ダウト」

くそったれ。

この癖だけは本当に治らない。頭を軽く掻く。悠は全盲の癖に、というか、全盲だからこそ、視覚以外の情報に対して本当に鋭敏に反応する。音、香り、勘。本当に、鋭い。この鋭さにまた一本取られた形の俺はばつの悪さに話題を変える。

「で、衆議院解散のニュースを流すテレビを前にお前は何をやってるんだ？」

テレビに映る緊急ニュースではついに衆議院が解散となり、朝から何度も何度も、バカバカしい万歳三唱の声が耳にけたたましく響く。
「王の圧政がこのような事態を招いたのだ。こっそりと道行く老爺の肩を揺すり尋ねれば、『王様は、人を殺します』と答えるに違いない。とりあえずお前はそう思ってる訳だよな？」
俺が尋ねてみると、思う以上に即答で悠は言葉を返してきた。
「いや意味が分からないよ。王って誰？」
「お前は衆議院が解散するニュースを見て激怒したんだよ。そして必ずかの邪知暴虐の王を除かねばならぬと決意する訳だ」
「……」
「……」
二人して沈黙。そこに、ゴツゴツとガタイだけは不必要なまでにゴツく厳めしい奴が来て、
「そろそろ終わるよな？　……って、二人して何無言で見つめ合ってんだよ。気持ち悪ぃよ。何だ？　新たな目覚めか？」
気持ち悪いことを言ってくる。ふざけんなよ気持ち悪ぃ妄想はてめぇだけでやってろよ、と言おうとしたが、
「ちょっと聞いてよ。今日の剱人は暇過ぎて頭がおかしくなってるんだ」
という言葉に遮られてしまった。っておい待てや。
「別におかしかねぇよ」
「半音上がった」
「上がってねぇし」
「上がったなぁ」
「真彦てめぇは黙ってろ、バカ」
ゴツゴツ野郎の大バカ、真彦には軽く釘を刺しておく。
「あ、いや、そうじゃねぇんだよ。悠。お前にちょっと用があってな、そろそろ終わるだろって思って、な、来た、ん、だが……」
スイッチが入るのは突然のことだった。
いや、一応段階は踏んでいたか。真彦の発言の途中から悠の様子は本当に一変した。
そろそろ終わるだろ、の瞬間に悠はテレビを切った。もちろん電源を、だ。この部屋に真剣はない。
思って、の段階で悠は一気に眉間に皺を寄せた。思い出してしまったようだった。何をか、というのは俺にもわからなかった。
な、の所で悠は両手を組んでパキ、ポキ、と音を鳴らした。
来た、で悠は見えないはずの目を開いた。悠は怒るといつも目が薄開きになる。何か、目が見えないはずなのに、というか、だからこそ何かしら人の心の内を見透かしてしまうような、そんな恐怖、というか威圧感を相手に与える目。そんな目で今悠は俺や真彦を睨んでいた。
「……なぁ、あいつめっちゃ怒ってるけど、何があった？」
悠の眼前で、大きなガタイをした真彦が面白いくらいに――かと言って笑うことは到底できないが――ヒソヒソと小声で、隣に立つ俺に尋ねた。

「いや知らねぇよ」
俺は俺で真実を耳打ちで返すしかない。
「漢は言葉も使わず語る、とか何とか言うけどよ……語り過ぎだろ、ありゃあ……」
「とりあえず訳を聞いてみなけりゃ始まらないよ、な」
訳の分からない怒りを湛えた悠を二人して見る。悠は小声で、しかしハッキリと通る声でしゃべり始めた。
「今日は久々に師匠もいないし、学校も休み。自主トレや稽古も時間を調整すればどうにかなると思っていた……」
そういえば今日の稽古やら何やら、三人揃ってないとできないことはことごとくこの時間を避けるように悠は予定作りをしていたな、と思い出す。
「全てはこの時間、この時間にテレビを見ること。その為にここまで頑張ってきたんだ……」
どんだけ見たかったんだその番組。今昼下がりなんだがまともな高校生男子が見たがるような番組なんかやってるか？
「アレ、だよな……？」
真彦が指を指して言葉を挟む。悠がその指で差すものを目線で追うことや読み取ることはできないが、こいつはバカだからしょうがないか。
「そうだよ。アレ、だよ……！」
読み取ってるよ、おい……！
そんな軽い驚きはともかくとして、真彦の指の先には怪獣のぬいぐるみが置かれている。俺たちが幼稚園に通っていた時に三人とも大好きだった幼児向け特撮アニメの悪役怪獣のぬいぐるみだ。ずんぐりむっくりな体系で、その顔自体は何を考えてるのかわからない、というかもうアホなんだな、という言葉一つで納得してしまいかねない半開きの口。縦長の目。そして腹に凶悪そうな模様。もしやこっちが本当の顔？　とか思わせておいて実は全然そんなことはありませんでしたー。そんなツッコミどころ満載、というかもう色々扱いどころに困る悪役怪獣のぬいぐるみが悠の後ろ、窓際の棚の上に鎮座していた。
どうしてそんなものがここにあるのか。そしてそれが何に関係しているのか。もはや言うまでもない。聞くまでもない。
「どうして……」
悠の独白は続く。
「何故このタイミングで解散なんかしてくれたんだ！　お陰で特番組まれて『行くな！　ガーゴン』が潰れてしまったじゃないか！」
やっぱそれかよ！
「畜生！」
叫ぶ言葉と同時に悠の左手が机を叩く。項垂れたその姿が本当に無念そうに見える……のは大いに問題があるような気がするのだが。
「まぁ、もうお前もこういう幼児向けアニメからは卒業しようぜ、ってことなんだよ」
適当なことを俺は放っておく。でもこれ、結構本心なんだが。

「剱人、お前はこの作品の良さがわかってないからそういうことが言えるんだよ！　僕がどれだけこの作品を楽しみにしていたか、わからないだろう！」
　うわぁ……。引くわー。という表情を露骨に出しても、こいつには伝わらない。そもそも、アニメをアニメと言わず、作品、と呼ぶ時点で何かがおかしいんだ。こいつは絶対にそうは思わないんだろうが。
「まぁ、何だ。悠。そいつ悪役だし、悪い奴だぜ？　可愛がるなよ。ガーゴン忘れて剣道へゴー？　みたいな？　ハハッ！」
　真彦のお寒いギャグ――にすらなってねぇんじゃねえか？　まぁこの際それは放置しとくけどさ――が飛ぶ。悠はガーゴンのぬいぐるみを抱えて机に突っ伏している。……子供か！　しかし反論だけは早い。
「これがどれだけショックかわからないだろうね……二人には。ふざけてるよ。あの首相。かの邪知暴虐の首相！　このタイミングだけはない！　ないよ！」
　つーか本当にあの時テレビ見ながら本当に激怒してたのかよ！　かの邪知暴虐の王、じゃないけど首相に本当に殺意抱いてたのかよ！
　俺のアテレコ、意外と当てになる。……そんなこと考えてる場合でもない、か。
「もう良いじゃねえかよ。な？　悠。おめぇオタクじゃねぇんだから……」
　その発言もまたスイッチだった。
「オタクの何が悪いッ！」
　この言葉が今日一日で俺が聞いた一番の大声だった。俺も真彦も面食らうしかない。
　その後のことはもう細かく言い表すのも正直苦痛だ。
　何故か正座させられる俺と真彦
　こんこんと説教される
　熱の入るオタク講座
　特撮アニメの何たるか
　ガーゴンはかわいい
　かわいいは正義
　故にガーゴンは正義
　悪役でも正義
　そもそも悪役は悪人（悪獣？）じゃない
　見てよこのとぼけた顔！　どこからどう見ても悪い子じゃないでしょ
　熱弁を振るうのは結構だがお前はその顔を見たことがない。
　正座を解いたり欠伸したりすると――音はたっていないはずだった――剣道で鍛えられためちゃくそ早ぇ手刀が飛んでくる
　何でわかんだよ？
　とにかく打たれまくる俺と真彦
　イラッとくる
　真剣白刃取りしてみる

今度は蹴られる
蹴り返してみる
ガーゴン（ぬいぐるみ）に噛まれる
えー。と固まる俺と真彦
説教続行
今日放送予定だった話の気合いの入った解説
自分がそれをどれだけ楽しみにしていたか
そして『行くな！　ガーゴン』が潰れたことの無念さの激しい解説
それはまさしく他の手を振り解いたりもしていないのにも関わらず菩薩から垂らされた糸が切れて落ちてしまったカンダタのような心境
世の菩薩というものはここまで悪辣な行為をかくも平然と行ってくれるというのか
以下エンドレス
結論
……なんだただの地獄か
いや、じゃなくて。何なんだこの地獄は！　意味がわからない！
硬直した頭で思い出すのは高校での悠の友人関係。そういえば訳の分からん連中と悠は最近仲良くしている。何か同好会か何か組んだんだとか言ってなかったか？　そもそも剣道部に所属しておきながら同時に他の部活なり同好会に所属することは校則違反だろうがよ。あいつらはそれを知ってながら会員の人数を三人にするために強引に悠を名目上の面子に入れているのだ。そうじゃないとまず同好会すらも認められないからな。
悠も悠だ。あいつらの所為でそうなったのか、とか問われると全くもって違う――からこそ誘われちまった訳なんだが――が、一番大事なのは剣だろうが。オタクっぷりに拍車かかっちまってる。
「ちょっと！　聞いてる？　剱人！」
うるせぇな聞く必要もねぇ話だろうがよ！　そもそも師匠の前ではそのオタクっぷり微塵も出さずに隠してる癖によ！
口に出して言ったら羽交い締めにされチョークスリーパー、ヘッドロック等々やられかねないから黙っておく。この間のは効いた。俺が余りにも冷静じゃなかった、というのもあるが、そもそもケンカで関節技を平気で持ち出すこいつの情け容赦のなさには呆れるものがある。
そう思っていた時に、救いの神の声がかかる。
「ただいま帰りましたー」
嶌の声だ。良かった。これでようやく解放される！
その小柄な体つきと同じで、ちょこちょこと歩いてくる嶌の手にはＤＶＤらしきディスク。
「あ、借りてきてくれた？」
悠はいきなり機嫌の良さそうな声で嶌に尋ねる。嶌はそれにはい～。と即答する。さっきまでの不機嫌さ加減はどこいったよ。
「はい～。ところで、どうして真彦さんと剱人さんは正座されてるんですか？」

よしよしよくぞそこを訊いてくれた。流石気の効く奴だ。
かくかくしかじか。説明する。
「それは少し反省が必要ですね！　もう少し正座してるのが良いと思います！」
なんでやねん！
あぁ。忘れていた。こいつも行くな！　ガーゴンになるとこうなるんだよ。あぁ。すっかり忘れていたさ俺のバカたれ。
「俺、もう足が痺れてるぜ……」
右手の親指を立てて誇らしげに真彦が白旗宣言。
「修行が足りません！」
「マジかよ！　嶌にそれ言われるのかよ……。そこは許せよ……。お前らとはウエイトが違うんだよ……」
「ガーゴンに謝りなさい！」
「えー」
「えー。じゃありません！　謝るのです！」
「謝るのです」
悠まで調子を合わせて謝罪を迫る。すげぇなオタク。
一先ず頭下げれば正座と下らない説教から解放されるのだ。それだけ、それだけを目的に俺ら二人はあっさりと頭を下げた。ガーゴンさんマジさーせんした。ウイッス。
「つかさー。ガーゴンはかわいくはねーだろ？」
真彦のバカが口を開く。これぜってースイッチだろ？　学習しねえ奴だなぁ。ほら。悠と嶌が顔を見合わせて頷き合ってるぜ、真彦。
とりあえずガーゴンが飛んでくるんじゃね。
「ガブ。がおー！」
ほら。嶌の音声付きで。怖くもなけりゃ痛くもねえけど、ガキかって。
「いやいや、どんだけ見たって。ほら、かわいくない」
「がおー！」
「謝れ！　ガーゴンに謝れ！」
ほらまた訳分からんことに……。
「ガーゴン実物は体長数百メートルに体重十万トンだぜ？　ぜってーかわいくねー！」
真彦までそういう話題について行きだしたしね！　何だこいつら！
「ガーゴンはかわいい！」
「かわいいは正義です！」
「ガーゴンはかわいいから正義！」
「ぜってーかわいくねーから悪だろ？」
「この憎めない顔！」
「その顔をお前は見たことねーだろが」
「見なくてもかわいいはわかるんです！」
「意味わかんねえよ」
「このフォルムがかわいい」
「いやフォルムて」
「こう、こうして、丸みがあって。うん。かわいい！」

「いやだからそれはぬいぐるみだからであってだな……」
テレビのある和室で繰り広げられるオタクによる怪獣アニメ談義。めでてぇこった。埒あかねぇよこのバカどもが！
「俺はもう良い。とりあえず稽古行かねえとな！」
その言葉を捨て台詞にして部屋を後にしようとした。その瞬間に聞こえたのは、
「あ――――――！」
という嶌の悲鳴。何事かと皆で嶌とその手にあるディスクを見る。
「これ、……ＤＶＤじゃないです。よね……」
紙袋の中のディスクをちらりと見て確認してみると、それには確かにブルーレイの標章が描かれていた。
「あー。違うな」
俺なら間違わないだろうが、機械音痴、というかあまり詳しくない嶌なら間違えそうだ。というか、ちょっと前に間違えてた。だから今回は気づくのが早かった訳だ。
……ま、おせーけどな。
「見られ、ない？」
嶌の疑問系の言葉。いやそりゃそうだろうよ。
「……」
「……」
分かりやすい二人の沈黙と項垂れ。落ち込み様が半端ないが、まぁこれから稽古だ。頑張ってもらわないとそれは困る。
「んじゃ、行くか。真彦。悠は頼むわ」
「おう。行くか」
真彦に引き摺られ、悠も道場へと向かう。「あー……」
呟きと共にガーゴンの様な半開きの口。その口から魂が抜けて行っているのが、別にスピリチュアルだとかそういうのを信じているでもなく持っている訳でもない俺にも見えるようだった。これはあの時の借りを返す絶好の機会だな、と俺は打算的に思っていた。
そしてそれは思いっきり間違いだった。あいつこういう時むしろすげぇ気合い入るのな。八つ当たりだろうけど、打ち込みの気合いただもんじゃねぇ。数割増だった。八つ当たりだろうけど。まぁ幼児向けアニメ見られなかったことに対する八つ当たりだろうけど！
ガーゴンそんな好きか！　もうガーゴンと結婚してしまえ！
そんな幼稚な文句も口をついてしまいそうになるのをぐっと堪えて――流石にガラじゃないだろ？――、じっくりと向き合った。決して負けっぱなしだった訳じゃない。数的には、五分、だったろ。この前みたいなことにはならない。それに、やっぱり気合いはあっても十二分なメンタルでない悠だ。崩れはある。むしろ、十分でない悠に対して五分を越せない自らの鍛錬不足を責めるべきか。
竹刀を握っている間はともかく、そうでない時の悠の落ち込みようは確かに大きかった。師匠も当然気づくが、その原因を詳らかに語る訳にはいかない。師匠はオタクを理解しない。できない。ガーゴンかわいい！　力説すれば鉄拳が飛びあのぬいぐるみは速攻で燃やされる。だから悠のガーゴングッズ――そう。あのぬいぐるみ

以外にも大量にあるのだ！　これだからオタクは……――は嶌の部屋に全てある。孫娘の趣味、ということにしておけば、

「……孫の教育、というものにはあまり口出しはできぬ、よな……」

ということにしておけるのだ。よもやあの殆どが内弟子の悠のものです、なんて分かる訳がない――そう。嶌は悠に影響されてガーゴンにのめり込んだクチだ――。このアイディアは悠の祖母やその兄貴にあたる爺さんが幼い日の悠に教え込んだものなのだが、完璧すぎる。それを約十年徹底して守りきっている悠には正直驚きを禁じ得ない部分もある。そして俺らもよく話してないよなぁ。……何かおごってもらうくらいはしてもらっても良いよな。そんな気がしてきた。急に。

翌日学校に行くと、例のアニメ・漫画同好会の連中が二人して俺に突っかかってきた。

「一体全体どういうことなのですか？」

「説明を求める！」

朝一からうぜぇんだよてめぇらはよ。

「何が」

短い言葉にとっとと失せろ、という意味合いを乗せてぶつける。が、こういう人種はそういう気持ちを読み取るのが苦手というか、できないんだろう。昨日の悠もそうだったし。オタクモードの悠がめんどくさいのと同じ理由で、というかそれ以上のグレードで、こいつらはめんどくさい連中なんだろう。たまらない。

「悠殿は元気がないではないか！」

「悠殿の覇気がないではないか！」

あーはいはい。理由は知ってるが語るつもりはない。

「理由は知ってるぞ？」

「もう本人から訊きましたからね！」

「じゃあ何故俺に話しかける」

俺は悪くない。悪いのはタイミングの悪い衆議院解散と、対応していないディスクを勘違いして借りてきた嶌だ。

「これは彼を励ます方法を考えねばなるまいよ！」

「あーっとこんな所に最高のアイテムがーッ！」

無駄に息の合いまくりな二人組の片割れが制服の胸ポケットから出してきたのは、「映画の前売り特売割引チケットお？」

タイトルを確認する。

『行くな！　ガーゴン　～だって爬虫類だもん♪～』

うおぉぉぉ……。

「さぁ！　これに誘うのです！」

「誘うが良いのです！」

意味わかんねー。

「つかこれお前らどこで手に入れてくんだよこんなの……」

「こんなのとは心外ですな！　それはこの僕が近所の小学校付近で配っている人に頭下げまくって手に入れてきたんだよ！　いや、これ小学生以下に配る物だから……とか言われても、でも高校生も使えますよね？　使えますよね！　と食い下がり、小学生に気持ち悪ッ！　とか、あまつさえ無言で防犯ブザーを鳴らされても心折れ

ずに土下座付近まで頭を下げて手に入れてきたものなのだよ！」
その熱意はどこか別の場所で使えよお前ら恐ろしいわ！
「つか三枚もらってんならお前ら二人で悠を誘って行きゃ良いじゃんか。俺を巻き込むな」
「この割引券は一枚で三人分割り引けるのですよ！」
「手に入れてから気付きましたでごわす」
アホかと。
「それに……」
それに、何だよ？　俺の言葉に対し、
「同好会を作る条件として、活動内容の報告があるんだよ。そこも基本はザルなんだけどね、けど、ほら。やっぱり僕がいるからその特例をスルーはできないってことで」
横から悠が入ってきた。
「映画を見てレポートを書いて、それを提出するくらいはしろ、と相成った訳です。それにメンバーも多い方が好都合ですし……」
少し申し訳なさそうに同好会の正規メンバー二人は言う。なるほど。自分たちの利益もバッチリある訳か。納得。
「御免被る」
言葉短く返答。二人が大きく落ち込む。レポートなんて書けるかアホんだら。二人は慌ててレポートは自分たち二人だけが書けば良いんです！　とか言ってきたが、無視した。そもそも俺は映画自体に興味が無い。アニメにも、ガーゴンにも。バカバカしい。
そう思って同好会メンバー三人から離れると、後ろから女子に声をかけられた。後ろを振り返ると、右腕に無機質な、そして大きな杖を装着した香織さんがいた。
「さっきの映画の話なんだけど……」
聞いてたのか。
「私、見たいな！　映画。……も、もちろん、剱人君が、良ければ、だけど……」
嘘だろおい何の差し金だよつかどうしてこんな積極的なんだよえー……。
「この映画、気になってたけど一人で見に行く訳には、いかなくて……」
「が、ガーゴン、好き、なの？」
「う、うん……」
香織さんの少し赤らんだ顔を見てしまう。いや、何と言いますか……。細かいことはどうでも良いだろうと思う訳ですよ。ええ。……えぇ！
御免被る発言から一分経ったかどうかで俺の発言がひっくり返り、メンバーに田中香織さんの名前が加わった。
「うん。真彦はどうでも良いってことでもう参加することになってるから。よろしく」
悠のこの発言に俺が心の中で舌打ちしたことは気づかれないようにしないといけない。何と言っても香織さんの目の前だ。そうだ目の前だ。うん。
「あとは、瑠夢さんかな」

悠の行動力は舌を巻く領域だと思う。この積極性って何なんだろ。
ちなみに瑠夢――るう、と読む。誰も初見で読めないことが一つの悩みらしい――は剣道部唯一の女子部員だ。
「皆でガーゴン！　楽しみだなぁ」
それだけかよ。

それから一週間後、映画を見に行くことになった。大盤振る舞いな割引があるような場所だ、規模も小さな、田舎の古ぼけた映画館、そして親子連ればかりの映画館に、高校生が八人群れをなして入る。
異様な光景じゃ、ねぇよな？
香織さんがいなかったらまず口をついて出ていたであろう文句の一つを心の中だけでつぶやく。制服を着ているでも無く、簡単にバレやしねぇよ。誰に言うでも無く心で呟く。
映画自体は、まぁ、あれだ。子供向けだ。うん。そこに色々言ったって始まらねぇ。ただ、
「そこだ！　頑張れ！　ガーゴン！」
「立てー！　ガーゴーン！」
「ガーゴン」
「それガーゴン！」
「頑張れ……頑張れ、ガーゴン……！」
俺以外皆子供と一緒に大声あげてガーゴンの応援をするんだよな。これ、すっげぇ不思議な気分だった。なんかこう、アーティストのライブとか行って、自分だけ専用の応援の振りを知らずに行ってしまって浮く、みたいな。もしくは、夏休みの宿題を準備してたら周りが俺の知らない課題を提出しだす、みたいな。あーいう気持ち。あれだろ？　ここ、ガーゴンファンしかいないんだろ？　もうガーゴンファンしか住んでない町なんだろ？　もしくはあれか？　ガーゴンファンが住んでる町なんじゃね？
とりあえず映画って、静かに見るっていうのが最低限のルールなんじゃね？　っていうレポートを俺は提出したということだけ、最後に言っておきたいと思う。

（了）

雷の内部

る

だんだんか細くなってゆく未来も口で咥えてカスタネットの軽快なリズムで踊ってしまえば何もかも許されてしまうような夜に不意に訪れた不思議な瞬間は真っ昼間の草原に咲くたんぽぽみたいで私は永遠です、と言ってはみたものの狂ったように笑う女たちからしてみればそれはそれで狂っているってことになって、未来も電池切れのレーザーポインタが地球に寄り添いながら力尽きるみたいに、白けちゃったからソファーに横になってエレキギターと電子バイオリンが踊り狂う全ての人のどうしようもない心の隙間を埋め尽くそうとしているのを仙人みたいに見ていた。競馬で大勝ちした日ってのは夜の街を通り過ぎる女たちの頭上に値段がぽこん、と浮かび上がってるのが見えて、そいつとオネンネするにはいくら払えばことたりるかってのが瞬間的に分かっちゃったりするわけで、ちなみに脚がきれいなお姉さんってのはやっぱ相場が高いわけだ。とはいえ、借金取りがガチで怖いからコンビニのＡＴＭでアコムやらアイフルやらのカードを財布から取り出して十万単位で爆撃する、したら途絶えていた未来がぽつぽつと降り始めて掌を差し出すと冷たいけど皮膚を優しく愛撫するようにいつのまにか馴染んでいく。私が蹴りだした足の行方がたとえ真っ暗闇の路地裏で袋小路にぶち当たってもそれはそれでハッピースカイ、全ての人に平等に与えられた死をその時は喜んでフェラチオしようじゃないか。

私が世界で最も愛していた曾祖母が病院のベッドで死ぬ前の人間がみんなそうであるように顔をパンパンにさせながらチューブを体中に巻きつけられている時、天井から黒い鉄の棒がゆっくりと下りてきて彼女の口の中に突き刺さろうとしていたのを見てから、死ぬってのはあの棒がゆっくりと口の中に突き刺さっていくものなんだなって知った。彼女に意識はなかったけど懸命にその黒い鉄の棒を吐き出そうとしている姿がどうにも惨めったらしくてさっさと病室を後にしたその時に体に纏わりついた慣性の法則が安アパートの一室を缶ビールの空き缶とタバコの吸殻で埋め尽くしている。

腐敗、ってのはオデュッセイアに出てくる求婚者に似ていて貞操たるペーネロペイアは私の脳みそのどこかの神殿で寝そべっていて、夫たるオデュッセウスを待ちながら一方ではそのどうしようもない腐敗に身を任せてしまってしまいたいという願望を抱き続けている。そんな一人三役を演じながら今日という日だってチューニ

ングはフラットのまま、かなしい予感と幸せな瞬間を煮込んだ何となくマジカルなシチューを啜りながらオレンジのミニスカートに包まれたウェイトレスの奇跡的なお尻の揺れ方の法則について頬杖をつきながらいつまでも思いを巡らしているこの夜の始まりのウェットな時間。お尻ぺろぺろしたい。

私は生活のことを語らないのではなく、生活というものがないので語る術が無いってだけで、分かっているのはまだフェラチオの時間には早すぎるってことで、今はただだんだん暗くなっていく夜の空とディープなキッスを楽しみたいってこと。

脳みその機能のうちで一番重大なのは五感に伝達される膨大な情報の中から何が現実なのかを選択することに尽きるわけで、その様子は溢れかえる情報の中から確かなものを積み上げて一つの頂点を形作る、という意味において、私たちはとんがりコーンの先端部分で不自由なダンスをいつまでも踊り続けてゆく、ということに他ならず、ケミカルな作用で脳みその機能を揺さぶっても私たちはどこまでも現実のありかを知ってしまっているし、そうでなければ狂人だということ。私は両足で地面を踏みしめる、歩き出す、こける、立ち上がる。多分頭に詰めこまれたものが少しだけ重過ぎる、そういうリアル。

街のネオンに夜が馴染んできた頃、空は突如亀裂を生じてその内部が鮮やかに光った。遠雷はもったいぶった末にその音の轟きを差し出した。素敵なプレゼントをありがとう、その亀裂はピスタチオの殻のそれのように思わせ振りな様子で視線を吸い込んでゆく、雷の内部へ、何かしら神聖なものとして差し出されたものへと、それを娼婦のクリトリスと同等のものとして舐るものたちをノーマルと呼んで丸く収まっている世界で、ピスタチオの殻を丁寧に剥ぎ取って中身を上品に召し上がる流儀で破綻無く進行していくあの素晴らしい世界に降り続ける黒い鉄の棒はどこまでも優しく、雷の内部で、光になっていったものたちを光のまま摘み取ってゆくのだろうか。とんがりコーンの先端を並べて、ほら、あそこまでは自由に歩けるよ、というやり口で、手と手を携えながら感じる永遠。ディズニーランドの手口で全てを招き入れる真っ昼間のたんぽぽ野原は悲しいほどに不可侵。それは消え去ってゆくものたちに素敵なかたちでさよなら、と手を振れなかったものたちへの報いとしてどこまでも眩しく、差し出されたピスタチオに触れることすら出来ずに佇むものたちを外部としてあくまで外部のままその光で包み込んでしまう。

ステータス欄にずらっと並んだ膨大な「私」と銘打たれた設定を延々とジョブチェンジし続けながら放浪する夜がかりそめの優しさを露呈してくれるのに任せて、私という設定は強い酒を呷り続ける。その傍に一人の女の子がいたっていい。パステルオレンジのワンピースに身を包んだ軽薄な女の子で、マクドナルドの流儀で顔に貼りついたスマイルが何か重大なことを隠していて、夜みたいに私という異物もからから笑いながら飲み干してくれる。そんな女の子が。

そしてたくさんの夜を一緒に過ごす。もうほとんど見えなくなっ

たか細い糸を互いに縫い合わすような会話を続けて、夜に縫い合わされた私はもう完全にほつれながら、そこで初めて許された言葉で数篇の詩を紡ぐことが許されるだろうか？　君はきっと優しく頷いてくれたり、言葉の意味を尋ねてくれたり、時には気紛れに涙を流してくれたりする。けど知っているだろうか、そのジョークみたいな涙でさえ驚くほど光に溢れていることを。そしてその涙を拭うには余りにも私の手は穢れていて。

女の子を置き去りにして飛び出した右足が踏みしめるアスファルトを貫く朝の光が怪物的な言葉でもって私を問いただす、お前の名は？　お前の意味は？　お前の向かう先は？　私は「コケコッコー」と太陽にカモフラージュをかましながら、息も絶え絶えになって寝床に辿り着き、女の子の涙がその神聖さにおいて恐ろしいほど雷の内部と同じだということに驚愕し、もう一度それを思い描き、触れようとしては、それに触れることなど出来ないことに気付く。まるで指先と指先を合わせるとたちまちショートして焼け焦げになってしまう恐怖から神に祈ることが出来なくなってしまった最も信心深い修道女みたいに。私は穢れている。

ある時分、とんがりコーンの先端から滑り落ちた私は、夢の世界の招待人ファンタジアーンと名乗る小太りの中年男と話をしていた。ファンタジアーンはよく汗をかく男だったのでいっそのことバスタオルを渡すと、「これは、これは、あなたは本当に心の綺麗なお方だ」と誰に言うでもなく呟き、私はあの夜彼女の涙を拭えなかった手を見つめていた。ファンタジアーンは実に合理的かつ嘲笑的な男であったので、私が例えば天国のことについて話すと、彼はすぐさま天国というのはいわば混浴の露天風呂みたいなものですな、と言った。その後、やつらはおまけに潔癖症でしかも羞恥心が無いときてる、あなたのほうがよっぽど人間的だし、こういったらなんですが「天国」というものに一番近いのも……と継ぎ足そうとしたが、混浴という言葉に興奮した私は、すぐさまかの男を玄関口から突き飛ばした、ファンタジアーンはあーんと言いながら玄関の扉にその体を抉られながら視界の中から消えてなくなった。

その夜再び遠雷を見た、私はもう知っていた、私があの裂け目から生まれてきたことを、黒い鉄の棒はもう私の喉もとまで刺さっていた。部屋に戻って狂ったように泣き叫び、X-videosで大量のエロ動画を鑑賞し、もう幾分と黄ばんだ曾祖母の写真をある本の中から見つけた、栞にしていたのだった。それを幼い少年が憧れの女性の自転車のサドルを盗むときの慎ましさで取り出し、懐にしまった。そのままパチンコ店に行った、爆ヅキした。曾祖母の顔を指先で撫でた、精液を拭き忘れた手はカピカピになったあと、度重なった大当たりの熱量によって染み出た汗と混じりながらぬめっていた。すると、彼女の表情は白い液体でほんのりぼやけながら何かを許すように微笑んで見せた、なんていうことはもちろんなくて、けれど私はそれでよかった。

「さよなら」って呟いて、いつまでも見つめていた。

（了）

其のX、真央。初恋・地獄篇

小野寺那仁

島内理紗は本祭の日も浴衣姿で来ることはない、と真央は踏んでいた。あくまでも祭りに参加しようとはしない。冷たい無機質なレンズを通してこの雑踏のエネルギーを汲み取るつもりなんだろう。

何年かぶりに水玉模様の浴衣に袖を通すと羞恥心も蘇る。家の中では家族がもの珍しさからじろじろと眺められたのが気になった。とうとうおかしくなったのかと思われたのかもしれない。一連の復讐がことごとく失敗していたこともあって今度こそはうまくやりたい、なんとかして島内理沙の惨めな姿を村の人たちに知らしめたいと思ったが、まだうまいやり方が思いつかない。

家を出て神社の境内に向かう。宿場町の軒が途切れてから先は、石畳の曲がりくねった古道が続いている。首のない斬られ地蔵が三体、夏草にうずもれている。その細い道を近隣から集まってきた見物客や遠来の観光客に混じって真央は歩く。にぎやかな声がそこかしこにこだまする。祭囃子が遠くから聴こえてくる。老いた人にはつらいようであちこちから不満の声が漏れてくる。振り返れば足元には宿場町が見渡せられ、遠くには山脈が連なり街の周囲は緑の苑が拡がっていた。夏の陽射しは徐々に掻き消されて影へと変わっていく。真央には珍しくもなんともないのだが、観光客たちはいちいち振り返ったり立ち止まったりするものだから歩調を合わせざるを得ない。

息を弾ませて鳥居をくぐると観光客たちはやや拍子抜けする。、右手には舗装された新道があり、車が往来している。駐車できる場所は限られているので停車して人を降ろすとまた戻っていく。露天商のワゴンや消防車など許可された車両が停まっている。

さっそく境内を舐めるように見回し理紗を探す。焦燥は頂点に達し、ふつふつと込み上げてくるものがあった。祭りの興奮状態が真央の気分を昂揚させていた。まるで山姥の命を受けたように理紗への復讐心がこの場所へと導いてきたのだ。そう感じたのはまさにその時に若衆の笛の音は「山姥の唄」であったからだ。

山姥の唄は哀切を伴った鎮魂の唄だった。

真央の高校生の時、物好きな他県出身の女教師が伝説の詳細を調査しようと思い起ち、生徒たちを使って、神社や寺院に残る古文書を調べたりした。だが、記録は何も残っていない。そのうちにようやく八十過ぎた老人から話を訊きだすことが出来た。

山姥は姥捨てに失敗したある老婆だと言うのだ。数日後、猟師は

強靭な老婆を猟銃で撃ちそこない追いかけるうち、老婆の拵えた落とし穴に嵌って、竹を尖らせた幾本かの槍が突き立てられていたために猪や他の動物同様に惨殺されたということだった。しかも猟銃も奪われた。それから数カ月の間は山に近づく旅人達が猟銃で脅されて金品や衣類を奪われた。何度か村に懇願して山姥との戦争を持ちかけたが、古老たちは反対した。表向きの理由は、村人の困窮のために負担はかけられない、地形に知悉した山姥に勝利するのは難しくこれ以上の犠牲者は防ぎたい。裏向きの理由としては、何と言っても山姥と化してもほとんどの家の親戚筋、あるいは幼女の頃からの知人であってそれを征伐するにはあまりに忍びない。姥捨ての風習自体が冷酷非道なものである。猟銃で撃ったのはそもそも姥捨てルールに違反したもので、罠にかかって死んだのも殺人でなく事故であり、猟師が罠にかかるのは恥だとか、正当防衛とかという声もあった。古老たちが喜んだのは事件をきっかけに姥捨て廃止の機運が高まり自分たちの待遇も変わり、目前に迫っていた姥捨ての日が解消されたことにあった。それからというもの山姥の祟りを懼れて神社の賽銭箱の脇に貧しい中から団子や粟やコメを置いていく者が増えていった。けして村人は憎悪しているわけではなくあなたに同情しているという意味の鎮魂曲がつくられてはじめのうちはおそるおそる必死で唄われたということだ。それはそうだ。ひとりの反逆者がひとつの村を滅亡させることは、実はそれほど難しいことではない。川から毒物を流したり家々を焼き払ったり散弾銃で撃ちまくるなどされたらひとたまりもないではないか。その人は山姥の末路については知らなかった。あたかもいつまでも生存し続けたかのような話だった。

真相はつまびらかではない。犠牲者の猟師の妻は苦労したので怨念混じりに孫に聴かせてそれが代々語り継がれて、直接関係のない人々はいつしか忘れ去り、都合の悪いことなので記録には残されなかったようである。

結局、女教師は公に調査結果を発表することはしなかった。古老の話は後世の作り話めいていて信憑性に欠けるし裏付けになる証拠に乏しい。話としても陰惨で生徒に広めるには教育的な価値があるとは思えなかった。観光パンフレットに掲載するにはマイナスイメージになりかねないと判断したので、たまたま記録者のひとりだった真央にも記録を廃棄するように求めてきた。言われるままに真央は封印したが記憶としては残った。その時は、気にも留めなかったが、物悲しい調べを聴くと他人事とも思えない。もはや人ではなかったかもしれないが。気分を落ち着けるためにメンソールを吸い込むと氷片が咽頭から肺へとまっしぐらに駆け廻り初めて快感を味わった。

宵闇が迫り、町内を練り歩いていた山車が戻ってくる。大太鼓が破れんばかりに打ち鳴らされる。若衆は一升瓶を抱えてラッパ呑みしている。社殿の前に山と積まれた樽酒が次々に蓋を割られて、誰かれになく振る舞われる。すっかり酔いが回って足取りの覚束ない男もいる。真央は差し出された升を一気に干した。宮司が近寄ってきた。真央は慌てて、何気なく吸殻を捨てて足で踏みつけた。気づ

いた人の何人かは眉を顰めた。
「清造さんの娘さんじゃないか。まあ何とも珍しい。民子さんとはしょっちゅう話してるんだが、あなたは東京に行ってるものだと思ってました、祭りだから帰ってきたの？」
「ええ、まあ」真央は俯いた。宮司は探るように覗くので化粧の薄い真央は恥ずかしく思った。
「そういえば、あの時以来ですね。あなたがまだ高校生だった頃。あなたは山姥伝説について調べていた。担任の、何ていう方だったかな。あの人。すぐに退職してしまわれましたね」
「私も忘れてしまいました。あっ、伝説について訊きに来たのは覚えてます。でも何を教わったのか、ちっとも覚えていない」真央は笑った。数年ぶりに笑った気がした。
「相変らず笑顔の素晴らしい御嬢さんですね」
「えっ」六十過ぎの男に云われても動揺することはないのだが世間と言うのはわからないものだと思った。
「覚えていないも何も私は何も語っていませんよ。語るべきではないと思いましたからね。山姥の顛末はそれはもう悲劇的で。あなたたちが調べ上げた姥捨てに失敗した或る老婆が山姥に化したというのは事実なんでしょうね。でも記録には残っていません。この境内にお供えものを捧げて山姥の怒りを鎮め山姥の延命を図ったのも確かです。そのまま冬になれば息絶えてしまうだろうと思ったのです。赦しを願う文書を供え物に添えて、また共に暮らそうと提案もされてましたが、山姥は猟師を殺めてます、旅人を襲撃することも数知れず様々な悪事にも手を染めてしまっていたから応じるわけにもいかず、そもそも文字が読めたのかも定かではない。もはや人ではなくなっていたと言っても過言ではない」
「宮司さん。あたしはすっかり変わってしまったんですよ。もう山姥伝説について調べてるわけじゃありません。それに……」
「それに？」
「あの時に話せなかったことをどうして今になって話そうとするのですか？」
「それは失礼しました。そんな話を聞かせたらあなたが村を嫌いになって何処か他所の土地へ行ってしまうような気がしたのです」
「ああ、そういうことですか。それなら構わないです。あの時は何も考えていませんでしたが、今はあたしは村が嫌いで村人たちと話すこともなく明日にでも他の土地に行ってしまいたいと思ってるくらいですから！」
「そうなんですか。それは残念でなりません。でも仕方ないですね。村にはあなたと同じ年頃の娘はほとんど残っていないですからね。それなら山姥の顛末について語るのは止しましょう。気持ちいいこともないでしょうし。また気が向いた時にでもお話ししましょう。あそこに小屋があるでしょう。あの小屋は再建されたもので当時のものではないですが、あそこにしばらく山姥が住まっていたという言い伝えもあります。冬の寒さを逃れるように村人たちが造ったんでしょうね。それも言い忘れてました」
　自分は知りたかったのだろうか。いや話を遮ったのだから知りた

くはなかったのだろう。どのみち悲惨な最期だったに違いない。家には祖父もいたが婿養子だったので彼は余所者で村人との付き合いが少なかった。元はと言えば復員兵だった。

何人かの神社世話役が宮司をせかすように社殿へと連れ去っていった。辺りはすっかり暗くなり篝火だけが明るく燃えていた。人だかりは目に見えて増えてきて社殿の前はびっしりと人で埋め尽くされた。理紗を見つけるのも難しい。真央は自由に動き回ることもできない。険しい山を切り開いた神社なので社殿前の広場は狭かった。車座に人々は思い思いに自分の敷地を確保し始めている。鳥居から参道までの石段あたりはもう先に進めないのにどんどんと人が集まってくる。並んだ露店の周囲にも人が溢れてきた。想定を超えた人手のようで神社世話役たちはトラロープを花火の打ち上げ台や手筒の周囲に幾重にも張らざるを得なくなった。社殿の背後の林にも人々は入り込んだ。クスノキの大木には子供たちが攀じ登った。人々は暑いだの早くやれだの勝手なことを口走る。狭い村にこんなに人がいるはずはないのでほとんど九割くらいは何処からか押し寄せた観光客か花火マニアに違いなかった。駐在や消防の数が圧倒的に足りずにハンドマイクで「危険だからさがってください」と声を涸らして叫んでいる。

酒が廻ってきたのと人いきれで暑くてたまらない。和太鼓の音が煩わしい。真央は社殿の脇に立っていたがあまりに暑くて林の中へと入っていく。そこには人はあまりいない。梢で花火がよく見えないからだろう。そこからは神社内部がよく見渡せる。神妙な面持ちで竹笛を吹いているのはやや滑稽だった。かわいらしい少年たちもこの時ばかりは袢纏をまとって現れ、親たちが拍手喝采する。巫女はまだ小学生ではなかろうか。希望者か厄年の人たちか、お祓いを受けている。さきほどの宮司が出てきて祝詞をあげる。

「あら真央じゃない」

髪を茶色に染めた女と眼が合うと間髪いれずに話しかけてきた。彼女の手はまだヨチヨチ歩きの幼児に繋がれていた。子供を挟むように精悍な男が寄り添っていた。思いのほか童顔だった。真央は咄嗟には思い出せなかった。会釈するとしばらく一方的に話した。話していても誰だったのか思い出せない。女は尚も話そうとするがいちいち自分の近況を話さなくてはいけなくなるので手短に切り上げた。

「待ち合わせがあるからもう行くわね。坊やが踏みつけられないように気を付けてね」

「ホント、そうよね」

テンポの速い曲に変化していた。手際よく進行していく。いよいよ手筒花火がワゴンボックスから運び出されて準備される。

一眼レフを構えた島内理沙をついに見つけた。真央はほくそ笑んだ。良いポジションを取るのが仕事であり、かなり若衆に接近してくるのは予想できたことだった。若衆が理紗に気づいてふざけたポーズを取っているが、笑顔で愛想は振りまくもののシャッターは切らずレンズは別の方角を向いている。

真央は理紗に残り十メートルくらいまで接近したものの、人垣に

阻まれて理紗を視界にとどめておくのも難しくなってくる。
　平成の大合併でこの村は村ではなくなった。山ばかりであるが一応は市ということになる。同時期に幾つかの集落が祭りを行うので市長はいちいちは現れない。代わりに区長（もともとは村長だった）である美作栄治氏と神官が簡単な挨拶をしているようであった。というのもマイクを使っていてもその声は群衆の声にかき消されてほとんど伝わってこなかったからである。消防署員も何人かはいるが、やはり各地区に分散しているために担当は村の消防団が大勢を占めている。消防団員は花火を担当する若衆が主力であるから消防の法被を着て居並んでいるのはＯＢである。彼らがあらかじめ備え付けられている打ち上げ花火の発射台近くに消火用の水のはいったバケツを運んでいた。業者もいるし、不慣れな手筒を操るのを教えてくれた遠い他県の人たちもいる。署員からの注意事項の説明もあったが、区長の声よりも遥かにかぼそくて何を言っているのだかほとんど聞き取れなかった。理紗は市の広報誌からも頼まれてるのか、神社の儀式や村の行事なども撮影していた。数日前から村人たちのひとりひとりを撮影し、ここでは消防からゆきずりの観光客までなんでもかんでも写していた。そのカメラの先を追うとひとりの消防署員が目に飛び込んできた。ヘルメットを外した男は丸刈りの逞しい男だった。柔和で端整な顔立ちが歌舞伎役者に似ていないこともない。真央は理紗に無性に嫉妬し始めていた。やがて理紗は彼に近寄って何やら言葉を交わしているではないか。眼を凝らしても彼の名札は見えない。真央は理紗は彼を好きなのに違いないのだと思い込んだ。若衆に対応するときとはまるで違っている。さらに接近していく。人混みをかき分ける。何人か押しのけた。子供を突き飛ばしたような気がした。彼をもっと近くで感じてみたいと思った。どうして、ときめいているのだろう。いや、これは理紗が彼と親しくなるような予感のなせる業でそれをなんとか阻止したいのだ、或いは、理紗が真央の失態を撮影した写真を彼と二人で嘲笑するのも防ぎたい、とかいろいろと想いを巡らせているが、なんだか、もっともっと純粋な感情でもあったような気がするのだ。遥か昔には持っていた、誰に対して抱いたのかすっかり忘れてしまったが、わくわくするような感触が蘇ってきたのだった。
　真央が彼の目の前に立ちはだかった時、彼は目を丸くした。同時に理紗の顔にも突如現れた闖入者に戸惑いの表情を浮かんでいたが、真央は気づかない。
　彼の首からぶら下げている名札を一瞥で読み取る。むらかみたくや。
「あら、たくやクン。お久しぶり！」真央は、彼に抱きつくようにしがみつくと化粧の薄いのも忘れて、顔を彼に近づけた。
「やあ、お久しぶりですね」と言いつつ、村上は身体をゆっくりと引き離した。きっと村上の頭の中は遥か以前の同級生か、キャバクラ嬢のひとりか、署の宴席のパーティーコンパニオンの誰かか、あるいは最悪の場合は、彼の元彼女の変容を遂げた姿かと思い巡らせているに違いない。だが村上は悪い気はしなかった。真央は美しいとは言えないが、表情が異様に輝いていて何らかの真実味を感じさ

せるには十分であったからだ。だから以前の知り合いだろうと納得したようであった。また危険な人物でもないと。
「今はどちらにお勤めなの？」
「新島支所に去年から配属です」
それだけ訊きだせば充分だった。村上は「誰だろうか？」と疑問を抱きつつ会話をつなぎ理紗には微塵も関心を払わなくなっていた。やがて第一弾の打ちあげ花火に点火が始まり轟音と共に夜空に光の大輪を開いたので、村上は慌ててヘルメットを被り、自分の持ち場へと向かって行った。
「また、のちほど」
「ええ、絶対ね！」思いがけない言葉だった。ついに道は開かれたのだった。極彩色の光や色をまぶたに焼き付けるほど見つめ続けた。
「絶対に手に入れる」
隣に立っている理紗は今度は大輪を撮るのに夢中になっている。
「あなたね。あの写真消したでしょうね？　デジタルカメラなんでしょ？　意味ない写真は消すよね」真央は訊く。
「だいたいあなた誰？」
「壊れた日傘。覚えてない？」
「ああ、ああ、あの時の」
理紗はこちらを見ずに受け答えする。今度は観客の、特に子供たちの表情を追っているようだ。
「ああいうのも面白いんじゃないの？　もちろん残してあるわよ。見たいの？」
「だから私が納得しない写真をあなたはどうして所持してるの？肖像権の侵害でしょ」
「私は決定的な瞬間が好きなの。中年の小太りな女が不似合いなハイヒールを履いてひっくりかえった。面白いじゃないの。そういうなら表現の自由の侵害ね。だいいち、あなたの顔が映ってないから誰だかわからないはずよ」
「まあ、なんて人なんでしょ！」
「そういえばあなたの写真ってなかったと思うわ。脚だけなんて気の毒だから、一枚撮ってあげようか？」
「いらないわよ。そんなもの。こんな田舎で生活してる人もいる！みたいな偽善的な写真集でも作るんでしょ。あんたの事、ネットで調べたわよ。なんで私たちはタダであんたの金儲けの道具にならなきゃならないの？　都会の女に撮影してもらったって喜んでいるのはモテない若衆くらいじゃないの」
「ああ、ああ、そうですか。どんなところにもひとりやふたりはいるわね、あんたみたいな天邪鬼が。そんなの気にしてたらこの仕事は勤まらない」
「おまけに元彼にまで手を出そうとしてさ！」
ぐしゃりとハイヒールで何かを踏みつけた気がした。
「あ、あたし、何にもしてない」強気な態度が影を潜めた。明らかに動揺してこちらを見ている。それからも真央はねちねちと理沙を言葉で責め続けたが、何を言っても理紗は振り返らず反応しない。やがて人ごみに紛れて理紗の姿を見失なった。

みな二年ぶりの花火にうっとりとしていた。花火自体は都会の花火大会に比較するとちゃちなものだが、打ち上げ台から離れていないから迫力が違う。もし都会だったら数万円も支払わないと見られないような特等の場所でもあるのだ。ひと通り通常の花火が打ち上げられると次はいよいよ手筒に移る。竹を細工した花火は若衆自身の手で作られたと説明がされる。もちろん、専門の人々の指導によるものなので安全と思われるが万が一を考えてあまり手筒には近寄らないでほしいと付け加えられた。人々に緊張が走りやや後ずさりした。トラロープはますます押された。押してはダメと世話役が慌てて注意する。子供の何人かが若衆の周囲を走り回っている。するとまた理紗が悠然と歩いているのが見えた。誰も注意しない。

若衆の何人かがふらふらとしている。「では、はるばる他県よりお越しいただいき御指導いただきましたオコゼ組の方々の模範演技を見てもらいます！」　とアナウンスがあり、おおっと歓声がこだました。ちょろちょろと初めは小さな火であったが芯に到達すると凄まじい火柱が立ち上がって炎と火の粉で何も見えなくなった。次々に点火された。三本の火柱が十メートルを超え、境内は真昼の様に明るくなって、ロープの辺りには火の粉が降り注ぐ。真央自身も火の粉を被らないように思わず人の方へと身を捩る。そうしたちょっとした動作が波のように伝わっていき、もっと近くで観たい人と火の粉に危険を感じた人との間で反対の動きになっていた。ちょうど真ん中あたりにいる人は両方からの圧力で潰されそうになり誰だろうが構わずに踏みつけにして人の肩によじ登って難を逃れようとしていた。大人ばかりでなく子供までも「あぶない」と叫んでいる。だが、多少の危険は付き物なのでオコゼ組はおどけてそのまま続けた。怖がる観客に意図的に火の粉が降るように手筒を傾けて、きゃあきゃあと騒ぐのを楽しんだりしていた。

ようやく模範が終わると人々は安心した。それでいったんは後方に後ずさりした場所から一気に数メートルも前に押し出された。花火が始まってからやって来た人たちもいるのでさらに人は増えている。

若衆は既にできあがっているのにさらに一升瓶から酒を仰いでいる。法被を脱いで褌姿になった。同じような格好のオコゼ組の人々と比較するとボディビルダーとニートほどにも筋肉の付き方が違っていて間近で見ている人たちの失笑を誘った。オコゼ組は彼らの足元が覚束ないのに不安になってきたのか、怒声を浴びせかけて、もっと前で、とか社殿に近すぎる、とかロープを後方にしないといけない、とか叫んでいた。ひとりずつやれ！　と言う。それで俺たちがサポートするから。人が多すぎて危険だ。でも聡を先頭にやんちゃな若衆は飲んでいることもあって真っ赤になって反発している。何を叫んでいるのかわからない。練習の時は素面だったのだ。聡は大声で叫ぶ。良いカッコがしたいのだ。

「三人一緒にやる！」「ばか聡め！」かつて私的に勉強を教えていた真央は小声で呟く。

オコゼ組がすぐ下で待ち構えるという姿で若衆はしぶしぶ納得して同じように三人が登場した。観衆は不安のなかで喝采した。点

火するといきなりだった。十メートルの火柱が立つか立たないかのうちに聡はよろけて観客の方に傾けてしまった。それは意図的ではなかった。衝撃に耐えられなかったからだ。かろうじて観客への直接噴射は免れたが至近距離で火花を浴びて、不安の的中した観客たちは喚きながら一気に後方へと逃げた。さきほどの数倍の力で。あとの二人も何処へ噴射するかわからない火柱を持ってよろよろとしている。オコゼ組たちは聡を集中してサポートした。すると一人がとうとう手筒をまともに観客に噴射したのだからたまらない。人々は逃げ惑い全力で後方へと進んだ。次から次へと後方の人々も波のように逃げ惑った。或る人々は屋台に突っ込む形になった。たこ焼き屋やお面の店は吹っ飛んだ。香具師たちは怒りを露わにして防ごうとしたがとても無理でとうとう屋台は潰され、火の着いたコンロがひっくりかえり幾つかが出火した。バーナーがテントに引火してしまったのだ。すぐさま消防がサイレンを鳴らす。境内は混乱してパニック状態になった。今度は空いている社殿前や社殿の後ろの林に向かって人々が突進してきた。水を掛けようとしていた世話役たちは散りぢりになった。横になった手筒は勇敢な何人かの観客がはたいたり蹴ったりしてようやく鎮火したが、残る二本は社殿の直ぐ脇にまで後退せざるを得ずオコゼ組たちが火を消すころには相当の火の粉を藁葺屋根に噴射したあとだった。不安に駆られておそるおそる関係者が社殿を眺めていると花火の火が消えたのにまだ明るく、宵闇を焦がしはじめているのが見えた。埃を燃やしているような臭いが漂う。屋台の消火に消防本隊と団員は向かっている。人々はどうしていいのかわからず社殿の周りに集まってくる。花火見物は火事見物に変わった。だが、まだそれに気が付いている人は僅かであった。それにすぐに消火できるだろうと思っていた。屋台のテントは燃え広がっており鳥居の辺りは真っ赤に染まっていた。社殿の周りの人々は神社入り口の火事を眺めて騒いでいた。真央は押し潰されそうになりながらようやく社殿に辿り着きほうほうのていで他の人たちと共に賽銭箱の隣りで休んでいた。神社世話役たちは巫女たちに帰りなさいと指示している。世話役の何人かが集まって、花火は中止ということが短い談議で決まった。

中止と言うことが正式に告げられ、子供連れなど身の危険を感じた人たちがようやく帰り始めた。何人か怪我人が出たようで担架も持ち出され救急車のサイレンも鳴り響く。今頃になって半鐘が割れんばかりに打ち鳴らされた。

屋台の火は消防が消し止めた頃、裏山の子供たちが転がるように降りてきて社殿の屋根が燃えていると言い始めるのだ。観客のほとんどが社殿の方を指さして燃えていると口々に叫んでいるではないか。今度は社殿内部がパニックになった。はしごが駆けられ若衆たちがバケツを持って屋根に向かって様子を見に行く。だが、既に遅かった。バケツの水くらいでは焼け石に水だった。社殿にはほとんど誰もいなくなった頃にも真央はいた。目の前で相変わらず目を輝かせて今度は報道写真を撮影している理紗。こいつは狂っていると真央は思った。真央が残っているのは、消防士の村上の活躍が見たいからだ。ライバルがここにいるのだから引くわけにはいかない。

社殿内部の温度が上昇する。消防車は人で身動きができない。ホースを伸ばしているのはわかる。とうとう屋根が抜け落ち火が落ちてきた。中空が見える。誰もいないだろうと思っていたら宮司が奥で何かごそごそとしている。真央は奥に入り声を掛ける。「何してるのですか？焼け死にますよ」

「もうダメだろうか。神体だけでも持ち出そうかって思って。全部燃えるってことはないと思うが、重くてひとりでは動かないから手伝ってもらえないか」

祭壇の奥の奥まで入り込むと木簡のようなものに草仮名で意味不明の言葉が綴られている。小さな木箱だった。中を開けると破れて腐り掛けている巻物が出てきた。

「これ？　なんですか。わかりました。早く逃げましょう」

「この神社は末端だからたいしたものはないがなあ。そうそう、こっちだぞ。重いのは」黒々とした葛篭はびくともしないくらい重い。蓋をしておけば燃えないんじゃないのだろうかと思う。

「この際だからいいことを教えよう。ここにいるのは山姥なんじゃ」

「……嘘」

「開けてみて確認したらどうだ、自分の眼で。わたしが許可する」

真央はおそるおそる蓋を取る。眩暈のする異臭が漂う。数十年も前の空気なんだ、と真央は思う。セルロイドが溶けたような茶色と黒の樹脂に固められている。手足などは小熊の掌のように小さくて何が何か分からない。顔は茶色くムンクの「叫び」のようにほとんどが口で占められている大きな穴が開いているだけだった。眼球はあったのだがそれはすぐにガラス玉だと分かった。

「こんなの猿の剥製にガラス玉を埋め込んだだけじゃない。狒狒なんでしょ」

全長は八十センチほどだ。いつのまにか真央にくっついてきた理紗は写真を撮影する。「よせ」宮司は制止した。

「あんた天罰がくだるぞ」理紗は奇妙な微笑を浮かべている。

「これは誰にも秘密なんじゃ」神官でさえ知らないようだった。宮司は理紗に飛びかかり捕まえ羽交い絞めにした。真央は理紗の手からカメラを奪い取って、憎しみを込めて何度も叩き付けて破壊した。

「用はないんだからさっさと帰れ」宮司は理紗を離して吐き捨てた。理紗は、カメラを回収することもせずに茫然として立ち去った。

「山姥って狒狒だったんですか。大猿ですよね」

「君はあの時心の底から山姥を悼み、姥捨ての風習の不条理を感じていたんじゃなかったのか。少なくとも私にはそう見えた。投げやりになったり諦めたりしてはいけない」

「ううん」真央は考え込んだ。

理紗ほどではないにしろ、あたしも理紗に近くなっているということだろうか？

「本当にこれを持ち出すんですか？　びくともしませんよ」

「ではこれでくるもう」敷いてあった莫蓙を丸めてふたりは山姥をくるんだ。乾燥しきっていた。危うくバラバラになってしまうところだった。

「わたしの聞いたところではこれはやっぱり人間のミイラなんだ

よ。先代の宮司から聞いた。誰にも話してはならない」
祭壇の天井が破れて火の塊が落ちてくる。どのみち外へは持ち出せない、社殿の前方には炎が駆け廻り燃え盛っていた。数人の人々が真央たちに気付いて早く逃げろと声を涸らして必死に呼びかけている。全体が倒壊するぞと怒鳴っている。
「ありゃあ」人々はまたパニックに陥っていた。
一部が焼け落ちて崩落を始める頃に放水がようやく開始された。真っ先に飛び込んできた黒い影は消防署員の村上だった。彼の瞳は強い使命感を帯びていた。
「ここで死ぬのは勘弁してほしい」真央は言った。
「裏だ、裏木戸を破ればすぐ外に出られる」
「いえ、裏もちょっと燃えているんですけど」
村上は僅か数秒で祭壇まで辿り着く。
黒い人影が炎の中に見えた。近くなる。防火服に守られた村上だった。
「何をしてるのですか?あ、あなたはさっきの」
「神体を避難させようと思って」
「そんなことしてる場合ではない。もう一挙に倒壊しますよ。死ぬんですよ!三人とも」
村上は山姥を抱えて炎の中に葬った。
眼にもとまらぬ速さで真央を抱きかかえると炎の中を戻っていく。
「着いて来て」宮司もよろよろと後に従った。
「責任をとって死のうと思っていたんじゃないんですか。でも御嬢さんを道連れにするのはよくないでしょう」
「いやそんなことは断じて思っていない」
真央は失神するかのようなエクスタシーを感じた。もしこのまま焼け死んでも構わないのではないかと。このままの状態が続いたらどんなに幸福かしれないだろう。男の逞しい腕に抱かれるのは初めてだったから。業火にに焼かれて村上の腕と真央の脚とがくっついてしまうのを望んだ。何か痕跡がほしい。

宮司の背中には炎が巡っていたから、助かってしばらくのたうちまわっていた。人々がバケツの水を何度もかけて冷やした。世話役たちが何か尋ねようとすると、
「ああ、言うな、何も言うな、何も聞かんでくれ。わたしが悪かった」苦しみながら宮司は嘆願する。
真央は涙にむせいでいた。立ち上がって村上の顔を見ながらありったけの力を込めて抱きしめた。人びとは興奮して村上の勇気を賞賛していた。顔を赤らめていた。
「いえ、私は職務を遂行しただけですから」
そういって彼が振り返ると建物の柱はぐしゃりと折れ曲がって中央から陥没して倒壊した。
「あの黒い塊って何だろう」村上は真央に訊いた。
「宮司さんが命をかけて守ろうとしたものです、それを私も手伝ったのですが、それを知ることも冒涜になるのではないのでしょうか。

だから神体なんです」
「そんな大切なものを私は燃やしてしまった」村上は漠然とした災厄の予兆を感じているのだろうか。
「いえ、知らなければいいんですよ。人びとの守り神を明らかにすることが罪ならばあなたのしたことは闇に葬るという点では善なのです」
「いや神体はここにあるから大丈夫だ」宮司は懐から巻物を取り出す。人びとはそういうことかと納得する。真央が激しい痛みを腕に感じて浴衣を捲り上げると数センチの皮膚が焼け焦げていたのだった。村上が心配して手を差しのばした。小指のリングが禍々しい光を放った。

（了）

横を向いたまま

日居月諸

教室の後ろのドアが開いて、クラスに馴染みの薄い教師が入ってきたかと思うと、担任に軽く会釈して窓際へと進んでいく。その唇が硬く結ばれているものだから、生徒たちはざわつきも出来ずに、音も立てない足取りを見守っていた。

教師が後ろから二番目の女生徒に声を掛けると、彼女だけが皆と同じ方を向きながらも瞳を震わせていたのだと気付いた。耳元でぽつりと何かを伝えられると、瞳は固まり、目は見開かれ、顎が上がった。眉が強ばり口元が手で覆われるのに従い、教師は集まる視線から庇うように彼女の肩を抱いて、椅子から立ちあがらせた。

二つの背中が後ろのドアへと歩いていく間、残された生徒たちは背中しか追うことが出来ず、ぴしゃりとドアが閉じられた後も沈黙は続いた。銘々が今まで自分が黙りこくっていたのだと気付くと、お互いの顔を見合わせ、時々ドアへと目を配りつつ、ひそひそと声を交わし始めた。

しきりにまたたくそれぞれの瞳は目の前の瞳をしっかりと捉えられず、相手もそうなのだと気付くと、動揺は広がる。口ぶりも上ずって、会話は成り立たない。このままでは誰もが自分の在り処がわからなくなってしまうのではないかと思われた時、破裂するような音がひびき、皆の注目が向けられた。そこには担任がいる。したたかに叩いたと思われる掌は広げられたまま教卓に乗せられ、その瞳はひとところに固まっていた。

大伯母が亡くなったと聞かされて、即座に学生の頃の記憶を思い返した。後でわかったところによると、あの時彼女の祖母が亡くなったのだという。女子よりも男子との付き合いが良く、他人の肩を叩いてあけすけに笑うことの多かった彼女が、思いがけず泣き顔を見せた。そんな珍しさもあるが、祖母の死を聞かされて、一瞬震えていた瞳が固まったのを、後ろの席からありありと見てしまっていた。薄々折りこみが済んでいたけれど、受け止めきれなかったのか、受け止めきれないでいたところに、トドメを刺されたのか。

訃報に接した時、私もそんな一呼吸をおいた。けれど涙は浮いてこなかった。傘寿にも届こうかというのに手が鈍るからといって朝早くから炊事を続けていたらしい大伯母が、死んでしまった。折りこんでいたことが裏切られて、どうしたらいいものかわからなくなった。泣けない自分に気付いて、なおのこと手に余った。

小学校を出て坂をくだる際、億劫になると大伯母を頼って、時には泊めてもらっていた。老婆と子ども三人が囲む食卓で聞かされた

様々な昔話は、今もよく覚えている。成人してから数年ほどして亡くなったという二人目の妹は、縁談がまとまった後すぐに、病を患った。五人兄弟の末っ子で、下から見上げるしかなかったせいか忖度がうまく、特に恋心の芽生えに目ざとかった。夜更けに帰ってきた下の兄が、しばしばうつむくのに気付くと、きっとニヤケ顔を隠そうとしているのだと暴いて、一晩のあいだ相手の素性を根掘り葉掘り無邪気に問い詰めていた。そんな妹にようやく意趣返しが出来ると、兄弟たちは見合いの席に押し寄せるほどに浮き立っていたのだが、間もなく病の診立てを告げられた。まわりの雰囲気に入りこめる子がノボせた空気にアテられたのだか、ともかくあの時は因果を感じた、嫁に行く時はひそやかにやることだね、紗江ちゃんはあの子に似ているから……皺ばんだ横顔だけを見せて、大伯母は独り言のように話していた。

坂をのぼらなくなってからは昔話を聞くこともなくなったが、家の屋根越しに小学校の校舎を見上げると、大伯母の横顔が浮かんだ。顎をあげるにつれて背まで小さくなって、隣にはハトコたちが現れ、三人で昔話に耳を傾けている頃に戻った気分になる。体の奥深くまで、大伯母は見上げればそこにいるのだと染みついているものだから、亡くなったのだと知らされても、首を傾げるほかなかった。

死に水というのは脱脂綿で口を潤してあげることなのだという。社会人になったというのに葬式にも参列したことがなかったので、母の話で初めて知った。病によることもなく息を引き取った唇は、水を弾くほどだったそうだ。その頃会社にいた私は、母や遺族が見せたという涙に立ちあうことは出来なかった。

姉を失ったことになる祖父は、いつもと変わりない、唇をかるく結んだ仏頂面をしていた。夕食を囲むと一週間に一回の、やらなければ気が済まないとでも言うような深酒を慣れた手つきであおった後、風呂にも入らずに寝転んでしまった。炬燵に潜りこんでしまったものだから父が担ぎあげなければならず、祖母が布団を敷いて、母が着替えを用意した。

檀家の元締めじみた役目を負っているので訃報には年中接しているせいか、帰ってきて喪服から着替えると、いつも居間にごろりと寝転んでしまう。疲れたという様子でもない。堂々といびきをかいて、いっそせいせいしたとでも言いだしそうなくらい、悠々としている。それを祖母や母が、いつも世話する。

どこかで折りこんでいたのでしょうよ、と溜息をつく母の顔は少しほころんでいて、むしろ人心地につかせてくれた有難味を感じているようでもあった。私もまた、仰向いてほぐれきった赤ら顔を見ている内に、ああいう弔い方もあるのだと自らの身がようやく落ち着いた気になった。

だけど通夜を迎え、喪服をそつなく整えている祖父の姿を見ていると、以前はそんな動じなさに首を傾げていたものだと思い当たって、落ち着いた心地は失せてしまった。最後に喪服を着ていったのはいつだったか、いつのことにせよ、普段は目につかない黒いネクタイやら数珠やらの在り処をいともたやすく探りだし、祖母や母の手を借りることなくフクサを包んでみせるので、いちいち手順を確

かめなければいけないこちらが場違いに思えてくる。礼儀にまで上り詰めそうな手際良さを追っていると、ほぐれきった仰向けの姿でさえ型通りの振る舞いに数えられる気がしてきた。

あの子は一日だけ忌引で欠席して、といつしか学生の頃へと思いが至り、あれ以後は気さくな姿を取り戻していた覚えしかない、けれど、立ち直るまでにまた一呼吸が置かれはしなかったのだろうか、と今になって探る手が伸びていった。

坂をのぼって境内に至るとすでに人は集まっていて、あちこちで白い息を立ちのぼらせながら旧交を温めていた。祖父は隣町からやってきた弟や妹たちと話し合い、祖母と母は本堂に入って喪主に対する挨拶へと向かった。婿である父は入口の前で立ちすくんだきり、煙草をくわえて、青白んだ頬をすぼませながら空を見ている。煙が立ちのぼっていく先には月も見えず、雪が降りそうだな、と父はつぶやいたが、かといって困るといった様子でもなく、灰が唇の先から落ちるのにまかせていた。

私も、初めこそ背が大きくなったという月並みの旧交を確かめる言葉を掛けられたが、自分の近況ばかり話す老人たちについていけなくなって、きっと家の中に入っても同じ事だろうと父の隣に添っていた。かといってこうぽつりと佇んでいるのも、除け者にされているみたいだな、と父から目を離して斎場をちらちらと覗いていると、

「あら、紗江……こっちに戻ってきた時以来かしら」

と奥の方から、着物を羽織った咲が声を掛けてきた。こちらへと歩いてきたかと思うと、その後ろから、小さな女の子がぱたぱたと従ってくる。

「もう歩けるようになったのかい」

煙草を足で揉み消すものの、父は目線を下げないでイトコ姪だけを見ていた。おかげさまで、と微笑みかけた後、おばちゃんと大おじちゃんよ、と子どもと大人を半々に見ながら更に顔をほころばせた。頭をかいた父に代わって、悔やみの挨拶を述べた。咲は少し首を傾げて、それから落ち着いたように一度目を伏せてみせて、来てくれてありがとう、紗江、と頭を下げてきた。その拍子に結っていた頭から数本の髪がまとまってほつれて、頬へと垂れさがっていく。

制服を着た咲を見かけた時も、そんな風に髪をほつれさせていた。その時には四年近く大伯母の家から遠ざかっていて、お互いの成長さえ知らないでいたから、電車の中にハトコが乗っていると気付けないでいた。ましてや、同じ高校と思しき男と並んでいたとなれば、嫌気さえ感じて素性を確かめる前に目をそむけてしまう。

けれど、何を話しているかは聞こえないが、そっけない声色をしているくせに目だけはちゃんと男の顔を捉えているらしいのに気付くと、ソネミは薄れて、手慣れたものだな、とどこかから借りてきたような目つきでもって感心してしまった。男はちらりと顔を向けるばかりでそれに応えない。ウブをからかうように女は笑い、それがまた男をうつむかせる。

後ろ姿しか見えないが、制服さえ着ていなければきっと年嵩にみ

えるのだろうと、顔を覗けないものかとじれったく思う内に、女が立ちあがった。私と同じ駅で降りるらしかった。それじゃあ、と告げて軽く手を振るものの、まだ扉が開かないのに取り残された方を振り向きもしない。学ランをダボつかせた男は、またたきも忘れて女の背中を見つめるばかりだった。

扉が開き横を向いたかと思うと、あら、とこちらに気付いたらしく、ほつれた髪で頬をかくしながら、紗江じゃない、と立ち止まった。頬にかくされた顔の全容を明かそうとまたたきも忘れて見つめる内、同い年の友達のように暮らしていたハトコが、いつしか二歳差という年齢さえ通り越して、自分よりもはるかに成長しているのだと思い知らされた。

隣県の大学に進んでから二年経つと、咲が職場の同僚と結婚したとの知らせが入った。また一年経つと出産を済ませたとの知らせも届いたが、いずれの祝辞も述べられなかった。半年ほどして実家に帰った頃、この間スーパーで咲を見かけた、と母が言いだして、元々家庭を持っているみたいに育った子だったわね、お父さんたちが共稼ぎで家にいなかったせいかしら、オバさんの井戸端話にも興味深そうにうなずいてくれる、と電灯をまぶしそうに眺めていた。井戸端話に興味津々だからって所帯じみてるなんてどういう理屈だか、と父がまぜかえすと、大抵オバさんなんて自分の家をどうやりくりしていくかしか考えていないものよ、だから余所の話でも首を突っ込んで参考なり反面教師なりにする、今日だってこっちの顔を離しもせずにじっと見つめてくるの、昔からそうだった覚えがある……祖母もまじえた人物評がだいぶ続いたところ、あれはあれの婆さんに似ている、と祖父が出しぬけに大伯母を引き合いに出してきて、どういうことかと問いかけられても、似ていると言えば似ている、と頑固を突きとおした。

「そういえばおばあちゃんね、私が家を出た時よりも、紗江が宮城に行っちゃった時の方が淋しそうにしてたのよ」

娘を抱きながら咲は笑いかけてくる。

「私や雅人はいつも隣にいたからダメなんでしょうね、きっと繰り言を続けていると、自分でも気づいてた。その繰り言を物珍しそうに聞いてくれる紗江が、きっと一番好きだった」

孫娘を前にしてはうなずきづらい話だったけれど、咲は笑みをくずさなかった。

たしかに大伯母をたずねて断られたことはなかった。そしていつも咲が隣に寄り添ってくれて、大伯母の話に共に耳を傾けていた。弟の雅人は遊びから帰ってこなかったり、私を撥ねつけたりしたから、なおさら咲と手を組み男の立場を悪くしようと企てていた。時折繰り言や食い違いを起こす昔話に茶々を入れてくる男の子を、女の子二人がかりで黙らせると、老婆は途切れた所をちゃんと覚えていて調子を変えずに話してくれる。

そう振り返ってみると、隣で共謀していた頃のハトコの姿はすでに遠ざかっており、目の前の娘を抱く母親の顔は、むしろ温かく迎えてくれる大伯母と重なりつつある。

腕に抱かれた娘が上目遣いをして見つめてきた。大人たちの話を

真面目に聴き取ろうとするその顔は、どこか懐かしさを感じる。その横で母親が微笑んでいるのを見ると、本当に共謀していたのは大伯母と咲なのではないか、と今になって疑わしくなってきた。

誰かが定刻を告げたようで、老人たちはまとまって本堂へと入ってきた。間違っても大声は出さぬようにとは言い含められていたが、老人たちは口を閉じなかった。記帳の間も受付に立った雅人に向かってボソボソと何かを話しては、一人で勝手に笑いをこらえている。それを見ていたら、久しぶりに顔を合わせるハトコといかに接したら良いかなどという懸念はどうでもよくなった。げんなりとした顔を浮べる雅人に、ただただ同情を寄せるしかなかった。

だけど、いざ大広間に入って遺族に黙礼すると、老人たちは黙りこくってしまう。父と並んで席を探す頃には老人たちは大方、並べられた座布団の前列に陣取っていたから、私たちは静かな中を音もたてず座るよう促されるような恰好になっていた。どこかでひそやかに声を交わし合っている者はいないかと見回しても、いずれも同じ方を向くばかりで、一体どうしてこの静けさに耐えられるのかと思われて隣を向いたが、父は入口で見せていたように口を軽く開いて背筋を伸ばすと、それきり沈着としてしまった。祖父も祖母も、母も雅人も、咲までも応えてくれない。

やむなく祭壇と向かいあうと、飾り付けられた須弥壇や花たちの真ん中に、大伯母の遺影が陣取っていた。いつ撮ったものだか、皺ばんだ顔をしているので少なくとも年嵩になった頃に撮ったのだろうと見当がつく。が、そもそも私が生まれた頃には大伯母は老いていたので、はっきりとはしない。それどころか足しげく家に通っていた頃と、遠ざかってしまってからの大伯母はどこが違っているかと問われても答えられない私には、どんな姿を見ても間違いなくこれは大伯母だと答えられるくらいの物差ししか持ち合わせていないのだと気付かされた。

遺影は笑っているが、長くは見守ってはいられない。第一、写真では話しかけてくれないので、見守りようがない。けれど、参列者たちは一様に遺影と目を合わせられているようだった。語りかけてこない人と向かい合って、一体何を思い浮かべているのだろうと首を揺らしかけたが、遺族たちが立ちあがって住職を迎えたので、いよいよ押し黙らずにはいられなくなった。

住職が遺族と参列者たちに一礼し、遺影と向かい合うと、喪主のイトコ伯父から挨拶があって、皆で合掌しながら深く頭を下げた。一呼吸おいて住職が数珠をたずさえると、経文がソラんじられ始める。読経が始まれば数珠は指の間に掛けておくべきだと教えられていたが、手を膝に乗せている人も数えられた。手元に経文をひろげているのも横目でうかがえる。いずれにせよ、皆が首を同じほうに固めていた。

経文はこれだけで夜が通せるではないかと思われるほど読み続けられたが、皆が皆、どこにそんな忍耐が備わっていたのだか、住職の一字一句を丹念になぞるような声に、姿勢を崩さず耳を傾けているようだった。

そのうち合図でもあったのか、誦経は続いているにもかかわらず、イトコ伯父が立ちあがった。住職の後ろに設えられた焼香場へと進み、右手で抹香をつまむ。ややうつむくと、つまんだ手を額までオシイタダいて、香炉にくべる。遺影と参列者にそれぞれ一礼したのを受けて妻が立ち、イトコ伯母とその夫、雅人、咲の夫とつづいて、咲が立った。

焼香場から目を離さず真っ直ぐに進み、足を踏み変えて祭壇と向き合ったかと思うと、ついと顎が上がる。数珠が持ちあげられるまで、他の遺族に比べて長い一拍が置かれ、ようやく深く頭が下がっていく。抹香をつまむ時も同じように深くかがむので、娘を抱きあげる時の様子を思い出した。背筋をもどして額へとオシイタダく間も、首の角度だけはしっかりと保たれていた。香炉にくべる時も、数珠がふたたび持ちあげられる時も、また深くかがむ。足をなかば引きずるようにして三歩下がっていくと、これまで遺影の前に立った遺族たちの立ち振る舞いは、ずいぶんもっさりとしていたと思い返されてきた。

つづいて祖父が立ちあがったので、私の順番も意識された。大叔父や大叔母が立つと、遺族席へと座った人々は一通り焼香が済み、父が隣から前へと歩いていく。それから母と叔母が終えて、私が呼ばれた。

最初なのだから、ひとまず形式通りに済ませられるよう心掛けろとは言われたけれど、遺族に向かって礼をしてみると、それさえも難儀なものだと瞼が重くなってくる。焼香場の前に立ってみると、祭壇と向かいあっているかぎりは見えもしないのに、いくつかの目付き達が後ろからやってくると感じられて背筋が硬くなった。礼をするものの、すんなりとこなせているのかわからない。一通りなぞり終えて下がっていく間、白い目を向けられはしなかったことで、ようやく、どうにかこなせたようだとわかった。

席にもどって気取られないように息をつき、老人たちが前に進んでいくのを見ていると、座る人々はやはり立っている者を見つめているようで、自分達があの場に立った時に意趣を返されると恐れないのだろうかと首を傾げた。しかし、そんなことは折りこみが済んでいるのだろうと諦めると、そうやって銘々が見守り見守られする様が、結束のようなものを作っていると見えてきた。この儀礼を一同で首尾よくこなしていく気負いがなければ、目の前のものには立ち向かえないとでもいうように。一同が無言でなければ、無言であり続ける死者を送れないとでもいうかのように。

すると、焼香を行っている間は遺影をまともに見ていなかったことに思い当たって、今更目をやってしまった。といっても最初に目をそらした時の印象は変わるわけでもなく、大伯母の人となりが捉えられている写真を見ても、首をひとところに固めることは出来なかった。

住職が退き、喪主から式辞が述べられると、皆が思い思いに立ちあがり始めた。広間から出るとようやく喋り出す集まりもいたが、大抵は長居もせず歩きながら帰り道をたどるか、早々に切り上げて

車に乗り込むようだった。父や祖母も、寝支度くらい済ませておかなければと言って、そうした流れに加わっていった。
通夜ぶるまいを手伝わなければいけない、と言われていたので、母と共に遺族をたずねると、咲からお疲れ様、と声を掛けられてしまった。
客間に通されると、すでに席は用意されており、やることと言えば酌をするくらいしか残っていなかったのだが、それさえもイトコ伯母や母が世話をした。音頭があってからも、何もしていない自分の身ばかりが気になって、箸は伸びていかなかった。
初めは誰もが遠慮まじりにしていたのだが、祖父と大叔父の話題が噛み合いはじめると、相槌を打ちながら大叔母や住職が加わっていった。また繰り言か、と雅人が聞こえよがしに言うと、年寄りたちは馬鹿なことを言うもんじゃない、と笑いながら言い放つ。これだから、とボソリと悪態をつくものの、雅人も箸を休めて上座の方を向いていた。
「まぁしかし、すんなりと長女から死に始めるとは変な気分だ。どうせ九十になろうと百になろうと生きるもんだと思っていたけれど」
「死線はいくらでもクグってるような婆さんだったからねえ。あれはいつだったかね？　あの官憲に近しかったお兄さんだと気付かずに弄略しちゃったのは……」
「私が小学校に上がって間もなくの頃ですよ。あれで靴が買えたんだから」
「どこかから噂が漏れてバイタの履いた靴なんて言われたのを、啓二がとっちめてやったんだった。おかげで根も葉もない噂として仕立て上げられたんだ、本当は、深い深いところまで根があったっていうのに」
笑いはじめた祖父たちを、お父さん、と母がいさめるものの、聞きいれられはしない。住職は場が場だけあって軽くうなずくにとどめているようだったが、目元は柔らかくゆるんでいた。
「所詮お前らは潔癖な時代を生きてきたから横槍できるんだ。俺たちは違うよ、誇りを持っているよ？　姉貴のイキザマを、ねえ」
指を差している祖父を、雅人は苦笑をまじえて見やっていた。
大伯母が体を売ることで父を失った一家を支えていた過去は、親族はいわずもがな、住職のような土地に根差した人なら誰もが知っている。実際大伯母自身、子どもたちにもその頃のことを臆目もなく語ってくれた。その恩恵にあずかっていた祖父が、酔うとなると自分の手柄のように語る姿も見てきた。
「確かに姉貴はバイタだったけれども、けれども間違いなくお前らは雅也さんの子どもだよ、それは間違いなく俺が保証してあげる」
勢いこんで話す叔父に対して、甥も姪も顔だけ聞くフリをして笑っており、娘は最早、止めることを諦めたようだった。
優しいのだけど、人から感謝されると面映ゆそうにする人だった。大伯母は死別していた夫をそんな風に思い浮かべていた。赤線の手前の喫茶店で働いていると、ツナギを着ているのに小ざっぱりとした客が、いつも夕刻にやってくる。工場勤めなど大した金は持って

いないだろうと見積もっていたのだが、そもそも赤線へと踏み入ったこと自体なかったと、抱かれた時になって初めてわかった。宿へ入って体をまじえた後金をせびると、あぁ、そういうことだったのか、と今更言い放った。それでも財布を取り出し、求めた額よりも多く支払ってくれた。

明くる日に喫茶店で働く間は、言葉の割にねんごろに扱ってきたから、きっとトボけてみせたのだろうと思い返していた。もう来はしまいと、願うように思っていた。これ以上相手にモタれかかってはまずいというような、年頃の女じみた恥じらいがあったのかもしれない。翌日の夕方、小ざっぱりとしたツナギ姿が店にやってくると、自分はいないと伝えてくれと仕事を店長に預けてしまった。

数カ月ほどすると、借家住まいだと聞かされた。どうせウチには父親もいないから代わりとばかりに居座ったらどうだと案を差し出したところ、それもそうだな、と応えてくれた。

「大体雅也さんが香澄の縁談を持ってきてくれたんだよ、あれが結核にやられた時だって人一倍悔やんでいたんだ、それくらいの人をどうして姉貴が裏切れるかね？」

「その割に、雅也さんが亡くなった時は涙も見せなかったけれどね。いや、だから裏切ったっていうんじゃないんだよ？　はじめからどこか間違いを犯したような連れ添い方だったからさ、愛惜よりも申し訳なさがあったんじゃないのかね、だから裏切らなかった、というわけで」

どうにか論理をつなぎ合わせたことで、大叔父は一段落ついたといった具合に息をつき、酒をぐいと飲み干した。住職は何も言わなかったが、納得したようにうなずきを繰り返している。とはいえ、おおよそ正月や盆のたびに繰り返されてきたことだったから、イトコ伯母や母などはげんなりしたように顔を見合わせて肩をすくめていた。

実際のところ売春のみならず、大伯母に関係する話は誰もが知りつくしていた。

大伯母は夜になれば出歩いてしまうので、長兄の自分まで空けてしまってはその内誰もが家から出てしまうだろうと、祖父は高校を卒業するまで一切の遊びを知らなかった。

一方で大伯母が夫を招き寄せたために、何の差し支えもない学生時代を迎えた大叔父は、三十を越えてもなかなか所帯を持たないと親族に愚痴られ続けた。

工業の特需が生まれたことで身入りが良くなり、大叔母はお下がりをもらわなかったどころか、何かが入用になればあっさりと買ってもらっていた。

当人たちから話された昔話は、すべて大伯母の口からも語られた。

「これで香澄も一人でなくなるんだな」祖父がぽつりと言った。「いやあ、お袋や雅也さんだって同じところに寝かせてやったんだが、実際母親同然に育てたのは姉貴だったから」

「この子はまともに育てないといけない、って言ってたね。ちょうど姉貴が赤線の近くに入り浸るようになった頃に物心がついたんだったか」

「出掛けるところについていこうとすると子どもがついてくるところじゃない、と言って、香澄が泣きわめこうが引き離してましたからね。バチあたりは今更のことだろうに」
「姉貴も香澄も、両想いだったというわけだ。つまり、これでやっと香澄は本当に淋しくなくなるんだよ」祖父が総括するように言った。
「香澄さんは、紗代さんに憧れていましたものね」住職が口を開いた。「若かりし頃の紗代さんはそれは綺麗でした。おまけに紗代さんは、一人で稼ぎ頭になれるくらい、自立した人でもありましたから」
「その年になっても未練を捨てられんのかね、坊さんのくせに」
流れを切るような落ち着いた口調を大叔父が茶化してやると、いやあ、いやあ、と住職はようやく顔をほころばせた。この住職は、夭折した三女と同級生だった。卒業すると寺を継ぐ修行に入ったのだが、ある日買い出しのために遠出してみると、昔馴染みの顔が目の前を横切っていった。顔見知りだからといって話しかけるまでもないだろうと、気恥ずかしさをまじえて見送ったのだが、剣呑な方向へと歩いていくので、何もかもいったん忘れて後ろをつけていった。もっとも、いかがわしい臭いのする奥の方までは踏み込んでいかず、手前の喫茶店へと入っていくので一安心したが、何かがあってからでは遅いと大伯母に知らせてみると、ニワカに目を剥いた。話はわかりました、ありがとうね、と頭を下げられて、その日はとりあえず帰された。

この話は内緒にしておくように、と断りつつ語ってくれた大伯母によると、三女は姉の勤めていた老舗の喫茶店を探り当て、店主に素性を明かすと真っ先に雇ってもらい、数カ月ほど働いていたのだという。すぐさま呼び出して詰問したものの、何一つ答えなかった。金が欲しかったのか、私の真似がしたかったのか、男を知りたかったのか……この話を他の兄弟三人から聞かされたことはない。もちろん住職からも――おそらく、大伯母から口封じをされたのだろう。
「よくもまあ飽きないもんだ」上座に聞こえないように、ぽつりと雅人がつぶやいた。「まぁ、ばあちゃんも昔話が好きだったからな、それを供養にしようってつもりか」
呑みこみはしないが、ガキのように拒みはしない、そんな度量くらいは持ち合わせているとばかりに言い捨てる雅人を、咲はおかしそうに見守っていた。そして私は、雅人の口を挟む仕草を、少しの反発をこめて見つめている。これもまた、この三人で食卓を囲んでいれば、常に見受けられた光景だった。
「供養というより、こういう風におばあちゃんの癖が残って生きていくのよ。アナタにしてみれば、面倒なものでしかないかもしれないけれど」
咲がそう言うと、雅人はやれやれ、とひがんだように言って目をそらしてしまった。それをからかうように笑った後、咲はゆっくりと立ちあがって、手元の皿を片付け始めた。見ればテーブルの上にたくさん並んでいた料理や酒は粗方片付いて、時計も九時を回ろうとしている。母は祖父を抑えるのに忙しいと見えて、私が手伝うこ

とにした。

洗い物をする間、咲は黙っていた。特に話すこともなかったから、私もそれに従った。咲と家事を共にすることはあったが、幼い頃は手取り足とりされていたことを思い出す。一通り洗い終えると、そろそろ娘を寝かせなくてはならない、と言って、夫が世話をしている部屋へと向かおうとした。ついてくるかと訊かれ、断る理由もなかったので後に従った。

客間を横目に廊下を渡っていく間、咲はこれまで自分が黙っていたことに気付いたかのように、一人で喋りはじめた。

「みんな、おばあちゃんのおかげで育っていったのね。この家も、この家の家族も。そしてこれからも、きっとおばあちゃんの姿をどこかに隠しながら、皆生きていく。それがわかったから、今日は本当によかった。紗江も、全然変わってなくて良かった」

曖昧にうなずきはしたが、咲は前方を向いていたので、それを見ていたかどうかはわからない。フスマを開けると、もう娘は布団で眠っており、父親が隣に寄り添っていた。あぁ、どうも、と挨拶をしてきたかと思うと、もうそろそろお開きかな、と妻に確かめて、じゃあ代わりに行ってくるよ、と言って客間のほうへと向かってしまった。

「この子を産んだ時ね、おばあちゃんにずっと寄り添ってて貰ったの」そう言いながら、咲は娘の額を撫ではじめた。「後からあの人もやってきたんだけれど、女の痛みもわからずに頑張れだの大丈夫だの叫んでくるばかりで、目も合わせやしない。おばあちゃんは、手も握りもせず、ただ座って私のことを見ていてくれた。自分のお産の時のことを思い出していたらしいの。おじいちゃん、連絡があっても帰ってこなかったんだって。その割にツナギ姿で帰ってきたかと思うと、珍しく皺を作って笑って、お父さんを抱き上げたんだって。本当におばあちゃんの孫に生まれてきて、よかった」

私に語りかけているのだか、娘に語りかけているのだか、うつむいて話す咲の目は少しも動いていなかった。娘も寝息を立てているだけなので、まるで余所の家にズケズケと上がりこんでいる気分になる。

「おばあちゃんと離れて暮らしてから、一緒に暮らしてる時よりもずっとおばあちゃんが近くなった感じがするの。この子をウチで育てながら、おばあちゃんがこんな風に私に接してくれたな、って思いだすと、おばあちゃんが笑ってる姿が見えてくる。別に直接教えられたわけでもないのに、気付いたらおばあちゃんの真似をしてる。もしかしたら真似をするよう、仕向けてきたのかもしれない。そうだとしたらきっと、この子にもおばあちゃんが、そんな風に笑いかけてくることがあるかもしれない。

紗江は、どう？」

こちらを向いてきたけれど、話を聞きながら別のことを思い出していたので、急には答えかねた。とはいえ、曖昧な返答でも咲にとっては十分だったらしく、そうよね、と一人納得したように、また横顔を向けてしまった。

こんな風に、二人で話をしていたことがある。かつて赤線で囲まれ、今は繁華街へと変わっている場所に、中学生になった咲と訪れたことがあった。買い物を済ませ、ファーストフードを食べていると、急に咲が訳知り顔をして、そのあたりの来歴を話し始めた。大伯母たちに何度となく聞かされてはいたが、まさかそこが因縁のある土地だとはなぜか折りこんでいなくて、俄然興味が沸いてきた。はじめは咲に手を引かれる恰好だったが、段々と私が出しゃばりはじめて、気付くと、警官に呼び止められていた。戦中の雰囲気を残している界隈に、知らず知らず踏みこんでいたらしい。もっとも、家に帰っても叱られることはなかった。家族のだれもが今度からは気をつけるようにと言いつつも、どこか上の空で他の事を浮かべているような顔をしていた。後で大伯母にそのことを話してみると、聞いたよ、と言ってやはり咎めもせず、こちらの頭を撫でてきた。

おそらく大伯母が周囲の人間に対して知っていないことは、何もなかったのだろう。かたや私たちはというと――

一度、大伯母と二人きりで話したことがあった。戦争が続いていた頃、同じくらいの年ごろの少年を相手に初めて肌を合わせた。空襲や物資不足とは無縁だったこの土地は疎開先として選ばれたために、都会から来たコマシャくれた言葉を使う少年は、周囲から浮いていた。いじめていたわけではないが、おおかた一年もすれば戻っていってしまうだろうと皆が思っていて、向こうもそんな態度をチラつかせるから、誰かと話している姿は見たことがない。そんな少年と、掘り上げてからというもの無用の長物と化していた防空壕にもぐりこんで、息を交わした。

洞穴は声を返してくるもので、外に聞こえやしないかと声をひそめていたが、どんなに堪えても鳴りひびく。なにより、そんな声をよくも出せたものだと、息を切らしながらも呆れられるくらい、喘いだ。家の中に響く親たちの息を聞き取ったことも、夜にわめきだす猫の声も聞いたことはあったが、そのいずれにもまして、体を煽ってくる。まるで防空壕の中に、もう二人、隠れている男女がいるのかと思った。それが、紛れもなく自分だったのだから世話がない。

カビと汗と血の臭いが漂う中、破瓜の痛苦に味わいつつ、余所の男と、それ以後は縁もゆかりもなくなってしまった男と交わった。そんな忘れるべき思い出なのに、洞穴にひびく声には今も引き寄せられる。金に体を預けていた間も、その喘ぎに促されていたのかもしれない。身ごもった夜にも、あの喘ぎは頭の中で聞こえていた……そう語った後、少年がどうなったのかは教えてくれず、かつて防空壕があったという埋め立てた跡が残る丘を指差した大伯母を、咲は知っているのだろうか。

もっとも、いざ娘を見つめる横顔を眺めてみると、このハトコの方が、大伯母と過ごした時間は長いのだから、私よりも多くの昔話を訊いてきたのだろうという、当たり前の事実に気付いた。仮に知らなかったことがあったところで、私の方が、知らないことが多いはずだ。

ふと、咲が顎をついと上げた。

「雪ね。いつの間に……」

そう言って、窓の向こうへと目をやった。たしかに、雪が積もっている。暗い中、電灯に照らされて、白い眺めがぼんやりと広がっていた。

翌日の告別式が終わると、義仁から明日会えないかと訊ねるメールが届いた。昨日今日と葬式に出てしまったからと返すと、納得して引き下がってくれた。が、その日の夜、床に入ってみると、死人を送ったから恋人とは会えないというのは、どういう理屈だろうと目が覚めてしまった。それに納得する方も納得する方だ……。

都合がついたら、向こうにも葬式に出たことがあるかどうか訊ねてみようかと思って、ひとまず眠りについた。

けれど、一週間ほどして顔を合わせると、それまで考えていたことは忘れてしまっていて、店に入って夕食を済ませた後、いつもどおり抱かれていた。

事が終わると抱き寄せられながら、ずいぶんと深い交わりだったな、と息をついていた。義仁に訊くと、お前こそ、と驚いてみせる。それから、再び交わるかのように、肌を合わせてからのことを振り返り合った。

中々目を離さなかったそうだ。いつもなら身をよじったり、堪えられないといった様子で目を背けたりするのに、今日は首をひとところに据え続けている。醒めた風でもない。触れられるたび、目を潤ませて、身をすくませて、伸ばしていく手を見つめている。暗闇に青く包まれた中、そんな目付きだけはしっかりと読みとれた。

「生半可なことは出来なくなってな、いつも慎重に扱っているつもりなんだが、いつしかそれさえも思い込みでしかないんじゃないかと怪しくなってきた。自分で言う誇張があるけど、その不実のようなものに追い立てられて、それをどうにか清算しようと、まるでこれまでの交わりまでやり直していくような気になって……」

そうだとすると、現在の体と交わっているのか、それとも昔の体と交わっているのか、疑わしく思われてきたけれど、けだるさが勝って、こちらからも相手の手つきを見たままになぞった。

私の話すことに、義仁はその都度うなずいていた。ほとんど、自覚があったらしい。けれど、醒めていたつもりはない。けだるさが、何よりの証拠となるはずだ。

「今まで、そんなことはなかったよな」その声に、問いかける調子はない。「お互いがお互いのことを見つめているだけなら、今までもあった。そうだな、これまで見つめていた分が、今日になって一気に積み重なって、まとめて眼差しを向けて来るような……」

大伯母が笑っている顔が浮かぶ、という咲の言葉が思い返される。こういうことだったのだろうか、と思いながら、記憶の中へと手を伸ばしていくと、抱き寄せる手が強ばっていった。どれだけきつく抱きしめてくるのだか、と胸の中から見上げると、義仁は眼をつむっていた。こちらが見上げたことに気付くと、その顔も胸に押しつけてくる。すると、背中を冷たいものが撫でていった。　（了）

自由創作

浜辺の童

しろくま

ファインダーを覗く、波打ち際で遊ぶ子供たちを捉える、ホワイトバランスは晴天で、露出を下げて色を引き出す、空と海、六対四で空を大目に、ピントは無限遠。ゆっくりとシャッターボタンを沈めた。潮風を小さく弾くシャッター音が、余韻を残して風の中に消えた。

低い雲の群れが西日を纏って横滑りしている。目の前の風景が四角く切り取られて、子供たちを捉えて液晶に表示された。遊ぶ子供たちの姿が、影法師になって写っている。これまでも、毎日同じように遊んできたのだろう。

砂浜はもう冷えていた。つま先で冷たい土の中を探ると、白く小さい、綺麗な貝とサンゴ礁の化石が出てきた。手に取ると、浜辺の冷たさをそのまま感じた。

今まで、自分がここに来る以前も流れていた時間の流れが、速さが、島の外とは違っているようだ。街から予約したワゴン車で山道を走り、五時間進んだ所にある船着場から、四人乗りの小型ボートで四十分、真っ直ぐ沖へ出た所にある島だった。数百メートルもの水深を持ちながら、島に着くまでの海面は、まるで銀板のようにその上を歩けそうだった。

無数の星を仰ぐ、一面に広がる海も何一つ音を立てない、走るボートのエンジン音だけが響くような、ある種幻想的な世界の中で、星空の下の影から島が現れた。その島に近づくと、ボートは水上に並ぶロッジの間の桟橋に着けられた。ボートの運転手と、同伴したエージェントと、迎えに現れた何人かの島の男達に、カメラや財布、何もかも入った鞄をそのまま任せ、体一つでロッジの一つに転がり込んだ。今学期、休みなく働いていたことと、旅の疲れを、気付けば翌日の太陽が昇って島の全貌を露わにしてからも、薄汚れた、使い古されたベッドの上で癒していた。昼をとうに過ぎ、夕方近くになってから、ようやく身を起こして、カメラを持って外に出た。

人口は百人といったところ。小学校低学年か、それより下の歳の子供たちが多い。島の住民以外は、数少ない観光客以外に学者も時折訪れて、何日かロッジに泊まっていくらしい。彼らはウミガメの調査が目的で、産卵に来たウミガメにタグを付け、卵を保護し、卵が孵り海へ行くのを見守る。

赤道に近い所にある孤島の、素晴らしいマジックアワーは淡白に

過ぎ去っていき、波に小さく揺れるボートの脇、影になった水面の下で、群れになって舞う小魚が見える。散って、また集まって、一つの生き物のように動く。その周りを、体長一メートル程の、天狗のように鼻の骨の伸びた魚が、「我関せず」といった体でゆっくりと周回している。一人、他の魚たちと異なる彼が、腹を空かした時に小魚たちを襲うのかどうか、そのために今、小魚たちの警戒を薄めるために、少しずつ小魚に近づこうとしているのか、私には分からない。一人だけ不揃いな鼻の長い魚は、ただ不気味に、その長い体を横にして漂っていた。

島の中には五軒のレストランがあった。観光客向けのヨーロッパ風の外装をした店には、体の大きな白人の老人たちが何組か、テーブルを囲んでビールを飲んでいる。向かいにある、現地の人たちが利用するこじんまりとした食堂で、黄のポロシャツを着た男がテーブルで一人、右手を使ってご飯と魚を食べていた。こちらを見ると、テーブルの上にメニューを放り投げて寄越し、私は薄汚れた写真の中の一つの、魚とえびの炒め物を注文した。

男は食事をしながら、沈めた怒りを込めた上目使いで、白目がやたらと強調された目をこちらに向けて覗いてきた。

「どこへ行っていたんだ」

「ちょっと散歩をしてきただけだ」

「勝手に消えてはいけない」

「海を見てきたんだ」

「もしお前が消えてしまうと、俺の問題になるからな」

腰の大きい、花柄の黄色いワンピースを着た、黒い肌の女が皿を持ってきた。表面の曇ったスプーンと取り皿をティッシュで拭い、出てきた料理をご飯の上に移して食べた。食事中、料理を持ってきた女は、近くの椅子を引いて腰掛け、日に焼けた顔をこちらに向けて、最初は英語で、こちらが現地語を操れることが分かれば現地語で話し掛けてきた。どこから来たんだ、何をしているんだ、彼女はいるのかといったことを訊いてきた。曖昧な返事を返しながら料理を食べていると、黙々と食べていたエージェントが会話に入ってきた。

「奥さん、息子は何人いるんだ？　日本語は勉強しないかい？」

「息子はいないが娘が三人いるよ、日本語だって？　その人が教えてくれるのかい？」

「あぁそうだ、ここでは日本語を学べないだろ？　日本語を教えたかったら俺に言いなよ。日本に連れて行ってやるから」

「それはいいねえ、私も連れて行ってくれるかい？」

女は笑ってエージェントの話に乗っていた。

「俺が連れて行けるのは生徒だけだが、この男に連れて行ってもらえばいい」

「本当かい？」

そうやって四つの瞳が向けられてきた。笑っているが、エージェントの目はいやらしくも見える。目が合ってしまったが、無理に聞こえていない振りをした。

エージェントはこちらに体を向き直した。

「お前の社長に留学できる生徒を五人送ると言った。行けそうな生徒を集めて紹介しろ」
「まだまだ、彼らはこれからの生徒たちだ」
「三ヵ月後に五人送りたい。コミッションは一人五パーセント、社長に伝えてくれ」
「あんたが送りたくても、時間が掛かるんだ」
女に値段を聞き、ポケットから取り出した紙幣と、無理を言うエージェントを置いて一人で店の外に出た。店の前では砂浜から戻ってきた子供たちが遊んでいた。子供たちはゴムボールを追い掛けて、砂の道を右へ左へと走り回っていた。
手にしたカメラのファインダーを覗いて、遊ぶ子供たちを撮ろうとしていると、それに気付いた子供たちが、興味を持って恥ずかしがりながら、少しずつこちらに近づいてきた。僕を撮れ、私を撮れと、カメラの前で入れ代わり立ち代わり、はしゃいだり踊ったりして見せた。赤ん坊を抱えていた母親が、子供たちが集まっているのを見て、笑顔で近寄ってきて自分の子供を見せて来た。親馬鹿に嫌みはない。この島は子供ばかりだ。極端な少子化に陥っている日本が問題なのか。ここにもいつか、少子化の波が来るのだろうか。
無垢な彼らに、見たことないものを見せてあげたい、彼らを日本に連れて行きたいという思いが頭を過ぎる。彼らを連れて行く方法が頭の中で巡る。しかし、今も無邪気に跳ねている彼らを前にして、頭皮一枚、頭蓋骨を隔てた頭の中で、道筋を企てて、そのために必要な経費のことを、エージェントと同じようにして考えている自分が嫌になった。
夜が更けても、まだ元気に遊ぶ子供たちを後に、一度ロッジに戻ってからすぐまた外へ出た。夕方に浜辺の写真を撮った時と同じ場所で、三脚の脚を伸ばして立てた。
日本では過ぎ去った波が、今別世界の孤島に押し寄せてきている。気付けばおかしな世界に足を踏み入れたものだ。夜の浜辺は月明かりでかなり遠くまで見える。潮が引いていて、黒い砂浜がずっと先まで続いている。
長時間露光を試みた。液晶に表示された画像には、黒い砂浜の上に丸い影が幾つか写り込んでいた。一、二、三、四……、拡大していくと影が無数に写っているのが確認できた。それは遠い海からこの砂浜へ卵を産みにやってきた、ウミガメたちの姿だった。

（了）

魚人岬

芦尾カヅヤ

自分が母の腹から生まれたのか卵から生まれたのか、人魚は知りませんでした。物心ついたとき、自分と同じ形をしたものはまわりにはなく、ときどき月明かりの下で水面に映る自分を見て、なんと不思議な形だろうと首をかしげるのが常でありました。海には沢山の魚が泳いでいましたし、空には沢山の鳥が羽ばたいていました。しかし、人魚に似た生き物はどこにもいませんでした。

「ねえ、あなたたちに似た生き物はたくさんいるけれど、わたしに似た生き物はいないのかしら」

人魚は、南から渡ってきた鳥の群れに尋ねました。

「お前に似た生き物なら見たことがあるよ」

人魚はびっくりして、どこで見たのか尋ねました。

「あれは陸の上にいる。陸の上ならどこにでもいる。お前のような顔をして、お前のような手があった。しかし、あれはおそろしい生き物だ。海のものも空のものも、陸のものも食べてしまう」

「あなたたちだって、わたしの友達を食べたじゃないの」

「あれはお互い様じゃないか。やつらは違う」

鳥は、おそろしいおそろしいと言いながら北の方へと行ってしまいました。

人魚はそのおそろしい生き物を見てみたいと思いました。人魚は若く、好奇心旺盛な年頃でありました。鳥はああ言ったけれど、同じ形をした生き物に、自分が殺されることはないと思ったのです。海の中で、同じ生き物を食べたり殺したりするのを、人魚は見たことがありませんでした。

人魚は、陸を目指してまっすぐ東に進んで行きました。

遠くに陸が見えました。しかしそこは切り立った岩壁になっていて、とても上がれそうにはありません。人魚は陸に近づくと、浜を探してあたりを泳ぎ回りました。そのとき、崖の上に生き物が現れました。

人魚は息を呑みました。自分と同じような顔、同じような腕。人魚と同じ年頃の娘が、そこに立っていました。

自分と同じ姿をした生き物を目にして、人魚の胸はうれしさで高鳴りました。物心ついてから初めて自分と同じ形のものに出会えたのです。唯一、尾の部分だけが違っていましたが、それでも今まで見たどの生き物よりも自分によく似ていました。

娘の後ろから数人の男たちが現れました。娘は怯えた表情で海を見下ろしています。

物々しい雰囲気に嫌なものを感じて、人魚は水の中に隠れました。それと同時に、大きな音を立てて水面が揺れました。びっくりして音の方を見ると、口と鼻からあぶくを吐きながら沈んでいく娘と目が合いました。まっ逆さまに沈んでいく娘の両足は、麻紐できつく縛られていました。

人魚は娘を追って潜っていきました。娘は、人魚とは違い水の中では生きられません。苦しみもがく姿を見て、人魚は初めてそのことを知りました。

人魚は急いで追いかけますが、どんどん引き離されていきます。まるで海の底が娘を吸い寄せているかのようでした。

娘のあとに、崖の上から酒が撒かれました。穢れを払う、清めの酒です。

娘は穢れておりました。キズモノでありました。

村の娘たちは、婚礼まで生娘のままでいなければなりません。穢れた娘は崖から海へと投げ捨てられました。

娘は純潔でありました。祭りの夜、酒に酔った男衆に手篭めにされて血を流すまで、身も心も純潔そのものでありました。

穢れた娘は、もう誰にも股を開かぬようにと両の足をきつく縛られて、海の底へと沈んでゆきました。

そうやって、これまでに何人も何人も沈められてゆきました。

動かなくなった娘は勢いを増して海の底に沈んでいきます。

人魚は胸が苦しくなるのを感じました。今までこんなに深く潜ったことはありませんでした。光が届かなくなり、娘の姿が霞んでいきます。それでも人魚は追い続けました。追わずにはいられませんでした。

海の底には、人魚の生まれる場所がありました。足を縛られた娘たちは海の底で両の足を尾に変え、永遠に股を閉じた姿で目覚めるのでした。

人魚は、光り輝く珊瑚礁を見ました。そこにはたくさんの娘が横たわっていました。娘でないものは骨になっていましたが、娘たちはきれいなまま、皆ぴったりと足を閉じた姿で珊瑚礁に抱かれていました。

自分が母の腹から生まれたのか卵から生まれたのか、人魚は知りませんでした。

今の今まで、知りませんでした。

（了）

帰省

とーい

高速バスを降りると、目の前に果樹園がある。そばに即売所があって、すいか、メロン、桃が並んでいる。
乗り継ぎのバスまで、時間があった。
バス停のベンチに腰かける。空には大きな雲が浮いていた。道路に往来はない。蝉の鳴声が聞こえる。
しばらくして、バスが来た。
客は無い。アナウンスが車内に空しく響く
途中、名前だけ残る工業団地を過ぎ、交通安全と書かれたアーチを抜ける。
降りると、懐かしい匂いがした。

「ただいま」
「よく帰ってきたこと」

一年ぶりに見る母は元気である。
荷物を置き、仏壇へ向かった。盆で、いろいろの供物がある。
手を合わせていると、
「一年は早いね」
台所から母の声が聞こえる。
「お父さんは」
「刺身を買いにね、食べさせるんだって」
「いいのに」
「嬉しいのよ、お父さんも」
言いながら、母はすいかを持ってきた。
「最近、どうなの」
「どうって、まあいろいろかな」
すいかをかじりながら答える。
「やっぱり、田舎のすいかは甘いね」
「いくらでもあるからね」
母はほほえんでいる。皿に散った種に虫が一匹止まり、すぐに飛んでいった。

「よく帰ってきた。乾杯」
父の音頭でグラスを合わせた。ビールは冷たく、父は一気に飲み干す。
「早いんじゃないの」
わたしが言うと、

「ほら、恵美も心配していますよ」
「大丈夫だ。恵美、注いでくれ」
つぐと勢い良く泡が立ち、あふれそうになった。父は慌ててグラスに口を近づける。
「こういうところ、恵美は全然変わらないのね」
「普段はおっとりしているのに、こういうところは相変わらずせっかちだな」
父の言葉にみんなで笑った。
テーブルには御馳走が並び、父の買ってきた刺身もある。食べなさい、はじめこそ勧めてくれたけれど、食べるのは父ばかり。母はたまごやきを、わたしは浅漬けを食べている。
「明日、墓参り終わったら、温泉でも行くか」
ビールを飲みながら、父が言った。
「墓場の片付けは明後日だし、午後、家を空けたって御先祖様も許してくれるだろう」
「そうね、恵美はどう」
母も応じる。ふたりで決めていたのだろう。
「え、うん」
大人しく答え、
「どこに行くの」
「街の向こうに、新しいのが出来たんだよ。掘ったら出たんだ」
「結構、混んでいるのよ」
「そうなんだ」
答え、残りのビールを飲み干す。
「この間、山の帰りに入ってきたが、湯も出てよかった」
そう言って、父もビールを飲み干し、母に新しい瓶を催促する。
はいはい、と母は台所へ向かう。
「やっぱり、恵美がいるといいな」
「そんな変わらないでしょ」
笑っている父の顔には去年よりしわが見えた。
ふたりとも年を取った。わたしだけ好き勝手に生きている。よその親ならいつまで夢を見ているんだ、としかるのに。
最後の一本よ、と母がビールを持ってきた。
わたしが栓を抜き、父のコップに注いだ。今度はこぼれない。終えると父が瓶を持ち、わたしのコップに注いだ。

食事を終え、父は寝転んでいる。わたしと母は後片付けをし、台所でビールをもう一本だけ空けた。
その間に父は寝床に入り、母も鳩時計が十二回鳴いたころに寝た。
わたしも二階の自分の部屋へ行く。
都会と違って、カーテンを閉めなくてもよかった。あかりを消すと、空が見えた。無数の星が散っている。
「田舎にいるときぐらい、ケイタイの電源切ろうかな」
夜空を見ていてふと思い、携帯電話の電源を切った。
ベッドに潜ると母が干してくれた布団は、いつまでも温かかった。

にわとりの鳴声が聞こえる。
寝過ごした。時計は六時半を回っている。
着替えて降りると、母は食事の仕度をしていた。
「おかあさん、ごめん」
謝ると、
「もっと、ゆっくりすればいいのに。とりあえず顔洗ってらっしゃい」
きょうは墓に供える弁当を作らなくてはならない。その他、仏壇の飾りつけなど仕事は多い。
早速、わたしも畑に行き、トマトやとうもろこし、お供えの花などをもいだ。そして、たまねぎの味噌汁などを作る。
とうもろこしを茹でて輪切りにし、弁当に詰めていると、父の拍手を打つ音が聞こえた。母もわたしも仏壇に手を合わせ、線香が燃えつきたところで食事となった。
父は朝から元気で、「今年は早くお参りして、街に行かなくちゃな」
と言い、母も、
「九時ぐらいには、行きましょうか」
と、答える。田舎はさすがに早い。
「そんなに急がなくてもいいのに」
苦笑するわたしを見て、
「早く温泉に入って、スーパーで買い物するからな」
父は言い、山盛りのご飯を筋子で頬張った。

九時過ぎ、お供え物と家紋の入った桶を持ち、村の墓場まで歩いた。日差しの強い日で、母から畑で使う麦わら帽子を借りた。
途中、何組か村の人々に擦れ違い、墓場まで行くと、入り口にあるお地蔵様へは既に多くの供物があった。
「早いね」
つぶやくと、
「みんな早いんだよ」
当然のように父は言った。
自分の家の墓へ行き、台の上に蓮の葉を敷き、弁当を供えた。墓の向こうは一面田んぼで、微かに垂れた稲が黄色味を帯び始めている。
本家の墓にも線香を上げ、お菓子やとうもろこし、枝豆などを供える。入り口のお地蔵様へも同様にお供えし、墓場を離れた。

数年前、廃線になった駅の近くに、温泉はあった。以前、炭鉱と街をつないでいたこの路線も、廃坑とともに乗客が減った。耳をすませば、ディーゼル列車の力強い音と警笛がいまでも聞こえそうな気がする。
「よく、こんなところに出たね」
わたしはたずねた。
「マンション建てるつもりで掘っていたら出たんだ」
「本当、運が良いわね」

両親は言い合い、車のトランクから洗面道具を出している。
温泉は健康ランドのような外見で、風情はなかった。しかし、この辺の人には目新しく、安価で、気を使わないのがいいのだろう。
湯は透明で、最初、温泉かいぶかしかったけれど、芯まで温まった。サウナも無料で、水風呂との間を母と何度も往復した。
出て来ると、父はマッサージチェアーにいて、全く長いな、と笑った。
ごめん、母と謝って、わたしは缶ビールを買い、父に渡した。
わたしが運転するから、と言うと、父は一瞬迷ったけれど、うれしそうに缶ビールの栓に指をかけた。

スーパーは街の中心にあった。大手資本と地元の２つのスーパーがあり、それぞれ頑張っている。
一軒、昔からあった百貨店は廃業していた。スーパーまでの道すがら通り過ぎると、シャッターが下りていた。高校のころ、上の食堂で友達とみつ豆をよく食べた。父が言うには街中にあるから駐車場が小さく、客が減ったらしい。
わたしたちが行くのは地元のスーパー。買い慣れているし、新鮮な魚が手に入る。
着くと、
「用事があるから、ふたりで買い物して」
父は言って別れたので、母と買い物をした。
夕食の材料や職場へのお土産を買い待ち合わせ場所にいると、父が来た。ビニール袋を手にしている。
「何か買ってきたの」
たずねると、
「後のお楽しみ」
と笑って、
「アイスクリーム食べるか」
「うん」
「母さんは何がいい」
「私はバニラ」
「恵美はどうする」
「見てから決める。一緒にいこうよ」
答えて、たこ焼き屋の隣にあるアイスクリーム屋へ向かい、それぞれアイスを買って、休憩コーナーで食べた。
「しかし、もう明日帰るんだろ」
アイスクリームをかじりながら父が言う。
「仕事だから、仕方ないのよね」
問うように母は言い、
「うん。もっと、ゆっくりしたいけれど」
それしか言葉が出なかった。
来年までふたりの顔を見られないのかな、ぼんやり考えていると、何かしなければと思った。
「ちょっと待ってて、すぐに終わるから」
両親を残し、買い物に行った。目当てのものはすぐ見つかり、戻

ってくると、
「今度は早いな」
父が言うので、
「お父さんの子だもの、本当は早い子なんだよ」
笑いながら、返した。

帰り道、窓を開けると涼しい風が入ってきた。髪はかすかになびき、真っ赤に焼けた空の下を、車は軽快に駆けていく。
様子を見計らって、助手席の父に話しかけた。
「お父さん、髪染めてあげようか」
「恵美が染めてくれるのか」
驚いた口調である。
「薬はどうしたんだ」
「さっき買ったよ」
「また風呂に入らなくちゃならないだろう」
面倒くさそうな父に、
「おとうさん、染めてもらったら」
母は言い、
「それじゃ、帰ったら頼むかな」
父が返したので食事前に染めた。
父の頭をまじまじと見たことはなかった。
髪は薄くないが、白髪はふえた。苦労したのだろう。いまも、わたしのことで苦労している。そう思うと情けなかった。せめてもと、丁寧に染めた。何度もわけて、細かく染めた。
染まるのを待っている間、わたしたちに会話はなく、台所から包丁の音だけが聞こえた。
突然、父が話した。
「帰って来られないのか」
驚いた。わたしはあぐらをかいている父の背中を見つめている。久々に見る父の背中は昔と変わらず大きかったが、少し丸まっている。
「どうだ」
父が静寂を破る。
「ごめん。まだ帰るわけにはいかないよ」
父は微動だにしない。
「もう少しだけ、がんばりたい」
「そうか」
「ごめん」
「父さんたちなら、大丈夫だ」
静かに父は続ける。
「恵美はしっかりと考えているだろう。なに、失敗したら、もう一度頑張ればいいんだ」
父の言葉が胸を締め付ける。気付かれないよう、静かに泣いた。
「花火でもするか」
父が言った。
「今日の御礼だ。さっきスーパーで買ったんだ」

わたしは小さくうなずいた。

翌日、両親がバスターミナルまで送ってくれた。帰省のころは客が多く、始発のターミナルから乗ったほうがよかった。

一時間ほど走り、ターミナルに着いた。

すでに列が出来ていて、わたしも切符を買って、並んだ。

ほどなくバスが来た。窓側の席が空いていて、そこに決めた。荷物を棚に置いて座ると、両親が見える。

それでは出発します、運転手のアナウンスが聞こえた。

わたしは両親に手を振った。父は片手を挙げ、母は手を振りながら頬を指でぬぐう。

いつしか、ふたりの姿が滲んだ。

バスはゆっくりと走り出し、しばらくして高速道路に乗った。三時間ほどで終点に着いた。

新幹線に乗り込むと家族連れが多く、車内は賑やかである。

列車は定刻に出発し、速度を上げる。わたしは携帯電話の電源を入れた。

（了）

ランナーたち

安部孝作

口笛を吹きながら、人工衛星が通過している。東から西へ走るために走り続けるランナーたちは、百四日目の朝を迎えていた。彼らの後ろに点在した発汗の流跡が、ぬめぬめとした影となっている。その上を忍び寄る、金属片で指を切るような痛み――そして彼らは目撃した。これが彼らの今後を全て決めた。それは予言者の言葉に裏付けられている。「赤い雲から黒い雷が下ることだろう」。夜空では確かにオリオンと蠍座の赤い粘液に満ちた抱擁が行われていた。それは全く偶然の目撃であった。

勃発した発車五秒の自動車爆発、それが汚職政治家への目覚めの挨拶だった――と同時に次々と切られるカメラのシャッター音。それはいつまでも絶えぬ喝采となった。近隣のアパートやマンションからは、次々と欠伸が漏れ出て来るのが聞こえる。欠伸は数多のあぶくとなって弾け、中に詰まった夢が湧き出て来る……。その喧騒から数十分後、日常生活を送り始めていた彼らも、パトカーや消防車が駆け付けて来たことに異常を察知したようだった。

フライパンをもったまま出て来る主婦たちは目玉焼きを焦がし、ネクタイを結びかけたサラリーマンたちは首を括り、パジャマのままの子供たちはぬいぐるみを引きずっていた。みんな扉を蹴破って飛び出したり、枠が拉げるほどに窓を開いたりして、外の様子をうかがった――が、驚きは一瞬で、誰もが平生を過ごすような表情をして拍手した。至って冷静な会話――一つのテロリズムというものへの無関心な会話――が行われていた。

「やるならもっと派手にやらなくちゃ、とんだ茶番だ」

「そうね、面白味もないわ。物騒なくらいでちょうどいいのに」

「味気ない爆発だ、気の抜けたシャンパンのようだね、全く」

「いやあ、朝から面倒だ、こんなうんざりした眼醒めは滅多にないな」

「写真に撮っておかなければ、燃え立つ朝とはまさにこのようなことを言う」

「誰が死んだのだ？　私以外の誰かということしかわからない」

「季節外れの花火かと思ったけれど、こちらのが見栄えがいいわね」

「これが芸術と言われちゃ、仕方がないわね」

誰もが寝言のようにつぶやき、いびきのように喉奥を振るわせ、事件を淡々と見守っていた。彼らは本当に眠っているかのようだった。この爆発が誰の陰謀なのかは明白であった。住民たちへの夢告げが前々から犯人を伝えていた。背中が丸まって、腰骨の溶けてし

まったような陰気な男が、近頃うろついているのを誰もが目撃していもいた。その人物は草臥れて落伍仕掛けていたランナーであった。「こいつこそ犯人だ！」という叫び声。ごわごわのタオルのようになったランナーの死体を首に巻いた男が駆け回る。

そこに暗澹たる雨雲が刻々と迫ってくる――それでもランナーたちは傘一つ差さずに走っている――彼らが走るのを止めるのは、死ぬときだけである――。そして、雷が一瞬世界の像を銀幕の宇宙へ焼き付けた瞬間、続けざまに起きた、真犯人の男の練炭自殺、それは住人たちが夢で見た男とは全く似ても似つかない、筋骨隆々で、駅前などに張り出されていた指名手配犯の男であった。彼は公認された地下組織を統括し、たびたびテロ事件を起こし、ラジオで煽動的な声明文を流し続けていた。

こうして発生したもう一つの死はじりじりと燃え小さな炎によって引き起こされた、またもや車内でのできごとであった。自動車の扉や窓の隙間から漏れ出た一酸化炭素は、三途の川を渡るための六文銭に吸着して緑青の塊となし、もはやただの不渡り手形と化してしまった――だから男はもう三途の川を渡ることはできないかと思われた。汚濁した激流の三途の川を前にして、全裸でおずおず立ちすくむ元ゲリラの姿は誰もが思い浮かべた滑稽な図であった……特に秘書たちはほくそ笑み、当然の報いだと笑い転げた。しかし、この男は嘗て競泳の選手であったため、川幅十キロ程度ならばいともやすやすと泳ぎ渡ってしまったのだった。その光景を枯れ井戸の穴から見ていた政治家の秘書たちは、口惜しげな口調で、「あの男、首だけが泳ぎ着いていることに気が付きやしない。体は鰐に食い荒らされていると言うのに」と野次を飛ばして地団太を踏んでいた……。男の生首はその姿を反って嘲笑し、その残響が已むことないまま地獄の奥底へ転がっていった。

一方、そこに爆破された自動車を塗装していた白銀のペンキの蒸気の中から撒き散らされた鉄屑の種子が、ランナーたちや秘書たち、住民の体に寄生し始めた。鉄屑の種子は、彼らの血を吸い、肉を裂きながら鋼の蔓を伸ばし始めた……それは何千メートルも天へ向かって延び、金細工のような大輪の花を咲かせては、砂金の種を撒き散らし、七日間掛けて愈々富士山を越えて天蓋に到達した。斃れていく住民や秘書たちをよそに、それでもランナーたちは走り続け、西の果てへと蔓を伸ばせば、薄明が射している空へ沈みかけていた細月の鉤爪が「鳴り響け、鳴り響け」と蔓を掻き鳴らした。それは声もたない霊たちを目覚めさせる音色であった。ランナーたちは肉体が共鳴し、透き通るのを感じる。

その音は天蓋に幾重にも反響して大きく揺らすと、星々も位置をずらして、その調和に満ちた配置を崩した。そしてオリオンの死体が大地へ落下してきた。それは幾つもの巨大な隕石となって墜落し、摩天楼の際限なく続く地平は斑模様を描いて潰され、跳躍した大地は地層を断ち切り、大洋はポルカを踊り始めた。だがやがてポルカと呼べない程烈しい踊りとなり、大地を誘い込んだ輪舞となった。そして大海嘯によって立ち並ぶ家屋は漂流し始め、中に住んでいた人々は新天地を目指すこととなった。そこで急いで蝋燭と羅針盤を

抽斗から取り出して、リビングのテーブルへ並べたてた。羅針盤の無い家は、桶に磁石を埋め込んだ発泡スチロールを浮かべた。だが波は余りに強くうねり、せめぎ合い、家々は水平を保てなかった上、地上がどの方角にあるのかもわからなかったため、羅針盤は役立たずに終わった。だが更に悪いことは、蝋燭は顛倒して家々に火を放ったことだった。

「これでは家が燃え尽きてしまう」

「ならばこの大洪水のなかを、丸太一本で漂流するのみよ」

「ところがな、漂流したところで、それは火の海の中さ。ああ、燃えつきてしまう」

その豪火と巨浪は、森閑たる夜中に、眠りこけていた巨人たち、プロディナングの国をも襲った。巨人たちは、掌の大きさでも人間の身長以上にあり、首は細く、顔は漬物石のようで、鼻梁はテトラポッドのようだった。そこへ洪水が押しては寄せ、寄せては返し、やってくる。……。樹齢数千年の老木をなぎ倒し、ラフレシアよりも大きく香りの強い花々は根こそぎにされていった。やがてじわじわと押し寄せる水位が巨人の口や鼻をも覆い始め、愈々溺死する者が現れる。だが誰かの死が一万もの雷を落としたような咆哮を伴い、それによって誰かを目覚めさせ、目覚めた者はその驚きで心臓を破れさせて死に、その死がまた誰かを死の眼醒めへ誘うと言う連鎖が起き始めた。それいいことに黒い森から絶叫する烏が大挙して押し寄せたが、そこへ巨大な口を開いて待ち受けていた龍が、鰯を丸呑みする鯨のように平らげてしまった。

そうして古来鳥葬の伝統を保ち続けていた巨人たちは、火葬と水葬に同時に見舞われることとなり、生き残った――彼らが立ち上がれば、辛うじて顔は水面より出るため――親族たちは、ただ黙って、泣くことしかできなかった。そんな巨人たちの悲しみをよそにランナーたちはその流木を飛び跳ねて渡り、依然――いや、より速度をあげて――走り続けた。鉄の蔓はもう彼らの頭部ごと流れ去っていってしまっていたが、彼らは時折誰かの頭が流れているとそれを拾いあげ、自分のものとしてしまっていた。中には巨人の頸を着けてしまい、その重さに耐えられず溺れ死ぬランナーもいた。

やがて體半分焼け残ったまま山積みにされた巨人たちの尸の許に、人間の保健局から職員がやってきた。そして悲嘆にくれる親族に、百ページにもわたる書面を渡した。

「ここにある通り執行することは決まっている」

「こんなにも分厚い文書を読むことを、今の私たちに強いるのですか？」

「読む必要はない。これは決定事項であって、合意事項ではないからだ」

「ならば、わたしたちは自分たちの言葉を憎む、そしてお前たちの沈黙を憎む」

「巨人の声は馬鹿にでかい。耳が痛くて壊れてしまいそうだ」

その書面には衛生上、鳥葬を行うのは問題があるという事を理由に、強制的に火葬を執行すると書かれていた。何も知らない巨人族は鳥葬のため、洪水で荒地となった野に死体を並べ、烏を呼ぶため

の標を立て始めた。そのためには保健局は、弔いのために一万三千人の僧侶を全国からかき集めた。だが巨人族の親族たちは、ますます増す落胆し、長い溜息を一つついた。その強風に煽られた巨炎はあっという間に彼ら僧侶を丸焦げにしてしまった。これは一切が天災から招かれた偶然の悲劇であった。

しかしそれは、新聞社が一面に取り上げたことで一切の意味が変わってしまった。生き残りの住人たちに届けられた朝刊には「僧侶一万三千人、抗議の焼身自殺。仏教界からも怒りの声が」と出ている。記事の中では、この焼死事故は英雄視され、政治家たちは糾弾された。その光景を収めた写真は、大量のポスターとなって印刷され、町中の意壁に張りだされた。ランナーたちの走り抜ける街路に吹き散らされた地下出版された記事はこう総括する。「なんせすべては、一人の政治家の汚職事件と、その暗殺計画が発端だったのである。」住民たちの憤懣は、記事に煽動されたうえ、徴税人への差別意識と相まって、抗議活動へと発展したのだった。

その時に動いた巨額の金銭は、実際のところ企業団体が自社の社員たちから吸い上げた脂肪の塊――社員たちは長年のオフィスワークで、医師にメタボリック・シンドロームと診断されていた――を、肉饅頭にして売り出した利益によって得られたものだった。少し時間を遡ると、この肉饅頭はパリスナンヤという薬品名めいた名前で売り出され、コンビニ店頭でも並んだが、倫理的問題を市民団体に問われたためすぐに販売中止になった。とはいえ、そもそもその味の臭みから一般に食されることはなく膨大な在庫が企業団体の経営を苦しめていた。そんな中、絶え間なく印刷された政治家たちの協定文書で、貧困国へ安価で輸出されることが決まった。それよる利潤が今回発覚した賄賂であった。

ところが政治家の一人B氏は、ある時抑えられない欲動に突き動かされ、この不味いと評判のパリスナンヤを夜中に一人隠れて冷蔵庫の前で貪り食ってしまった。その勢いたるやすさまじく、満腹になっても食欲が抑えられない――その酷い味にもかかわらず――で食べ続け、吐き気を催し、それでも食べ続けたため、吐瀉物が気管へ逆流して取れこんでしまった。冷たい姿で発見されたのは一週間後の正午のことだった。その顔は空腹に苦しんでいるようだったが、原形を保ち大理石像のように白くなっていた。

そしてその政治家の葬列式でのこと。歩みを止めないランナーたちも薔薇の花を手向けて過ぎさろうとしたが、丁度その時棺桶の中から「今は何時だ？」と声がした。と同時に、釘打ちされた蓋をどんどん叩く音がする。驚いた教父や親族は慌てて棺桶を叩き割った。瞬間、政次官は「眩しい！」と叫んで跳ね起きた。このことは翌朝の新聞でも報道され、一部では「タブーを犯した奇跡だ」とか「票集めのペテンだ」と騒がれたが、ひと月もすれば科学雑誌にパリスナンヤの不死効果についての論文が掲載された。とはいえ、この論文も発表されるや否や注目の的となる一方で、この科学史的に脈絡ない発見には大きな懐疑が寄せられた。不死というものがそもそもあり得るのか、死生観を巡って生物学者から宗教学者、引いてはテレビの前の主婦までもが考えるようになった。だが復活したB氏は

取材を受けていった。「この世には二種類の人間がいる。理解してもらえない人間と、理解させる人間だ」そんなスローガンを掲げ、彼らは自分たちの「理解」を真理と決め込んでいた。B氏は自分がよみがえったのはパリスナンヤを食べたことが原因だったと信じて疑わなかった。

　そのB氏の一言の影響は大きかった。冷凍庫の中で眠っていた大量在庫のパリスナンヤは注文が殺到し、巨大貨物船に積もうと並べられていたコンテナは再びトラックに乗せられ全国を流通した。

「生命保険会社が倒産したよ。他にもその影響で経済は壊滅状態かな」

「経済のことなんて考えるなんて偉いことだね。死生観の一つも片付かないのに」

「両方とも今に消え去る議論だよ。そんなことで頭を使うのは、愚人か貧民のすることだ」

「いいじゃないか、どうせ生きていられんだ。何もしないには十分な時間が、何かするのは長すぎる時間があるんだ」

　こうしてアメリカや日本、ユーロ圏の国がパリスナンヤを一斉に買い占め始めた。輸出制限もなされ、貧困国はまたもやもとの貧困へ陥ってしまった。不死の評判が高まったパリスナンヤは美食家の間でも評判となり、珍味としてもてはやされた。そうした不死となった人びとは、自らをパリスナンヤ族と名乗り、国連から勧告が入ったことをきっかけに連合を組み始めた。共同戦線を組むための協議も空虚執り行われ、核ミサイルのボタンが押されかもしれないと危ぶまれた。どうせ核のあとに残るのはパリスナンヤ族だけだった。

　不死である彼らは最早怖いものなどなく、一切を無視と決め込んでいた。そんな厚顔な様を曝しているうち、不死の効果とは裏腹に、パリスナンヤは老化を急激に早めることが発覚した。それは研究などという過程を経なくとも、先ほどまで傲慢に不死を誇っていた彼ら自身を見れば一目でわかることだった。パリスナンヤ族は数日に間にすっかり老いさばらえて、硬くなった角質の塊が這いまわるように移動するのが特徴となった。その脇をランナーたちは颯爽と駆け抜けた。ところが巨大なゾウムシのような彼らは誤った情報に騙されたと一転して苦情を寄せ始め、自国の産業を破壊しにかかった。彼らはのろのろとした動きしかできなかったが、その動きを抑える軍隊ものろのろ動いていたため、その争いは一時間経っても、血一滴流れることなかった。そこに絶好の契機と思った貧困国が、抗議活動を越境させ始めた。

　そしてパリスナンヤ族たちの議会堂へ大量の火炎瓶が投げ込まれた。そして天が朱色に染まるほど燦々と燃え輝いた時、核でさえ生き残ると信じて疑わなかったパリスナンヤ族の肉体は瞬く間に蒸発して、陰影は残像となってコンクリートの壁面に残され、そのコンクリートは溶岩のようにどろどろ溶けてしまったので、ありとあらゆる影だけの存在は大地に沈み込んでしまった。抗議スローガンであった「人類は生命を取り返せ」という言葉も人間と一緒に溶けてしまった。燃え盛る焔は核の冬よりもあらゆるものを消し去ってしまった。

もはや誰もいなくなった荒地が広がるばかりだった。そこに干潟一つから掘り起こされた全ての貝が用いられた螺鈿細工の過剰装飾で批判を浴びながらも、かつて栄華を誇った宮殿を再利用した議会堂は、廃墟となっても崩れたりせず、堂々と建ったままであった。そしてその宮殿の庭園を閉ざしている、鮮やかで貪婪に光を咥える茨の巻きついた鉄門には言葉が刻まれている。

「あなたは、わたしであって、彼であり、あれであり、それである」

流麗な書体で刻まれたこの言葉は、時代錯誤な豪勢さを誇る庭園への製作者の密やかな反抗であった。この庭園のあるじはまさに、誰でもあり、突き詰めていえば庭園自身だったのだ。この支配の塊は水彩的に鮮やかな花々に満ちている。馥郁な風吹く中、一連の事件を目撃してきたランナーたちは依然走り続けていた。彼らはどうしてもこの門を通らなければならなかった――そして足踏みをする……。ランナーたちは最早居なくなったあるじでもなければ、誰かも解らぬ彼でもなかった。困惑していたランナーたちの許へ、続けざまに骨張った年寄りの門衛が槍を突きつけ問い質す、

「お前は私でなかったら誰なのか」

しかしランナーたちには答えは必要なかった。その門衛は苔が生え喜びの醜さに吐き気を催す、美形の顔をした天使だった。ただ彼が美形の天使であるには歳を取り過ぎており、醜悪な悪魔になるにはまだまだ若すぎたのだった。彼は遊ぶことすら知らないまま歳をとってしまい、一つたりとも賢くなることもないまま詐欺師を続けていたため、恥じ入って乾いた黄砂となって消え去った。

その黄砂を、何の遠慮もなく足跡を残して西に向かって通り過ぎていくランナーたちはまたも目撃することになった。というのも、これらの事件に関する際限ない捜査を続け、更には厖大な書類を描き上げなければならないことに嫌気がさした警官たちが、警察署から逃亡した後ネットカフェで服毒自殺を図ったのだった。ランナーたちはその警官がパトカーで逃走しているのを追尾するように走ったが、パトカーは途中のネットカフェに一斉に止まったのだった。彼らは個室の中に籠ると、最後の一服をふかし、腰に差した銃を用いるわけでもなく毒をビールに溶かして呷ったのだった。だが、自殺した彼らは自分たちの四肢を手持ちのナイフで切断し、その断面図から新たな牧場の設計図を描きだした。それは血染めの設計図であった。その遺言のような設計図は、密閉パックに収められた状態で警察署に沢山届けられた同情の感涙によって滲んでしまったものの、なんとか実現させようと言う喧伝活動が行われるようになった。

「設計図の公開を至急要請する」

「警官の命は無駄ではなかったことを明かして見せる」

「警官は命を失った後に四肢を喪わざるを得なかった。その苦しみに思いを」

活動は激化し、ゲリラ活動で警官隊と衝突することさえあったが、それでも何千万もの署名が提出されたために、国は応えざるを得なくなり、全国のゴルフ場やスキー場に閉鎖するよう通告がなされた。

牧場の造営が実施される日にいたって、ブルドーザーは問答無用に丁寧に整えられた芝生や人工雪を潰してしまった。ランナーたちはブルドーザーより速く走ったので命からがら逃げおおせたのだが、何も知らずに遊興していた人びとや野生動物を轢き殺し、掻き集めた人頭や猪の頭、狐の同体、そしてそこに混在していたドングリの実を、トラックに積んでもちだしてしまった。そのためドングリの実を喪い、冬籠りの栗鼠が餓死していく中、その死骸に集った狐たちのゾンビ――狐たちは自身の神通力で何とか蘇ることには成功したのだ。それは蓬の葉一枚あれば事足りる簡単な霊術だった――の毛から振り落とされた蛆虫が、栗鼠の死肉を喰らい尽くし、賦課するなり大量の銀蠅が湧き出した。

その塊たるや一つの街を影に収めるほどの大きさであった。肉体の大きさを誇っていた入道雲も、自らの小ささに恥じいり、思い立ったように雨となって消えてしまうほどである。そしてその巨大な蠅の球体は互いの摩擦で高熱を生みだし、自らの身を焼き焦がしながら発光し始めたため、ベテルギウスよりも明るい巨星となって霊峰の剱先に鎮座した。突如示現した原始の神と思われたその球体は、山猿たちが崇めたてまつり、ボス猿は司祭の如く振る舞いをして、真実の姿を一目見ようと直視したために失明した。だが同時に体験したことないような鳥肌が立ち、そのまま禿げあがった赤裸が巨大なイボだらけになってしまった。そして見えなくなった眼の奥で見つけ出した脳内を浮遊する気球団に、歯茎を剥き出しにして怒りを露わにした。これこそ神のお告げであると猿たちは一斉に歯茎をむき出しにして、喚き始めた。

すると山麓は瞬く間に肉色に染まった――それは満開の桜が埋め尽くすが如き光景であった。生き延びた住民の多くは、黒い森が肉色の花で満ちたことに目を疑った。だがランナーたちは見惚れて立ち止まることはしない。一瞥ですべてを見て取ったのだった。通過中衛星カメラはその彼らの様子を中継し、何もかも失って退屈し切っていた人びとは、テレビの前に座り、その姿に感涙をこぼしていた。だが百六日目を迎えた早朝のランナーはこれらの騒動を、夜が明け切る前に全て目撃したのだった。彼らの中で流れる時間は、彼らの走る早さに従って多少のずれがあるようだった。そして冬風に鳥肌を立て、白い息が一瞬で凍りつくと、氷雫となって幾重にも重なり、彼らの足跡に突き立てられる氷柱になっていく様に気を取られつつも、寝ぼけ眼から垂れる涙に全て忘れてしまった。

（了）

黒牛の絵画

安部孝作

そしてすべての照明が落とされる。誰もいなくなった部屋には一枚の絵画が残されている。端のない長い樫の木のテーブル、それを覆う純白のテーブルクロスは薄闇の中で生々しく、空気の揺らぎによっては白い芋虫がうねるようだった。そこに並べられた銀食器は老年の給仕によって細やかに磨かれ、煤の掃われた燭台には三本の翠色の蝋燭が刺さっている。今、中東風の顔立の壮年の給仕が一つ一つに火を灯して廻っている。鬼灯のように火が膨らむと、透明な蝋が融けて流れ出し、淡い褐色の光がテーブル状を照らす。瞬間に、これまで誰も座っていなかった高背椅子に、獨逸から招かれた来賓が立ち現れた。ネクタイピンや金釦、鎖骨に垂れる真珠のネックレスが端正しくある。暗くて表情までは見えないが、辺りは話声一つ——息遣い一つ——聞こえず、胴体は不動を保ったままであった。等間隔に並べられた燭台の傍らには、蒼白い大きな花弁を広げたオペラ咲きのマーガレットが活けられ、ぬるい空気に仄かに香る甘みをとけこませ、いまだ来ぬ蜂や黄金虫を待つ寂しさに身を震わせている。この長大な部屋の空気をかき混ぜため幾つもの扇風機が天上からぶら下がっている。その扇風機が全て同時に、また一巡した、その時この端のない直線的な大広間の中心点に設えられた古時計が、大鐘を揺らして来るべき時の音を響かせた。音は泡となり、扇風機の羽根の端に絡みつくなり弾けて消える。大理石が組み上げられた部屋の四方の壁に彫り込まれた、豹を模したような彫刻の舌先にぶら下げられた幾つものガス灯が一斉にともった。光度が徐々に上がるにつれて、時が再度流れ出したように宴が始まった。どの人もその淀みない所作で、その余りに完璧な動きに思わず人の皮膚を被った機械が動いているのではないかという印象を与える。そういった人々の中、ただひとり相変わらずじっと浮かないまま、銀皿にのった合鴨のローストに釘づけになっている、垢抜けない少女がいた。極東の国日本の九州に炭田を幾つも所有するという豪商の娘であったキョウコは、この宴に来るのには前々からかなり躊躇していたのだが、頑固で横暴な父の、今にも筋張る拳骨を見るだけで、招待に応じることに首肯したのであった。彼は招待主の獨逸人の名前を読むこともできないほどであったため、ここに来る資格はないと思っていた。辺りでとびかう異国の言葉と哄笑、カチカチとなる食器やグラスの音が聞こえてきても、最早キョウコには街中の雑踏と同じようなものであった。しかしキョウコは空腹であった。せめて眼の前に出される食事だけは遺さずに平らげてしまおうと思った。

だが、彼女の食欲も湧きあがったところで、正面に飾られた、金縁にはめられた黒い牛の絵画のせいで、たちどころに失せてしまう。その絵の黒牛の傍らに居るのは貧しい農夫で、その角に縄を結いて強引に連れて行こうとしているが、舌を突き出し、充血した白眼はぬめり、巨大な穴のような瞳を爛々とさせた黒牛はびくともしない。牛のわき腹にはアルファベートのIとアラビア数字の2-1焼き印がある。牛はこの農夫のものなのか、それとも今にこの農夫が盗もうとしているのだろうか。足元の草は枯れ、放埒に巻いた蔓が不気味な蓬色の植物、背景のくすんだ空色の雲、農夫の頭に乗った、撚れて黄色も褪せた襤褸襤褸のハンチング、それに抑えつけられただけのぼさぼさで脂っけの多い不潔な髪、剃られない鬚、太い指先の荒々しく溝の入った大きく分厚い爪、目元の皺に溜まった眼脂、踏ん張る足元に盛り上がった土が、赤黒い血を沁み込ませていること、それらすべてが物語るものが何か、キョウコは思いを巡らせたが、判然としなかったため、「どうして食堂にこんな絵を飾るのかしら」と不機嫌に思っただけだった。だがキョウコは気付かなかった、雲が覆い隠して暗くなった昼、眼鏡も持てない目の悪い農夫が力づくで引っ張っているその牛は、既に死んでいることに……。今までとまっていた分を取り返すかのように時を刻む時計は異様な速さで廻っていた。次第にその動きも緩やかになり、宴の雰囲気も発条が伸びきったようだった。顔の見えない人影も、扉の向こうも、隣の部屋も、天上の上も、床の下も、失せていく気がした。金の房がついた緋色のカーテンは重く閉ざされている。キョウコは外界から遮断されている感覚を覚えた。風、動物、鳥、何もいないのかな、そう思った時、突然精巧なガラス細工でできたシャンデリアが灯りをともしてこの大部屋を照らし出した。煌めくガラス、反射する銀食器の数々、照りかえす果物の皮、喜んだ表情を映し出す鏡、絹のテーブルクロスは銀雪のようで、目が痛むほどに眩しく、皮膚は焼け焦げそうだった。

第二の宴が始まったのだ。着飾った紳士淑女に、令嬢が再度談笑に華を咲かせ、蝋燭はもう控えめに、それでいて恥ずかしそうに震え、急激に融け切った。マーガレットは花弁を落としテーブルクロスを黄色い花粉で汚した。銀皿の料理も殆ど平らげられ、ワインも何本も空けられていた。顔を真っ赤にして唇の色を青黒くした男たちが濃緑のボトルとともに床に転がっている。紫煙が濃く充満し、燻された獨逸の令嬢の金髪は少し艶を失った。毛のない猿のような、卑猥な笑い声が次第にあがると、耳を押さえた少年少女は眠たげに瞼を下ろし、眉毛をくすぐったく感じている。キョウコも少し疲れを感じていた。

そこへ漆黒のヴェールを被った一人の若い女が給仕に耳元で囁いた。俄かに照明は落とされ音楽が奏でられた。聞いたこともない東方のぼやけた音像。夜明けの海辺を思わせる。潮風はまだ弱々しい。寝覚めの火照った頬を涼しく撫でる。瞼の裏には太母の微笑みを映す。水平線上では早起きの漁師たちが網を投げかけている。異国の旅人を乗せた巨大な客船が、厳かに波を切っている。雲が海に融けてゆく。砂浜は本物の星屑で埋まった。キョウコは星の尖った

破片を拾って、髪を飾り、ヴェールを裂いて、アーモンド色をした美しい肌を曝して踊り始めた。給仕が銀皿にのせた色とりどりのマカロンを踊るキョウコの許へ運ぶ。空腹はないけれど、手が伸びる。甘くほんのりクリームが香るマカロン、歯触りが良く、口腔内で溶けてしまう生地は、指で少し強く押すと崩れて痕が付く。誘われるように、でも迷いなく、齧ってみた。不思議にも甘みはなくて、肉の味が微かにすると、あとは唾液の味がした。マカロンは、赤、萌黄、菫、桃、黄、孔雀石、と色取り取りで、その中の一つに、ラピスラズリのように、星を散りばめた群青色の天盤を模したものがあった。それは明らかに忠実な鉱物を再現していたが、質感は柔らかな宇宙の球体にそっくりだった。食べてみようか、止しておこうか。キョウコはその真理のように美しいマカロンを齧るのが惜しく思った。しかし迷っていると、羽団扇で深紅に塗った唇を隠した貴婦人が、近寄ってきて、欲望で濁った眼を細めているではないか。キョウコはさっと手に取り、躊躇いなく一口齧った、が――その時、建物が大きく揺れ、カーテンの裏から拉げた枠が飛び出すと、ガラスの破片が銃弾のように飛び散った。灯りは消えて、どんよりとした暗闇が辺りを包む。来賓はみな狂乱し、椅子を蹴り倒し、テーブルをひっくり返した。木が圧し折れる音や、板が踏み破られる音、銀皿が裂ける柔らかで鋭い音が混然一体の音の塊となった。あまりの騒がしさに耳は痛む。喧々諤々として退去し、やがて人の声は一切しなくなった。闇はすうっと薄くなり、まだ一つ灯る蝋燭の近くで、キョウコはまだ奇妙な踊りを続けていた。だが、音が一切しなくなると、彼女は壊れかけの椅子に座った。乱雑に散らばったあらゆる残骸に囲まれて眠ろうと瞼を閉じた。そして鼻と口を開いた。潮風を胸一杯に吸い込んだ。一面に広がる星屑の浜は燃え尽きて、灰の中から蟲が動き始めた。月と太陽は巡り巡って、何度も満月を迎え、何度も新月を迎えた。今は夜だろうか、昼だろうか、漸く眠気が強まって、植物が騒がしく唸り始めたころ、雨が降り始めた。キョウコは唇に着いた雨水を舌で舐めとった。とても甘い水滴を、乾ききった干物のような舌に何度も転がした。キョウコはもう目を開かなければならないかもしれないと思って天を仰いだ。すると天は随分高く昇っていた。星が歩むたび金属音を響かせていた。まだ眠ろうとしてもいいのだろうかと、少し安心した。とはいえ簡単に寝つけない。キョウコは苛立って立ち上がろうとした。ところが身体は動かなかった。蟻が脚の上を這っているのがわかるけれど、頭さえ動かない。翌朝、太陽が南中し、蝉がけたたましく喚き立て、牛がげっぷを三回した頃キョウコは眼を醒ました。そして目の前に一度会ったことのあるような異国の男が、青い目を虫めがねに拡大して見つめているのに気が付いた。聞き覚えある言葉を二三呟いて、大きなカメラを構えた。強烈なフラッシュが焚かれる。そしてリュックサックからスコップを取り出すと、キョウコの足を傷つける。痛い、痛い、と咽び泣いて、涙を流したら、細い種子がほろりと地面に落ちた。男は種を拾い上げて、虫めがねで丹念に観察すると、胸ポケットに入れた。鬚を撫で、喉を鳴らした。足許に、キョウコの赤い液体が広がり、黒く肥えた土は、どくとくと血管が脈打つよ

うに、吸い込む。土饅頭は膨らんでゆき、とうとう牛の形となった。男は牛の角に縄を結って、引っ張った。銅像か、あるいは地面から生えた岩石のように重くて動かない。踏ん張ると足許の地面は押し込まれたマカロンの生地のように凹んだ。綱引きは幾昼夜已むことなく、キョウコの身体は動くことを忘れ、綱引きもそのまま凍りついたかのように動かなくなった。

そしてすべての照明が落とされる。誰もいなくなった部屋には一枚の絵画が残された。

（了）

今月のレビュー

ブックレビューからお菓子まで！
好きなものをなんでも語ってしまおうというコーナー。

とーい
立ち食いそば屋のラーメン

最近は立ち食いそばでも普通のおそば屋に負けないお店が多いけれど、個人的には醤油の効いた、昔ながらの真っ黒で安っぽい味のものが心底うまい、とおもう。

１０年ほど前、神奈川県の大船駅構内で食べた立ち食いそばはつゆの色、塩っ辛さとも申し分なく、朝、通学途中に寄り道し、急いですすったのが忘れられない。近年、食べる機会に恵まれたものの往時の塩っ辛さを感じなかったのは、年をとった自分が濃い味を好むようになったせいだろうか。

ここ数年よく通ったのは銀座の場外馬券場近くの「みちのくそば」。のれんの向こうはカウンターという昔ながらの立ち食いそば屋で、注文すると竹のひしゃくであたたかなつゆを丼にそそぐ光景が時代劇に出てくるそばの屋台を思い起こさせた。

甘ったるくない濃い目のつゆには飲み干したくなるだけの誘惑があったけれど、もはや幻の味となって久しい。２０１１年の９月に閉店し、跡地は宝くじ売り場になった。日常によろこびを提供する店から、夢を売るお店へと変わったのは銀座という土地柄のせいかと、これを書きながらふとおもった。

いま通っているのは、有楽町のガード下にある「新角」。うなぎの寝床みたいな店内に傾きかけたカウンターと、こちらも雰囲気満点である。余談だが、東京国際フォーラム、丸の内のオフィス街が近いのに、いまだ女性客を幸か不幸か見たことがない。

ここのおすすめが、ラーメンである。お店の名誉のためにいうと、そばを食べてみようかなと店へ行っても、せっかく来たからラーメンを食べなければ、と思ってしまうから食べたことがないだけで、それほど新角のラーメンは旨い。現に、世の立ち食いそば喰いやラーメン好き、はたまたB級グルメファンをも魅了し、朝早くから夜遅くまでラーメンをすするひとが後を絶たない。

新角のラーメンは、どうしてここまでひとを惹きつけるのか。

３９０円という安さもあるだろうが、理屈はいらない。下品なほどに旨い、それだけである。旨いというより、んまい、だ。

小さなチャーシュウに海苔、ネギ、わかめと見た目は普通のしょうゆラーメンだが、スープを一口すすれば、押し寄せる旨さに脳と舌がよろこびで麻痺してくる。今日も「新角」でラーメンを食べてよかった、と感謝せずにはいられない。続けざまに、少し柔らか目にゆでられたモチモチの麺をすすれば、ラーメンはこうでなくちゃ、と思うこと必死である。

「新角」のラーメンには、いまのラーメンが忘れた大切ななにかが残っている。（了）

芦尾カヅヤ

必読！ネット文藝

『お前ら、月がすごく綺麗だぞ』

（ラリイ・ニーヴンの傑作短編『無常の月』を２ｃｈのスレッド風味に）

http://drupal.cre.jp/node/2238#comment-386

（二〇〇八年十一月十一日）

ＲＰＧライター　銅（あかがねだい）　大　氏による、

ＳＦ小説のオマージュ

「※２ｃｈ風小説じゃねーか！」と拒絶反応を示す人も多いだろうが、騙されたと思って読んで欲しい一作。

二〇〇八年十一月十三日、満月の夜、突如として月明かりが強くなった。深夜零時を回ったころ、巨大掲示板２ちゃんねるに、一つの※スレッドが立てられる。

――お前ら、月がすごく綺麗だぞ――――

２ちゃんねるの※住人たちは、「俺も見た」「すげー※月光条例みたいじゃねーか」と、いつものノリで※レスをしていくが……。

スレッドは０時11分に始まり、１時を回ったあたりで終わる。２ちゃんねるのスレッドは通常、最初の書き込みを含めて千のコメントがつくとスレッドが終了する。この作品は、千のコメントのうち33だけ取り出した形になっており、いわゆる「※２ｃｈまとめサイト」の体裁をとっている。

コメント番号や書き込み時間などを見ると、前半ではゆっくりとしたペースで進んでいた書き込みが、後半にいくにつれて早くなっていることが分かる。コメントの345と511の間で経過した時間は、１分にも満たない。345から511の間の、わずか42秒の間に書き込まれた165のレスは、作中では書かれていない。この間にはどんな書き込みがあったのか、このスレッドを埋めた人々は、何を思ってディスプレイに向かっていたのか。

原作はＳＦの巨匠ラリイ・ニーヴンによる、文庫本47ページの短編小説。一九七一年に書かれたアメリカのＳＦの傑作が、現代日本と融合し、ネットの世界に奇妙なリアルを生みだした。

なお、過去の気象情報によると、二〇〇八年十一月十三日は満月で、全国的に快晴であった。この日、あなたの目に映った月は、どんな輝きを見せていただろうか。

※２ｃｈ風小説…２ちゃんねるのスレッド風に仕立てられた物語。『電車男』のように、スレッドの住人たちのやりとりによって物語が進行していく。『電車男』は、実際に多くの人によって書き込まれたスレッドを書籍化したものだが、２ｃｈ風小説は、作者が「もしこういうスレが立ったら」という設定で、様々な人間からのレスポンスを１人で書き分けて進行する。２ｃｈ風小説は、イラスト投稿サイトpixivで「小説投稿」が始まった二〇一一年頃から増え始めるが、本作が書かれた二〇〇八年当時はまだあまり見られなかった。なお、２ちゃんねるのスレッドの書籍化といった動きは、『電車男』が二〇〇四年十月、『ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない』が二〇〇八年六月。現在の２ｃｈ風小説の源流と見られる「もし〇〇の世界に２ｃｈがあったら」というスレッドが２ちゃんねる内に立ち始めたのが二〇〇八年頃である。（参照:pixiv 辞典）

※スレッド…インターネット上の掲示板に立てられた、特定の話題などを話す１つの枠のこと。略称は「スレ」。

※レス…レスポンスの略。スレッド内に書かれたコメントの１つ１つを指す。

※住人…インターネット上の特定の掲示板に常駐している人を、このように呼ぶ。ネットスラングの一種。

※月光条例…藤田和日郎による漫画。作中に、青い光を放つ巨大な月の描写がある。

※２ｃｈまとめサイト…２ちゃんねるのスレッドを特定のテーマに沿って収集・編集しているサイト。通常、掲載されるスレッドはサイトの管理人によって編集され、要点のみが掲載される。

ガン・ガン・ガン・ガン

安部孝作

第一回レビュー　Gang Gang Dance　[Eye Contact]

Gang Gang Dance Biography

ポスト・ロック～エレクトロニカ他、サイケデリック、ゴシックロック、ノイズロックなどなど、ポップと前衛を自在に行き来する実験的な音楽創作について評価が高い。　アンダーグラウンドでの活動実績が多かったが、　様々なリズムとテクスチャーが渾然一体となったハイブリッド・サウンドをポップレコードに凝縮した　2008年発表の『セイント・ディンフナ』が広くメジャー・ヒットを記録。　世界のインディー・ロック・ファンの知るところとなった。（中略）ニューヨークの尖鋭的な音楽集団としての存在感を印象付けている。

[出典　Wikipedia1]

暗さというものの両義性、人は闇の中で戦慄と安寧を覚える。
この両義性は、タイトル[Eye　Contact通り、
見つめ合う瞳の暗さと輝きを表現している。
また言葉なしでの伝達が、ベンヤミンのいう言語があくまで伝達可能性を伝達すると述べたのと逆に、非言語的な言語行為がここで行われている。
こころに赤く融けて、鬱蒼と繁茂する密林と摩天楼の隣組。ここではコミュニケーションが存在しえない。言葉が通じないわけでも意味が理解できないわけでもない。
ただ単に、不必要なのだ。暗さの中、だれもが光を求めて歩くうちに、
やがて光などなくても音声が全てを伝えることに気が付く。
光は明らかにするが、それは表面的で、裏表／光陰という対立構造が拮抗する世界である。
だが音楽は、媒質を通して、媒質そのものを震わせて、内部的で、それ自体が現れる。
人は音楽に、聞こえる場所と聞こえない場所があるのを知っている。
例えば、建築に置き換えてみよう。広大なフロアに、柱を幾つか立てる。
その隙間に私たちは居住空間を得る。柱は空間を支えるためだけでなく、
空間における不在と影をつくり出す。

この柱の位置が奇妙であれば、建物は崩壊する。あるいは住めないだろうし、
影ばかりで、明るさが伴わない。影は鋭く細くなければならない。
そして、空間には必ずしも意味が伴わない。
ここはキッチン、ベッドルーム、トイレ、風呂場、仏間……
といった壁や仕切りによる障壁があればその空間には意味ができる。
しかし、眼の前には柱があるだけだ。
その空間はどこまでも切れ目なく続く。
音楽というのは、残響となっていつまでも聞こえている。
脳内に無限の地平線を拓き、何時までも何度でも再生させる。
それはＭＰ３の普及に伴う現象ではない。音楽とは固よりそういうものなのだ。
一瞬一瞬の生成的な「なにものか」が耳で知覚される時、わたしたちはそれを音楽とみなす。たとえ「なにものか」が音楽以外のものであっても、耳で知覚するものは音である。
耳は塞がれない器官である。
固より聖性的な世界において、音ほど敏感な気配を齎すものがあるだろうか。
耳は常を常とし、開いたり閉じたりする口とは全く異なる。耳は無限を聞きとる。
アルバム中[∞]と銘打たれた曲が三曲ある。
そしてそれこそ、曲と曲の隙間であることを自白しながら、
音楽が絶え間ない運動であることを明らかにする。
両義性というのは、円環的な構造をもっており、
物事の本質の外縁を廻り続けている。
また、瞳も色彩の環である。
そして見つめ合うもの同士はお互いを映し合い、巡らせている。
またウロボロスの環のように表も裏もなくなる世界がある。
裏と表の消滅が引き起こすのは、現われと消滅の連続である。
一曲目[Glass　Jar]における、絶え間ない輝かしい音の連続は、
単一的な線ではなく、複合的な重なり合いの中で生じている。
ガラス瓶には裏と表がなく、繋がった中と外がある。
だから満たされ、反響させる存在である。
そこには境界などない。言葉やリズム音節や間は音と音を繋ぐための、
聴こえない音が鳴っている場所である。それは本質的に時間というものを表象させる。
ここに砂時計のイメージが浮かぶ。砂時計は運動によって時間を計るものではない。
砂時計は運動において時間を示している。
この曲が音像そのものによって現れているように、そこにあるものとして現前する。
私たちはもうそれを、何かを伝えるための音楽とは思わないだろう。
ただ自己へ移入してくる硝子の瓶、不可視の異物が胸に刺さって

いる感覚、
あるいは自己が閉じ込められる硝子の瓶、意味のない透明な世界へ閉じ込められる感覚、
この終局における孤独感と、音像の中で味わわれる愉悦は、
まさに今、落とされようとしているガラス瓶の破局であり、
中身のピンク色の砂がさらさらと舞い散る様である。
その後も東洋風な雰囲気を感じさせる旋律が続き、彼らの趣味を伺わせる。
なによりもボーカルのリズが、祈るかのような歌声をもっているのも彼らの特徴である。
祈りとは手段ではない。祈りは届けられるものではなく、届くかも知れない思念であり、意志を上昇させる。
祈りにおいて、その中身はおのずから消えてゆき、純粋な祈りが産まれて来る。
段階的な対象をもった「願い」の充足／消滅を経て、祈りという行為自体において、祈りが達成されることとなるということだ。
それはある虚無的な本質をもってはいるが、祈りは聖なるものから聖性を感受し、
内的に聖別するもの（戦慄・恍惚といっ体験の極地）を捧げ、
聖なるものを存在者が立脚するその足裏（存在）となるのである。
祈りは願いを超越しており、聖なるものを眼の前とした言葉なき放心の境地である。
伝達することが実現されるのではなく、伝達する可能性が届けられている。
そしてその聖なるものは、眼前に広がる砂漠（＝放心状態）である。
彼らはこの曲を作成する前に砂漠へ赴いたと言う。
その時流紋の描かれた大地になにを思っただろうか。
書いては消えてしまう砂上においては、そこでは字は音声と変わりがなかった。
その巨大な砂の塊が、刻々と変幻していく様をどう見つめたのだろうか。
そこには無尽蔵の砂がありながら、存在を拒絶する。そこでは誰もなににもなれない。
砂漠を支配するものはただ力だけであり、砂は砂として砂漠を形成する力の権現である。
それがそれほどまでに軽々しく風に舞い、姿形を変えてしまう。
つまり、ここにも硝子瓶のイメージが再登場する。
瓶の口を吹けば、笛の音が鳴り、可視でありながら具体性を置き去りにした虚無。
このアルバムはまさに、夜の歓楽の熱気と、夜の砂漠の冷気が混淆する世界である。
荒漠とした世界に響く無限の音楽と、その一点で星よりも暗い小さな光を囲んで、
快楽を覚える人たちの暗さが現れている。
暗さというものの両義性、その中で人は熱狂と孤独を覚える。(了)

『タイマ』嶽本野ばら

小野寺那仁

小説が風俗を描写するのを忘れて久しい気がする。嶽本野ばらは年齢不詳の「乙女のカリスマ」と称される現代風俗に明るい作家で「ロリヰタ」ではファッション雑誌の彷彿とさせる語彙が散りばめられる。けれども彼はいわゆる文学にも詳しい作家で、ボルヘスや澁澤などがよく現れる。だが、古典の知識もまたファッションなのではなかろうか。彼の作品は「告白」であり「現実」から離れられず、多少の誇張の域を出ていない。悪く言えば想像力の小説ではなく「私小説」の範疇に属する。ストーリーもあり人物の性格も書かれている。言ってみれば時代に逆行するような近代小説を書こうとしているのだ。彼の好むファッションや音楽はポストモダン的であるかも知れないが、あるいは彼の根なし草的な発想や登場する人物もまたすぐに自殺を企てそうな脆弱性や環境の不幸を携えている。けれども彼の小説があくまでも近代小説であることに私は多少、驚きを感じているのだ。　最近では「破産」という作品が上梓されている。大麻不法所持で逮捕された事件を題材にしたのがこの「タイマ」である。この題材からも彼は現実を少しアレンジしたものを書いているといえよう。

その逮捕された後の刑事とのやりとり。

「今、インターネットで検索して貰ったものをざっと読んでるんだけど、お前、本当に小説家なんだ」

「……」

「それも結構、有名らしいじゃん。有名人がこんなことしちゃ、一般人よりマズいだろう。影響力ってものがあるから。どんなのを書いてるんだ？　推理ものとか時代ものとか、いろいろあるよな」

「普通の小説です」

「普通って？　司馬遼太郎みたいなのか」

「否、そうではなく」

「普通じゃぁ、解らないよ。この資料には、三島由紀夫賞にノミネートって書いてあるけど、三島由紀夫って……あれだよな、確か、右翼で、腹切って自殺した作家だよな」

「ええ」

「お前も、そういうのか？」

僕は面倒臭くなって「はい」と応えます。

「普通」の小説は一般人なら「司馬遼太郎」なのだが、嶽本の「普通」は三島由紀夫なのだろう。ここにこの作家の自己紹介めいたものを感ずる。『タイマ』は大麻に対しての考えなどはほとんど語られていない。大麻所持による逮捕の経緯と留置所生活などほぼ現代の獄中記といえる。少しあらすじを書くと「私」はふとしたことからデリヘル嬢と知り合いになり樹脂大麻を吸引することになる。そのデリヘル嬢は失踪するが彼女の友人の「あい」とたまたまストリップ劇場で知り合う。あいは踊り子であるが嶽本の愛読者である。嶽本が魅かれるのはカート・コバーンの曲をバックにストリップを演じていたからであり、二人ともカートを愛し、崇拝している。長く語り合うがこの部分は音楽評論めいている。嶽本はこの真実を権力に隠し隠ぺいするのに成功し保釈される。デリヘル嬢があいと知人という部分を黙っていたのだった。だが、あいは嶽本にさらに同一化するために覚醒剤に手を染めてしまう。嶽本は過去につきあった三人の女性が自殺乃至失踪したことからあいを全力で庇いたくなるという筋である。（嶽本とはいうものの「僕」であってこの挿話が事実であるとは思われないが）

「僕」はカートが早く死んだことを最後には否定しようとする。彼は生を望む。年老いても根なしのままで生きていくのを望むというテーマであって、これはやはりあまりに近大小説っぽいのであるが扱っているのは現代的でもある。だが、私は彼のリアリズムを貴重にさえ思うし、いとおしくも感じるのだ。彼は、現代の安吾や太宰なのかもしれないとさえ思う。そして近代の亡霊に取り憑かれているのは図らずも現代日本の精神構造の縮図になっているのではなかろうか。

（了）

朝靄の食感

崎本智（6）

薄黄色の生地が樹木の年輪のように幾層にも重ねられたお菓子、バームクーヘンはわたしのお気に入りの洋菓子のひとつである。わたしはあのデパートなどで販売されている小さく切り取られた個包装の上品なおいしさも勿論愛してやまないが、それ以上に魅力的なのはやはり大きな切り株のようなバームクーヘンにまるごとかぶりつく瞬間である。生地は湿度を保たなければぱさぱさになってしまうから常に冷蔵庫の中でしっとりとした感触をのこしておくためにも厳重に管理せねばならない。かぶりついた瞬間のあのしっとりとした朝靄のようなうるおいに満ちた生地の感覚がなければバームクーヘン体験は魅力を半減させてしまうだろう。

子供の頃はショートケーキやチョコレートケーキが好きでバームクーヘンという存在はケーキ界のなかでもどちらかというと二軍に在籍するような冷たい眼で見ていた。ところがだ。生クリームやフルーツ、はたまたチョコ―レートの記憶さえ舌から忘却を許してしまうほどに二十代後半にさしかかったころからこの朝靄の食感のケーキが大好きでたまらない。噛めば噛むほどに重ね焼きされた弾力に歯が喜び、舌が次の味を待望していくのはまさに癖になる美味しさといって過言ではないだろう……。

わたしの願い―編集後記に変えて―

とーい（Li-tweet二月号編集長）

ツイッター文芸部と出会ったのはいつだったろう。いつかは覚えていないが、ツイッター文芸部の初代部長であったイコさんをフォローさせていただいてから、すべてははじまった。

以来2年ほど、イコさんとの淡い付き合いが続く。イコさんは文学、私は好きな声優のことをつぶやき共通点はなかったが、互いにブロックせず、分かり合える小説や思いがツイートされれば、ときどきリプし合った。

だから、およそ文学、文芸と程遠い私が入部を希望した際、イコさんは驚かれたと同時に、口にされなかったが不安であったと思う。

後に不安は的中、私はすぐに幽霊部員となり、連絡すらせず部を休んでいたが、当時、イコさんからかけていただいた言葉に救われた。部に希望や要望があれば教えてほしい、活動が負担になっていないか、とイコさんは私を責めることなく心配してくださった。

Li-tweet2月号の編集長を引き受けるにあたり、ふたつの目標を自分に課した。

ひとつは、Li-tweetを無事に発刊すること。

もうひとつは、Li-tweet の作成をきっかけにツイッター文芸部の部員がまとまること、その絆と出会いと再会のきっかけをLi-tweet が担うことであった。

ツイッター文芸部が生まれ3年、多くの出会いと別れがあった。

初代部長、イコさんが寛容の心で私に接してくださったこの場所が、文芸を愛する人たちにとって、いつまでもあたたかな場所であってほしい。初めて来る旅人にも、旅立つひとにも、戻ってくるひとにも、抱えきれないほどの花束を送る場所であり続けてほしい、そう願わずにはいられない。

最後に謝辞を。

創作活動のなか、表紙を作ってくださったうさぎさん。実質的な編集長としてすべての作業にかかわってくださった。

編集会議でのアイデアもさることながら、部員への連絡など地味なことを率先してくださったカヅヤさん。高い美意識、懇切丁寧な校正講座は部員のレベルをひと段階もふた段階も上げてくださった。

部のムードメーカー、小野寺さんの笑い声と細やかな心遣いも忘れられない。いつだって部の潤滑油であった。

編集部員でないツイッター文芸部のみなさんにも、多く助けられた。あらためて、感謝の気持ちを伝えたい。

そして、何よりお読みいただいたすべてのかたに、心からのありがとうを届けたい。

初代部長、イコさんが耕されたツイッター文芸部に、前号、編集長として6さんが蒔かれたLi-tweet という名の種は、いま大きく芽吹きつつある。

傍から見れば小さな一歩かも知れないが、いつまでもこの歩みが続くことを信じて。

記録（二〇一二年十二月～二〇一三年一月）

○入退部まとめ

入部・退部　なし

○合評会記録

◆「Li-tweet」（創刊号）合評会　小説部門①

日時：十二月二十一日　22：00～

場所：Skype

ホスト：小野寺

参加者：うさぎ、Rain坊、緑川、安部

対象作品：うさぎ「あまりある自信」／しろくま「モノクローム」

小野寺「ファナティック」

◆「Li-tweet」（創刊号）合評会　小説部門②

日時：十二月二十八日　22：00～

場所：Skype

ホスト：安部

参加者：小野寺、日居、緑川、常磐、6

対象作品：安部「流離」／常磐「體」／Rain坊「やるせない」

◆「Li-tweet」（創刊号）合評会　小説部門③

日時：一月四日　22：00～

場所：Skype

ホスト：カヅヤ

参加者：緑川、小野寺、とーい、うさぎ、安部、あんな、6

対象作品：緑川「夏の終わりに」／カヅヤ「羽」

◆「Li-tweet」（創刊号）合評会　評論部門

日時：一月十一日　22：00～

場所：Skype

ホスト：日居

参加者：小野寺、とーい、カヅヤ、安部、る

対象作品：日居「杳子試文」／る「泉鏡花『高野聖』について」

とーい「私たちの旅は、いま、はじまったばかりのところなのだ」

◆「Li-tweet」（創刊号）合評会　詩部門

日時：一月二十五日20：00～

場所：Skype

ホスト：る

参加者：安部、あんな、日居、とーい、ことこ(友情参加)

対象作品：あんな「あの子の眼についての法則」

安部孝作「青い非常階段」

○定例会・イベント記録

◆忘年会

日時：十二月三十日 20：00〜

場所：Skype

参加者：いろいろな方が来てくれました。

◆定例会

日時：一月二十日 20：00〜

場所：Skype

参加者：6、る、あんな、安部、日居、うさぎ、常磐、小野寺、Rain 坊、とーい、カヅヤ

議題：・「Li-tweet」（二月号）原稿の校正担当決め

・宣伝の方針

・二月号特集のキャッチコピーの報告

・四月号編集部隊の決定

◆カヅヤさんの校正講座

日時：一月二十日 21：30〜（定例会同日）

場所：Skype

参加者：6、る、あんな、安部、日居、うさぎ、常磐、小野寺、Rain 坊、とーい、カヅヤ

○その他記録

掲示板を新しく開設（二〇一二年一一月）

http://twibun.bbs.fc2.com/

Li-tweet 二月号

発行日

平成二十五年二月一日

発行者

twitter 文芸部

オフィシャルアカウント https://twitter.com/twibun

ホームページ http://twibun.jimdo.com/

執筆者（五十音順）

芦尾カヅヤ　@akeriya

安部孝作　@KOUSAKU_Abe

うさぎ　@Mainlander_11

小野寺那仁　@onoderak

しろくま　@fotonovear

崎本 智（6）@SakiAllende

とーい　@10011040

常磐誠　@evagredra

日居月諸　@das_unheimliche

る　@ru_mentanpin

本誌はホームページに掲載している「Li-tweet 二月号」をプリント用に編集し直した物です。記事の無断掲載を禁じます。

© twitter bungeibu 2013